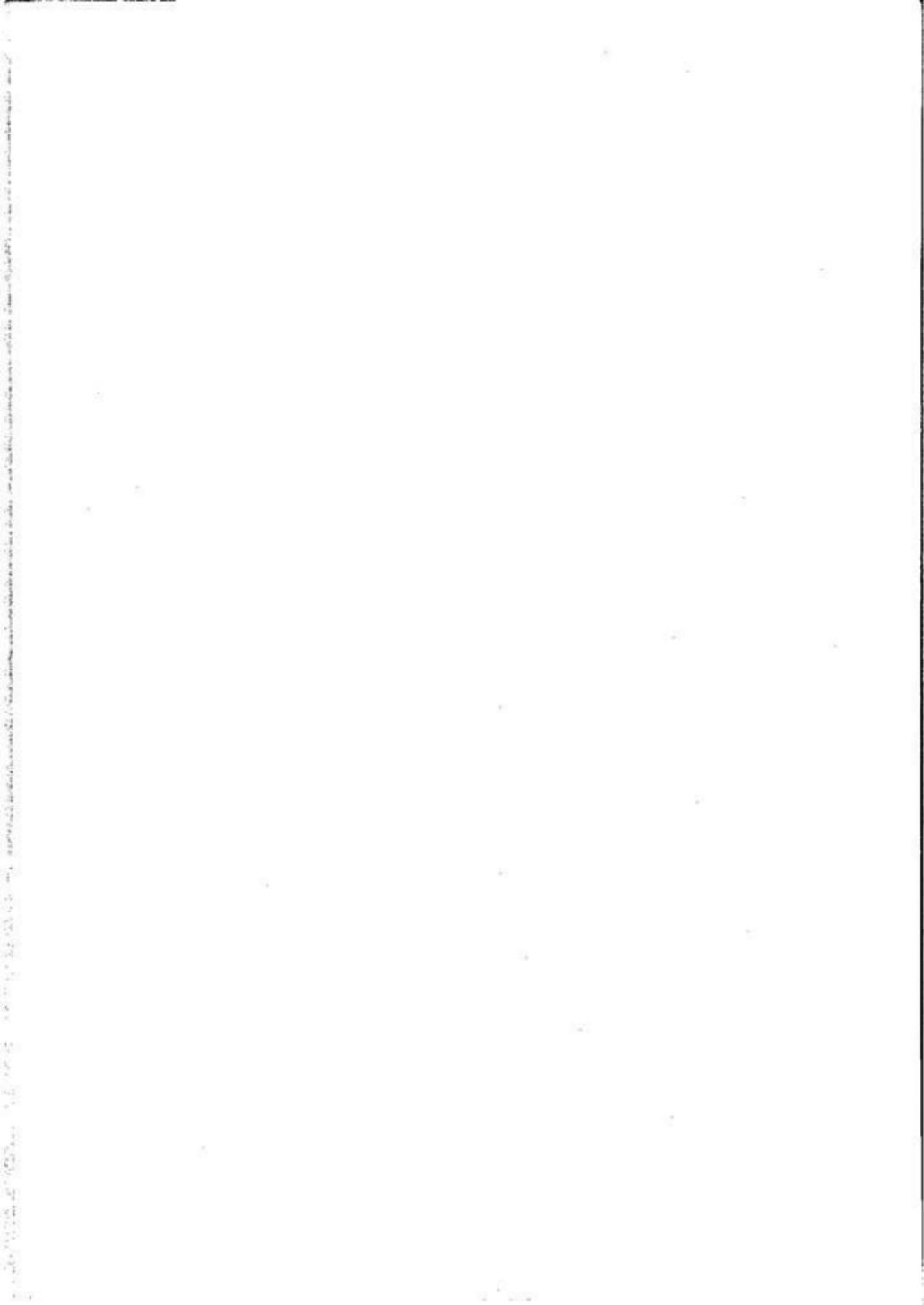


八尾市文化財調査研究会年報
昭和62年度

1988年

財団法人 八尾市文化財調査研究会





八尾市文化財調查研究会年報

昭和62年度

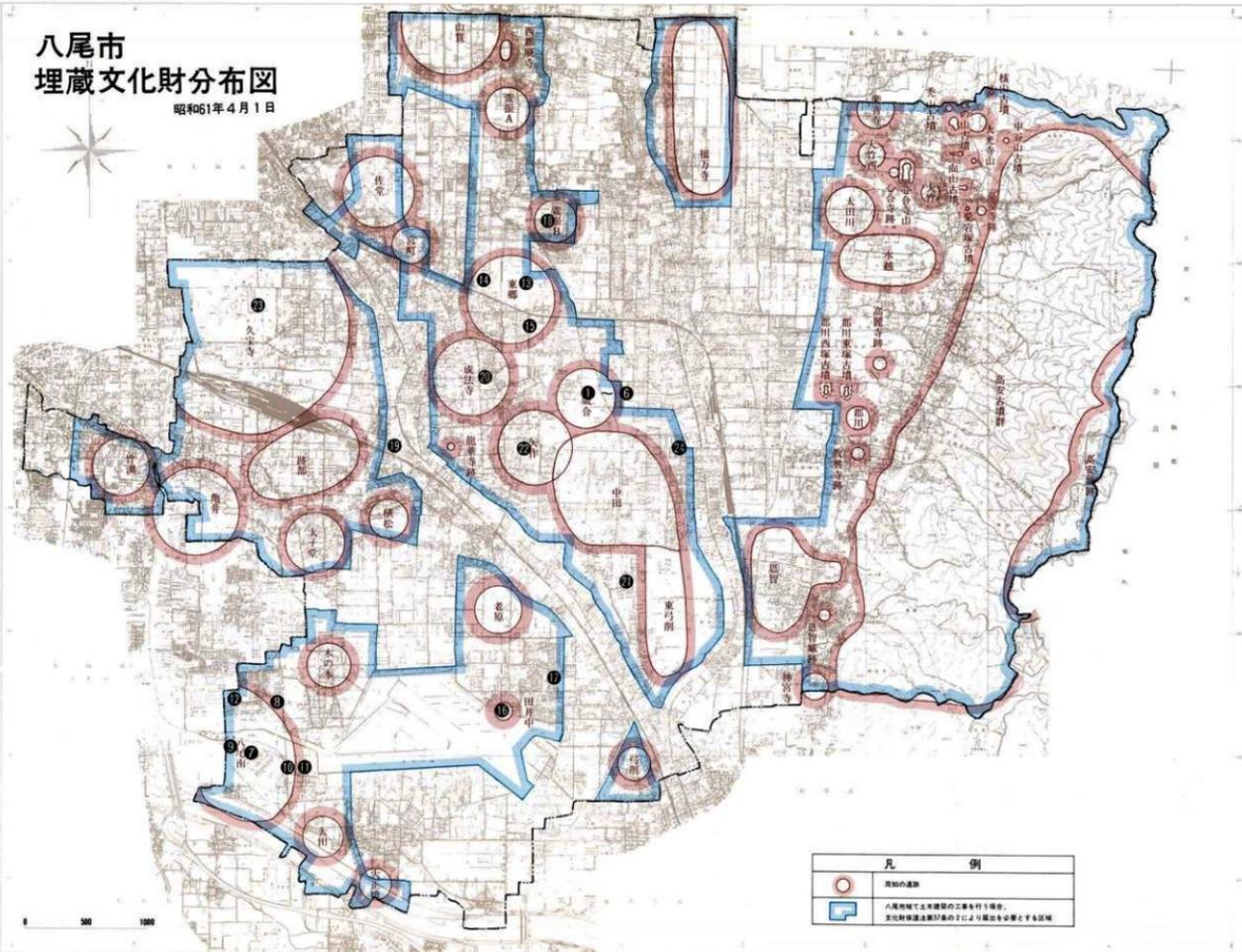


1988年12月

財団法人 八尾市文化財調查研究会

八尾市 埋蔵文化財分布図

昭和61年4月1日



凡 例	
	埋蔵文化財
	八尾市域で土木建設の工事を行った場合、 埋蔵文化財調査の対象となる区域



八尾市立歴史民俗資料館

序 文

河内平野の歴史は、その成立からも「水との戦い」と言われていますが、発掘調査から検出された遺構からも、当時の河川の氾濫のすさまじい様子がうかがわれ、当時の人達が積極的に水に立向い、今日見られるような肥沃な土壌が作りだされた経過が確認されつつあります。

この河内平野の南東部に位置する八尾市は、その市域内に貴重な各時代の遺跡が数多く存在し、これらの文化財を開発による破壊から保護し後世に伝承することが、現在に生きる我々の責務であると認識し、行政と一体となり、埋蔵文化財の保護と都市開発の調和を図りつつ、発掘調査を進めているところであります。

財団法人八尾市文化財調査研究会が、市教育委員会の指示により実施いたしました昭和62年度の発掘調査は、前年度の2倍以上に相当する24件22,535平方メートルありまして、これらの調査の結果、数多くの遺物・遺構が検出され、その成果は、八尾市の歴史を考える上で、極めて重要な要素をもつものであると思っております。

また、当財団設立の大きな目的のひとつである市民文化の啓蒙事業につきましても、「発掘調査よもやま話」をテーマにした文化財講座の開催、小学生高学年を対象にした「チビッコ文化財夏期学級」の開設、遺跡から出土した遺物の展示或は発掘現場の公開等を例年どおり実施し、これらの催しを通じて文化財の保護思想の普及活動に努めてまいりました。

なお、懸案の八尾市立歴史民俗資料館も、千塚3丁目180番地に完成し、62年11月8日開館、その管理運営を委託されることになり、開館記念展「八尾の歴史と文化財」等の開催や図録の刊行を実施しましたが、今後ともその設立趣旨に従い、特色のある有効な企画を積極的に進めてまいりたいと考えております。

本書は、昭和62年度に実施した調査事業の概要を収録して年報としたものですが、近い時期に事業別の詳細な報告書の刊行を予定いたしております。

最後になりましたが、各調査の実施にあたり、ご指導とご協力をいただきました関係機関各位に対しまして、心から厚くお礼を申し上げます。

昭和63年4月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 福 島 孝

例 言

1. 本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、昭和62年度に行ったすべての事業の概要をまとめたものである。

1. 埋蔵文化財の発掘調査の項は、調査担当者（高萩千秋・原田昌則・成海佳子・西村公助・駒澤敦）の報告をもとに、原田が検討を加えてまとめた。全体の編集は原田が行った。

1. 本書に掲載した地図は、八尾市発行の2500分の1を使用した。埋蔵文化財分布図は、八尾市教育委員会発行（昭和61年4月1日）のものをもとに作成した。

1. ~~本書と埋蔵文化財発掘調査報告書の内容が異なる場合は、報告書の内容を正しいものとする。~~

~~本書の性状上、内容の~~
~~不十分では~~

→ 性状
→ 補填

④ 本書の性状上、内容の不充足に71111は
後日発行する埋蔵文化財発掘調査報告書による補填
するものとする。(4/14 森田先生からアドバイス)

本文目次

埋蔵文化財分布図

巻頭図版

序文

例言

I 八尾市文化財調査研究会の概要	1
II 埋蔵文化財の発掘調査	4
1 小阪合遺跡（第9次調査：小阪合町1丁目～2丁目地内）	7
2 小阪合遺跡（第10次調査：南小阪合町1丁目・青山町3・5丁目地内）	11
3 小阪合遺跡（第11次調査：南小阪合町1丁目11）	18

4	小阪合遺跡 (第12次調査:小阪合町2丁目48-2)	20
5	小阪合遺跡 (第13次調査:青山町5丁目)	22
6	小阪合遺跡 (第14次調査:南小阪合町4丁目)	25
7	八尾南遺跡 (第5次調査:若林町1丁目76)	26
8	八尾南遺跡 (第7次調査:木の本110)	34
9	八尾南遺跡 (第8次調査:若林町1丁目87)	39
10	八尾南遺跡 (第9次調査:若林町1丁目23)	46
11	八尾南遺跡 (第9次調査:若林町1丁目23)	46
12	八尾南遺跡 (第10次調査:西木の本4丁目4-1)	50
13	東郷遺跡 (第24次調査:桜ヶ丘3丁目124-1)	52
14	東郷遺跡 (第25次調査:北本町2丁目240~242)	56
15	東郷遺跡 (第26次調査:荘内町1丁目28~31)	59
16	田井中遺跡 (第5次調査:空港1丁目81)	62
17	田井中遺跡 (第6次調査:志紀町西3丁目)	65
18	菟振B遺跡 (第4次調査:緑ヶ丘1丁目118)	68
19	跡部遺跡 (第3次調査:安中町3丁目26・19-5)	71
20	成法寺遺跡 (第3次調査:清水町2丁目2-5)	87
21	東弓削遺跡 (第3次調査:八尾木東3丁目38)	91
22	矢作遺跡 (第2次調査:高美町4丁目141)	95
23	久宝寺遺跡 (第2次調査:久宝寺6丁目226)	99
24	中田遺跡 (第1次調査:中田2丁目29・39)	112
III	委託業務	143
	(1)八尾市立歴史民俗資料館の管理	143
	(2)環山楼の公開	145
	(3)建造物の調査	145
IV	啓発普及事業	146
V	その他	147
VI	受贈図書一覧	148

I 八尾市文化財調査研究会の概要

1 目的

八尾市域の文化財の調査・保存・研究を通じて文化財の保護を図るとともに、市民の文化財保護に関する理解を深め、地域文化の発展に寄与し、永く後世に文化遺産を継承することを目的とする。

2 事業内容

- 八尾市立歴史民俗資料館の管理
- 埋蔵文化財の発掘調査および内業整理業務の受託
- 埋蔵文化財以外の文化財の調査研究
- 文化財に関する講座・講演会及び展示会の開催
- 八尾市教育委員会からの受託業務
- その他目的を達成するために必要な業務

3 設立年月日

昭和57年7月1日

4 事務局所在地

大阪府八尾市清水町1丁目2番1号

5 歴史民俗資料館所在地

大阪府八尾市千塚3丁目180番地の1

6 役員および組織（昭和63年3月31日現在）

顧問 1名

理事 13名（理事11名・監事2名）

評議員 14名



文章事務

調査室—埋蔵文化財の調査研究・啓発事業及びそれらに関わる庶務
事業室—歴史民俗資料館の管理・事業運営及びそれらに関わる庶務

7 役員・職員の名簿 (昭和33年3月31日現在) (50音順)

顧問	山脇 悦司	八尾市長 (前理事長)
理事長	福島 孝	
理事	今川 金治	八尾商工会議所会頭
"	越智 妙子	八尾市議会議員
"	貴島 正男	八尾市郷土文化推進協議会会長
"	田代 克巳	帝塚山短期大学教授
"	辻合喜代太郎	帝国女子大学名誉教授
"	西谷 信次	八尾市教育長
"	古橋 了	星電器製造株式会社取締役社長
"	松浦 慶太	八光信用金庫理事長
"	森岡安治郎	八尾市農業協同組合組合長
"	吉房 康幸	大阪府教育委員会文化財保護課長
監事	伊藤 弘	八尾商工会議所副会頭
"	西崎 宏	八尾市取入役
評議員	浅井 允品	堺女子短期大学教授
"	安積 出高	やお文化協会常任理事
"	阿部 孝	やお文化協会事務局長
"	上井 久義	関西大学教授
"	奥野 俊雄	やお文化協会常任理事
"	櫻井 敏雄	近畿大学助教授
"	榎橋 利光	大阪府立八尾高等学校教諭
"	塚口 義信	堺女子短期大学教授
"	徳丸 義也	八尾市議会議員
"	細見 二郎	八尾商工会議所副会頭
"	松井 一雄	八尾市理事
"	三上 幸寿	八尾市史編集委員
"	村川 行弘	大阪経済法科大学教授
"	山中 孝一	八尾市教育委員会社会教育部長

調査室

調査室長 市森 管宣（事務局長兼務）八尾市教育委員会より出向

調査係 高萩 千秋

〃 原田 昌則

〃 成海 佳子（嘱託）

〃 西村 公助（〃）

〃 駒澤 敦（〃）

庶務係 富田よしの

〃 中谷 暎子（嘱託）

事業室

事業室長 安井 良三（市立歴史民俗資料館長兼務）八尾市教育委員会より出向

事業係長 浅井 隆三 八尾市教育委員会より出向

事業係 小谷 利明

〃 尾崎 良史

8 理事会・評議員会の開催

会議名	開催年月日	議 事 内 容
第1回理事会	昭和62年6月12日	・評議員の選任に関する件 ・理事の選任に関する件 ・昭和61年度事業報告承認の件 ・昭和61年度収支決算承認の件 ・歴史民俗資料館の見学
第1回評議員会		
臨時理事会	昭和62年8月7日	・理事長の選出に関する件 ・寄附行為の一部変更に関する件
臨時評議員会		
第2回理事会	昭和63年3月30日	・昭和63年度事業計画承認の件 ・昭和63年度収支予算承認の件
第2回評議員会		

II 埋蔵文化財の発掘調査

当調査研究会が、昭和62年度に八尾市教育委員会の指示を受けて実施した発掘調査は24件を数え、面積は22535.26㎡を測る。ただし、7八尾南・8八尾南については、一部昭和61年度から継続する事業であるため、上記の数値がすべてを示しているとは言い難いが、昭和57年7月に当調査研究会が発足して以来、調査件数および面積においても最も多い年度であった。当然ながら、発掘調査は開発行為に伴う一過性のものが多く、経済状況の推移に影響されて増減することは言うまでもない。今年度を実施した発掘調査23件中7件が民間の開発に伴う発掘調査で、例年に較べても高い比率を示している。

昭和62年度に実施した発掘調査では、旧石器時代～室町時代までの遺構・遺物を検出しており、多大な成果を得た。以下、おもな検出遺構・出土遺物を時代順に列挙する。

旧石器時代 遺構は検出されていないが、9八尾南遺跡では後期旧石器時代末期に比定される有舌尖頭器が2点検出されている。

弥生時代前期 7八尾南遺跡で掘立柱建物で構成される建物群の他、同時期に比定される自然河川ではシガラミが検出されている。また、掘立柱建物群に近接して礎石墓一基が検出されている。16田井中遺跡では、初めてこの時期に比定される土坑1基を検出し、新たな知見を加える結果となった。

弥生時代中期 この時期の遺構は、16田井中遺跡で土坑6基・溝2条が検出されている。17田井中では包含層を確認している。

弥生時代後期 この時期の遺構は、4小阪合遺跡・7八尾南遺跡・9八尾南遺跡・13東郷遺跡・16田井中遺跡・24中田遺跡で検出した。7八尾南遺跡で水田・9八尾南遺跡で井戸・土坑・溝の他、方形周溝基を検出したことにより、既往調査結果を含めて八尾南遺跡の当該期の集落構成が明確になった。13東郷遺跡では、土坑・落ち込み等の遺構が検出され、当該期の集落の中心が遺跡推定範囲の北東部に存在することが明らかになった。16田井中遺跡では、土坑1基が検出されており、この結果から田井中遺跡が弥生時代全般にわたる遺跡であることが確認された。24中田遺跡では井戸1基を検出し、中田遺跡の当該期の集落が東方に広がることが明確になった。

古墳時代前期（庄内式期・布留式期） 4小阪合遺跡・5小阪合遺跡・7八尾南遺跡・13東郷遺跡・14東郷遺跡で、これまでの調査結果と同様居住域の一部を検出している。7八尾南遺跡では今回の調査区の結果、この調査地付近が既往調査で確認されている当該期の居住地の南端に当たることが確認された。14東郷遺跡では、井戸・水田等が検出された。特に、当該期の水

田については、新発見であり今回の調査の結果、集落を構成する居住域・墓域・生産域が明確になった。18葦振B遺跡では、溝の中から布留式の新段階に比定される土器が多量に出土している。

古墳時代中期 5小阪合遺跡・9八尾南遺跡・12八尾南遺跡・13東郷遺跡でこの時期の遺構を検出した。9八尾南遺跡では、古墳時代中期中葉の居住域と古墳時代中期末から後期初頭の古墳（方墳）3基が検出された。特に、古墳時代中期中葉に比定される井戸から、木製鞍の前輪が出土している。

奈良時代 20成法寺遺跡・21東弓削遺跡・22矢作遺跡で検出した。20成法寺遺跡では、掘立柱建物・土坑を検出し、既往調査の結果を含めて当該期の居住域が南北100mにわたって広がることが判明した。22矢作遺跡では、自然河川を検出している。

平安時代 この時期に比定される遺構は、12八尾南遺跡・14東郷遺跡・17田井中遺跡でいずれも後期から末期に比定される水田が検出されている。

室町時代 9小阪合遺跡・12小阪合遺跡・13小阪合遺跡では、この時期に埋没した河川（旧楠根川）が検出されている。

中・近世 19跡部遺跡で旧長瀬川の堤防を検出している。



八尾南遺跡(第8次調査) SE-4調査風景

昭和62年度発掘調査一覧表

番号	遺跡名	調査地	原因者	原因	調査期間	面積(m ²)	担当
1	小阪合(第9次)	小阪合町1丁目・2丁目	八尾市	ポンプ場放流渠	昭和62年 4月7日～7月31日	330	高萩
2	小阪合(第10次)	山小阪合町1丁目 青山町3丁目・5丁目	八尾市	区画整理	昭和62年 8月1日～12月10日	1,023	高萩
3	小阪合(第11次)	南小阪合町1丁目11	八尾市	ポンプ場放流渠	昭和62年 8月21日～9月5日	276	高萩
4	小阪合(第12次)	小阪合町2丁目48-2	八尾市	ポンプ場放流渠	昭和62年 昭和63年 10月12日～1月18日	400	高萩
5	小阪合(第13次)	青山町5丁目	八尾市	区画整理	昭和62年 11月2日～12月25日	260	高萩
6	小阪合(第14次)	南小阪合町4丁目	八尾市	特殊入孔	昭和63年 1月11日～1月13日	15	高萩
7	八尾南(第5次)	若林町1丁目76	三起商行動	社屋	昭和61年 昭和62年 9月1日～7月4日	4,500	駒澤
8	八尾南(第7次)	木の木110	八尾市	仮称 第2大正小学校	昭和62年 2月10日～7月8日	3,043	西村
9	八尾南(第8次)	若林町1丁目87	新道不動産	店舗付住宅	昭和62年 昭和63年 5月18日～1月31日	9,961	原川 駒澤
10	八尾南(第9次)	若林町1丁目23	八尾市	ポンプ場建設	昭和62年 7月23日～8月19日	150	駒澤
11	八尾南(第9次)	若林町1丁目23	八尾市	導水路建設	昭和62年 7月23日～8月19日	55	駒澤
12	八尾南(第10次)	西木の木4丁目4-1	近畿財務局	宿舍建設	昭和62年 7月27日～10月5日	696	成海
13	東郷(第24次)	桜ヶ丘3丁目124-1	奥山長次郎	共同住宅	昭和62年 4月8日～4月23日	258	高萩
14	東郷(第25次)	北本町2丁目240 ～242	小倉幸太郎 吉岡 九一	共同住宅	昭和62年 7月20日～9月17日	900	西村
15	東郷(第26次)	荘内町1丁目28～31	日本電信 電話公社	地下施設建設	昭和63年 1月16日～1月29日	49	高萩
16	田井中(第5次)	空澄1丁目81	大阪 防衛施設局	通信施設	昭和62年 10月19日～12月5日	216	西村
17	田井中(第6次)	志紀町西3丁目	近畿財務局	宿舍建設	昭和62年 11月24日～12月26日	348	成海
18	雲張B(第4次)	桜ヶ丘1丁目118	八尾市	市営住宅	昭和62年 昭和63年 12月3日～3月19日	1,200	西村
19	跡部(第3次)	安中町3丁目25 19-5	東興殖産物	集合住宅建設	昭和62年 4月6日～5月18日	1,150	成海
20	成法寺(第3次)	清水町2丁目2-5	八尾市	体育館建設	昭和62年 5月25日～7月15日	812	高萩
21	東馬場(第3次)	八尾木東3丁目38	近畿財務局	宿舍建設	昭和63年 1月7日～2月20日	594	成海
22	矢作(第2次)	高純町4丁目141	船八尾納税協会	事務所建設	昭和62年 10月23日～11月18日	160	成海
23	久宝寺(第2次)	久宝寺6丁目226	西川 創之	共同住宅	昭和63年 2月16日～2月29日	210	駒澤
24	中田(第1次)	中田2丁目29-39	松村幸太郎	共同住宅	昭和63年 2月22日～3月11日	100	成海

1 ^{こさかい}小阪合遺跡（第9次調査）

調査地 八尾市小阪合町1丁目～2丁目

調査期間 昭和62年4月7日～昭和62年7月31日

調査面積 330㎡

はじめに

今回の発掘調査は小阪合ポンプ場放流渠築造工事に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した発掘調査の第9次調査にあたる。

当遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に位置しており、現在の行政区画では青山町・南小阪合町・小阪合町一帯にあたる。なお、当遺跡周辺では、南に中田遺跡、南西に矢作遺跡、西に成法寺遺跡、北西に東郷遺跡、北に壹振B遺跡が近接して存在している。

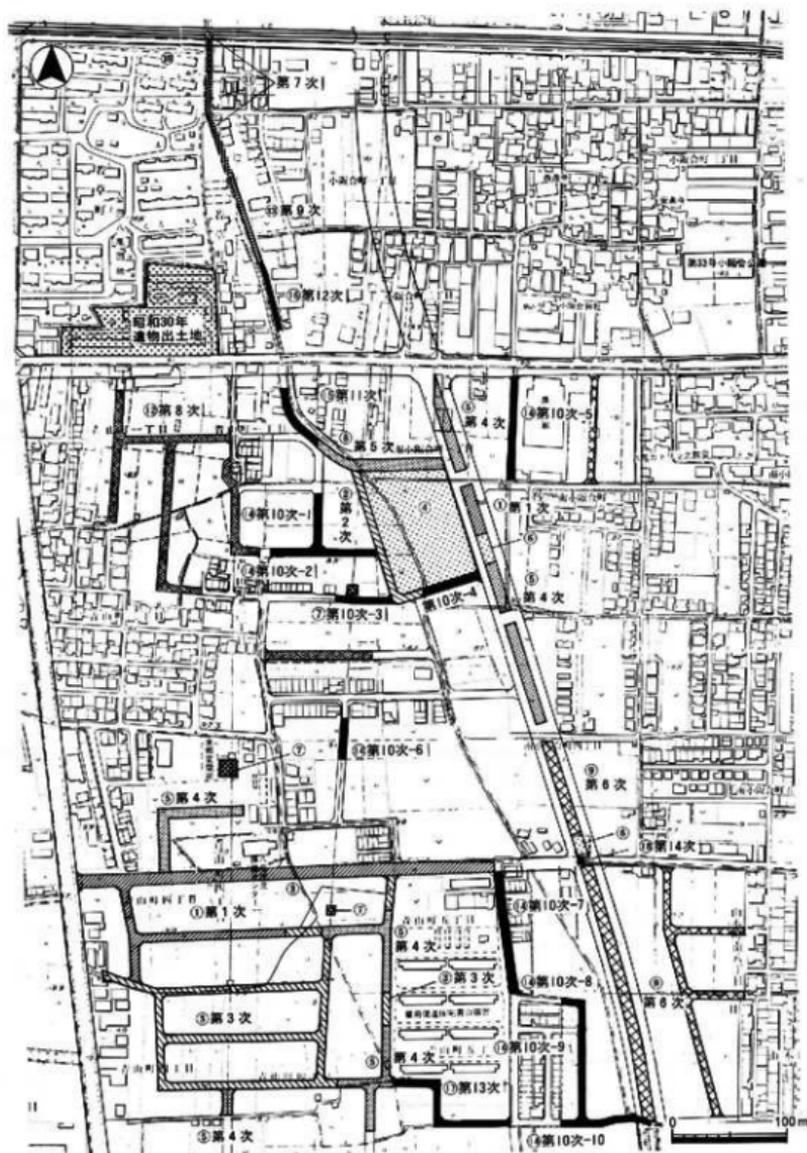
当遺跡内では昭和57年度以降、八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業および関連事業に伴って継続的に発掘調査が実施されており、それに先立って大阪府教育委員会（2回）・八尾市教育委員会（2回）・当調査研究会（8回）によって昭和61年度までに計12回にわたる発掘調査が実施されてきた。それらの調査結果を総合すると、小阪合遺跡は弥生時代後期から近世に至るまで連続と営まれ続けてきた遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は、現楠根川の流路部分80mで昭和61年に当調査研究会が実施した第7次調査地の南側にあたる。

調査概要

調査地は現楠根川の流路部にあたるため、流路を鋼矢板で東西に二分（東調査区・西調査区）して調査した。掘削に際しては、今回の調査と同様現楠根川の流路で実施した第7次調査の調査結果を参考に現地表下1.8～2.3m前後までを機械掘削、以下0.4mを人力掘削とした。人力掘削終了後、さらに機械掘削を実施し、東側調査区では現地表下3.5m、西側調査区では現地表下6mまでの堆積土層を観察した。

調査の結果、調査区全域の現地表下1.8m前後以下で埋没した河川跡を確認した。ただ、限定された調査区であるため埋没河川の規模・深度等は不明である。出土遺物は、河川の内部に堆積する砂層から弥生時代後期～鎌倉時代に比定される雑多な土器の小破片が少量出土している。



調査区周辺図

まとめ

調査の結果、第7次調査と同様田植根川の流路を確認した。この流路は、出土遺物からみれば少なくとも鎌倉時代までは現植根川（川幅5m）よりは大規模な川であったことが確認できた。

周辺の発掘調査一覧表

番号	調査主体	調査期間	文献	発行
①	当調査研究会(第1次)	57年11月～58年3月	小阪合遺跡：御八尾市文化財調査研究会報告10	1987.3
②	同上(第2次)	58年6月～58年7月	小阪合遺跡：御八尾市文化財調査研究会報告11	1987.3
③	同上(第3次)	58年10月～59年3月	同上	同上
④	大阪府教育委員会	58年10月～59年3月	(小阪合ポンプ場建設に伴う発掘調査)	—
⑤	当調査研究会(第4次)	59年6月～59年11月	昭和59年度事業概要報告 御八尾市文化財調査研究会報告7	1985.4
⑥	大阪府教育委員会	59年9月～59年11月	(都市計画事業淀川南部流域下水道工事に伴う発掘調査)	—
⑦	八尾市教育委員会	59年11月	八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書 御八尾市文化財調査研究会報告11	1985.3
⑧	当調査研究会(第5次)	60年1月～60年3月	小阪合遺跡発掘調査概要 御八尾市文化財調査研究会報告8	1986.3
⑨	同上(第6次)	60年7月～60年12月	昭和60年度事業概要報告 御八尾市文化財調査研究会報告9	1986.4
⑩	八尾市教育委員会	61年2月	八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書 御八尾市文化財調査報告12	1986.3
⑪	当調査研究会(第7次)	61年4月～61年8月	昭和61年度事業概要報告 御八尾市文化財調査研究会報告14	1987.12
⑫	同上(第8次)	61年8月～61年12月	同上	—
⑬	同上(第9次)	62年4月～62年7月	今回報告	—
⑭	同上(第10次)	62年8月～62年12月	同上	—
⑮	同上(第11次)	62年8月～62年9月	同上	—
⑯	同上(第12次)	62年10月～63年1月	同上	—
⑰	同上(第13次)	62年11月～62年12月	同上	—
⑱	同上(第14次)	63年1月	同上	—

1 小坂台遺跡



西調査区全景(北から)



東調査区全景(北から)

2 ^{こざかい}小阪合遺跡（第10次調査）

調査地 八尾市南小阪合町1丁目・青山町3・5丁目

調査期間 昭和62年8月1日～昭和62年12月10日

調査面積 1023㎡

はじめに

今回の発掘調査は、八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴うもので、昭和57年度から当調査研究会が継続して発掘調査を実施している。今回の発掘調査は当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した第10次調査にあたる。調査対象地は区画道路予定地の10ヶ所で広い範囲に分散している。

調査概要

調査地は10ヶ所（第1調査区～第10調査区）の区画道路予定地で、道路予定地の中央部に幅2.5mのトレンチ（但し第5調査区は幅1m）を設定した。掘削に際しては、既往調査の結果を参考にして現地表下0.3～0.5m前後までを機械掘削し、以下0.4～0.5mを人力掘削して遺構・遺物の検出に努めた。

1面ないし2面にわたる調査を実施した結果、各調査区で弥生時代後期・古墳時代前期（庄内式新相～布留式古相）・古墳時代中期・平安時代・鎌倉時代～室町時代・近世の概ね6時期にわたる遺構・遺物を検出した。

第1調査区

調査地は、当遺跡推定範囲の北部に位置するもので、調査区は南北方向に長さ46mを測る。調査の結果、現地表下0.4m（標高7.7m）前後で鎌倉時代～江戸時代に至る遺構を検出した。検出した遺構は、井戸1基・溝2条である。さらに、現地表下0.8m（標高7.3m）付近では古墳時代前期に比定される土坑1基を検出している。

第2調査区

第1調査区の南部に位置する調査区で、東西方向に長さ94mを測る。調査の結果、現地表下0.4m（標高7.7m）前後で鎌倉時代～室町時代に比定される溝4条、江戸時代に比定される土坑1基・溝9条を検出した。さらに、現地表下0.8m（標高7.3m）前後では古墳時代前期（庄内式新相～布留式古相）に比定される土器溜・溝7条・自然河川4条を検出した。特に、土器溜からは庄内式新相の在産の土器とともに吉備地方・山陰地方の特徴を持つ土器が多量に出土している。

第3調査区

第3調査区は第2調査区の南東部約40mに位置する。東西方向に伸びる調査区で、長さ43mを測る。調査の結果、現地表下0.6m（標高7.7m）前後で古墳時代中期～江戸時代に至る遺構・遺物を検出した。古墳時代中期に比定される遺構には土坑1基、鎌倉時代～江戸時代に比定される遺構には溝6条がある。さらに、現地表下1m（標高7.3m）前後では古墳時代前期（庄内式新相～布留式古相）に比定される自然河川2条を検出した。

第4調査区

第4調査区は第3調査区の東部約20mに位置し、西端は昭和58年度に当調査研究会が発掘調査を実施した第2次調査地の南東部に接する。東西方向に伸びる調査区で長さ36mを測る。調査の結果、現地表下1.2m（標高7.3m）前後で鎌倉時代に比定される溝12条を検出した。これらの溝は、形状からみて農耕に関連したものと考えられる。

第5調査区

第4調査区の北東約130mに位置する調査区で、南北方向に長さ80mを測る。調査の結果、現地表下1m（標高7.1m）前後で平安時代後期に比定される溝6条を検出した。

第6調査区

第3調査区の南約130mに位置する調査区で、南北方向に長さ16mを測る。調査の結果、現地表下2.3m（標高7.8m）前後で鎌倉時代～室町時代に比定される水田と東西方向に伸びる溝3条を検出した。

第7調査区

当遺跡範囲の南東部に位置する調査区で、南北方向に長さ83mを測る。調査の結果、現地表下0.6m（標高8.0m）前後で鎌倉時代～室町時代に比定される溝4条を検出した。さらに現地表下0.7m（標高7.9m）前後では弥生時代後期～古墳時代前期に至る遺構・遺物を検出した。検出した遺構は井戸1基・溝4条・小穴3個・自然河川1条である。

第8調査区

第7調査区南部から東部約30mに位置する調査区で、東西方向に長さ19mを測る。調査の結果、現地表下0.1m（標高8.5m）前後で江戸時代に比定される溝1条を検出した。さらに、標高7.9m前後では弥生時代後期に比定される土坑1基を検出した。

第9調査区

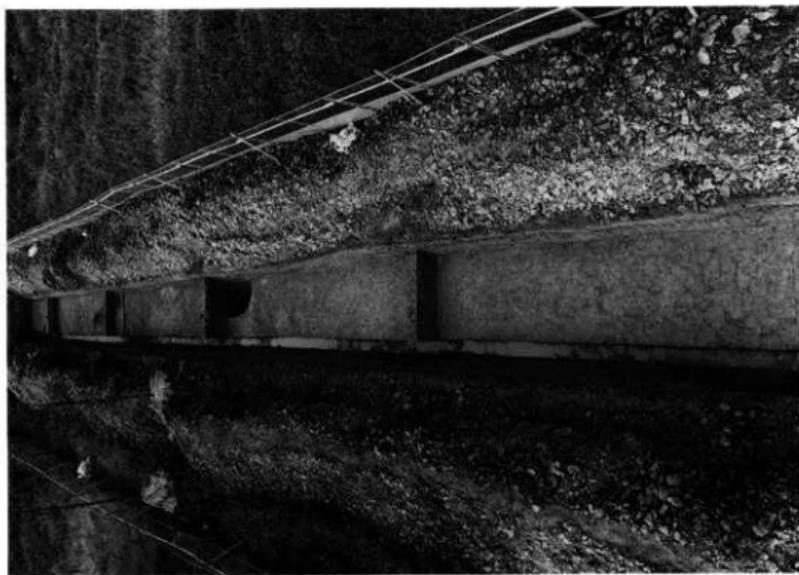
第8調査区東部から南北方向に設定した調査区で、長さ104mを測る。調査の結果、現地表下0.4m（標高8.3m）前後で鎌倉時代～江戸時代に至る遺構を検出した。検出した遺構は鎌倉時代～室町時代に比定される溝13条と江戸時代に比定される溝1条である。さらに、標高7.9m前後で弥生時代後期に比定される土坑6基・溝10条・小穴6個を検出した。

第10調査区

第9調査区の南部に東西方向に設定した調査区で、長さ45mを測る。調査の結果、現地表下0.7m（標高8.4m）前後で鎌倉時代～近代に至る遺構・遺物を検出した。検出した遺物は落ち込み状遺構と溝6条である。このうち、溝はすべて東西方向に伸びるもので農耕に関連したものと考えられる。さらに、標高7.9m前後では弥生時代後期～古墳時代前期に比定される溝2条・小穴10個を検出している。

まとめ

今回の調査では、既往調査と同様弥生時代後期から近世に至る遺構・遺物を検出した。特に遺跡推定範囲の北部にあたる第1調査区～第4調査区では古墳時代前期（庄内式新相～布留式古相）に比定される遺構・遺物が検出された。小阪合遺跡内では、昭和57～59年度に実施した第1次～第4次調査でこの時期に符号する遺構が検出されており、今回の調査の結果、さらに北側へも広がることが確認された。また、遺跡推定範囲の南東部で実施した第9調査区～第10調査区では弥生時代後期に比定される居住域が確認され、この時期の小阪合遺跡内での動向の一部が明らかになった。



第1調査区 第1調査面全景(南から)



第2調査区 第1調査面全景(西から)



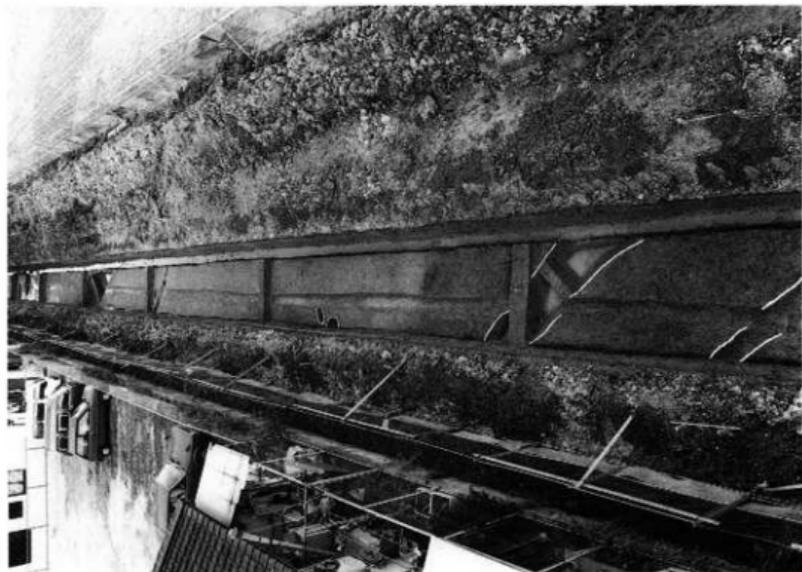
第3調査区 第1調査面全景(西から)



第4調査区 第1調査面全景(西から)



第5調査区 第1調査面全景(南から)



第7調査区 第1調査面全景(南から)



第8調査区 第1調査面全景(東から)



第9調査区 第1調査面全景(南から)



第10調査区 第2調査面全景(西から)

3 小阪合遺跡 (第11次調査)

調査地 八尾市南小阪合町1丁目11

調査期間 昭和62年8月21日～昭和62年9月5日

調査面積 276㎡

はじめに

今回の発掘調査は小阪合ポンプ場放流渠築造工事に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した第11次調査にあたる。調査地は昭和60年度に実施した第5次調査地の北側にあたる。

調査概要

今回の調査地は現楠根川の流路部にあたり、調査の範囲は南北40m・東西6mである。調査対象地が現楠根川の流路部にあたることから、調査地の全面を鋼矢板で囲繞する方法を取った。掘削に際しては、第5次調査の調査結果を参考に現地表下1.8m前後までを機械掘削し、以下0.4mを人力掘削とした。人力掘削終了後、さらに機械掘削を実施して、現地表下6m(標高2.6m)までの土層の堆積状況を観察した。

調査の結果、第5次調査と同様現地表下1.8m(標高7.0m)前後で近世に埋没したと考えられる河川跡を確認した。さらに、そこより約0.4m下層では室町時代に比定される河川跡を確認した。

まとめ

今回の調査では、現楠根川の下層に近世・室町時代に埋没したと考えられる二時期の河川跡を確認した。なお、下流約100mで実施した第9次調査地でも同様の結果が得られている。以上のことから、現楠根川の流路は少なくとも室町時代以降には現在の流路に固定されたことが明らかになった。



第1調査面全景(南から)

4 小阪合遺跡 (第12次調査)

調査地 八尾市小阪合町2丁目48-2

調査期間 昭和62年10月12日～昭和63年1月18日

調査面積 400㎡

はじめに

今回の発掘調査は小阪合ポンプ場放流渠築造工事に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した第12次調査にあたる。調査地は第9次調査地の南側にあたる。

調査概要

今回の調査地は、現楠根川の流路部にあたり、調査範囲は南北80m・東西6mである。調査対象地が現流路下にあたるため、一度に全面調査を実施することが困難であることから、調査区を鋼欠板で東西に二分（東調査区・西調査区）して交互に調査を実施する方法を取った。掘削に際しては、第9次調査の調査結果を参考に、現地表下1.8m前後までを機械掘削し、以下0.4mは人力掘削とした。人力掘削後、さらに機械掘削を実施し、現地表下6m（標高2.6m）までの土層堆積状況を観察した。

調査の結果、第9次調査の結果と同様に現楠根川の旧流路と考えられる河川跡を調査区の全域で確認した。

まとめ

今年度に調査を実施した第9次調査・第11次調査・第12次調査および第5次調査（昭和60年度）・第7次調査（昭和61年度）はすべて現楠根川の流路で実施した調査である。調査の結果、各調査区で近世および室町時代に埋没した河川跡を確認した。特に、室町時代に埋没したと考えられる河川跡は砂層の堆積状況からみて大規模な河川跡であったことが考えられる。また、現流路が旧流路に重複していることが確認されていることから、この付近ではすくなくとも室町時代以降には現在の流路に固定されたものと推定できよう。



東調査区全景(南から)

5 ^{こざかい}小阪合遺跡（第13次調査）

調査地 八尾市青山町5丁目

調査期間 昭和62年11月2日～昭和62年12月25日

調査面積 260㎡

はじめに

今回の発掘調査は八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した第13次調査にあたる。今回の調査地は、当遺跡推定範囲内の南東部に位置し、西端は昭和59年度に当調査研究会が実施した第4次調査地にあたる。

調査概要

今回の調査地は区画道路予定地にあたる。調査地が屈曲していることから、西端から東西方向の長さ33mを第1調査区、第1調査区の東端から南北方向の長さ29mを第2調査区、第2調査区の南端から東西方向の長さ60mを第3調査区とした。掘削に際しては、既往調査の結果を参考にし、現地表下0.3～0.5m前後までの土層を機械掘削し、以下0.4～0.5mを人力掘削とした。

調査の結果、弥生時代後期・古墳時代前期（庄内式新相～布留式古相）・古墳時代中期・平安時代・鎌倉時代～室町時代に比定される遺構・遺物を検出した。

第1調査区

調査では、3面（第1調査面～第3調査面）にわたる調査を実施した。第1調査面では現地表下0.65m（標高8.5m）前後に存在する茶灰色細砂泥シルト上面で、鎌倉時代～室町時代に比定される溝3条を検出した。これらの溝はすべて東西方向に伸びるもので、形状からみて農耕に関連したものと考えられる。第2調査面では、標高8.3m前後に存在する暗茶灰色細砂泥シルト上面で古墳時代前期と古墳時代中期に比定される遺構・遺物を検出した。古墳時代前期に比定されるものには、土坑2基・小穴19個・土器集積、古墳時代中期に比定されるものには、土坑8基・小穴7個・溝2条がある。第3調査面では、標高8.0m前後に存在する淡灰茶色シルト上面で、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される溝2条・小穴15個を検出している。

第2調査区

第1調査区と同様3面（第1調査面～第3調査面）の調査を実施した。第1調査面では、鎌倉時代～室町時代に比定される土坑1基・溝39条を検出した。第2調査面では、古墳時代中期と平安時代に比定される遺構を検出した。古墳時代中期の遺構には土坑4基・溝2条・小穴36個がある。平安時代の遺構には、土坑1基がある。

第3調査区

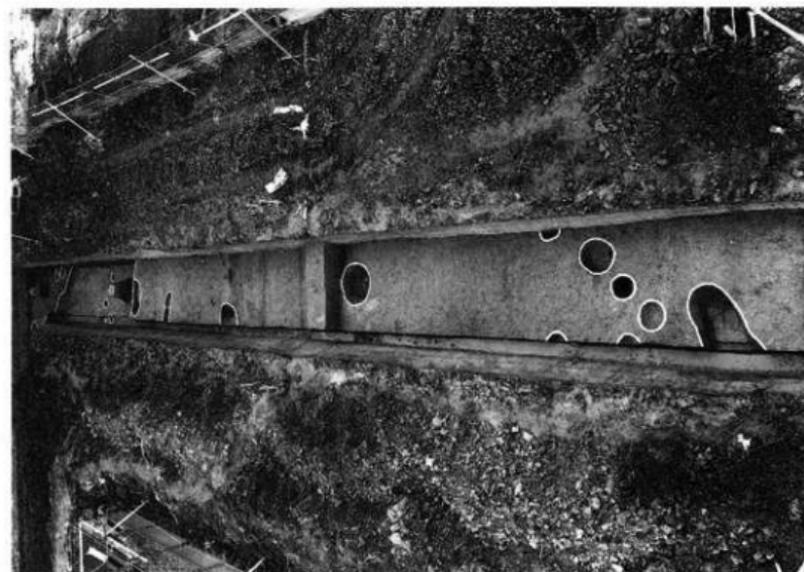
第2調査区と同様3面（第1調査面～第3調査面）の調査を実施した。第1調査面では、鎌倉時代～室町時代に比定される溝10条を検出した。これらの溝は、東西方向に伸びるもの7条と南北方向に伸びるもの3条があり、形状からみて農耕に関連したものと考えられる。第2調査面では、古墳時代前期と古墳時代中期に比定される遺構・遺物を検出した。古墳時代前期の遺構には土坑4基・溝18条・小穴9個・自然河川1条がある。古墳時代中期の遺構には、土坑2基・溝2条・小穴13個がある。第3調査面では、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される溝2条・小穴3個を検出している。

まとめ

今回の調査地は、当遺跡推定範囲内の南部に位置し中田遺跡の北端に接している。調査の結果、弥生時代後期～室町時代に至る遺構・遺物を検出した。特に、古墳時代前期と古墳時代中期に比定される二時期の集落遺構が確認され、これらの時期の居住区域が当遺跡の南側にも広範囲に存在していることが明らかになった。



第1調査区第2調査面(東から)



第2調査区第2調査面(南から)

6 小阪合遺跡 (第14次調査)

調査地 八尾市南小阪合町4丁目

調査期間 昭和63年1月11日～昭和63年1月13日

調査面積 15m²

はじめに

今回の発掘調査は特殊人孔(マンホール)築造工事に伴うもので、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した発掘調査の第14次調査にあたる。調査地は、昭和60年度に当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した第6次調査地第3調査区の北端部から北西部へ約10mに位置する。

調査概要

調査地は、特殊人孔(マンホール)構築部分にあたり5×3mの規模を測る。掘削に際しては、第6次調査地の調査結果を参考にし、現地表下1.8m前後を機械掘削した。その結果、現地表下2m(標高7.3m)までの上層の大半が攪乱を受けていたため、遺構・遺物は検出できなかった。なお、最終的には下層を確認する目的で現地表下6mまでの堆積状況を観察した。

まとめ

今回の調査では、現地表下2m(標高7.3m)までは攪乱を受けており、新たな知見を得られなかった。また、現地表下6mまで実施した下層調査でも遺物包含層は確認されていない。

7 ^{や おみなみ}八尾南遺跡 (第5次調査)

調査地 八尾市若林町1丁目76

調査期間 昭和61年9月1日～昭和62年7月4日

調査面積 4500㎡

はじめに

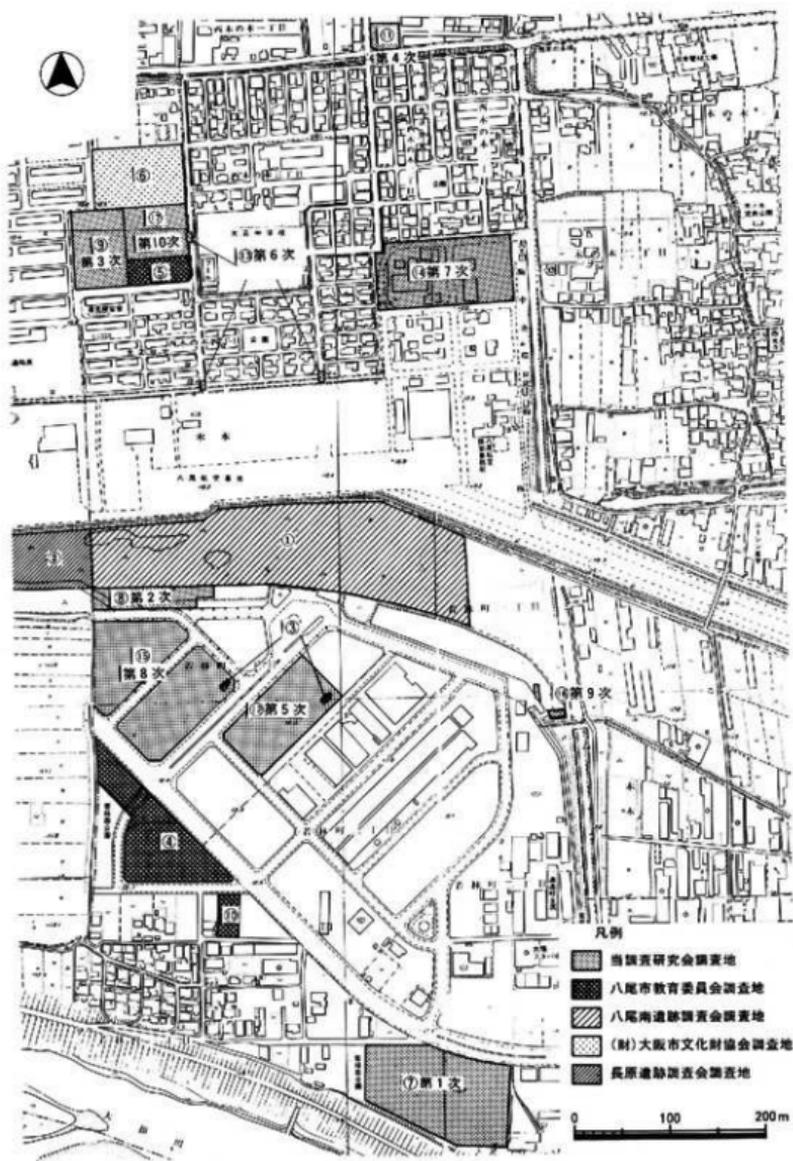
今回の発掘調査は社屋建設に伴って実施したもので、当調査研究会が八尾南遺跡内で実施した発掘調査の第5次調査にあたる。

八尾南遺跡は南から伸びる羽曳野丘陵の先端（河内台地）と河内平野が融合する部分に位置しており、現在の行政区画では若林町・西木の本一帯（地下鉄谷町線八尾駅周辺）にあたる。西隣に位置する大阪市長原遺跡は、市域の違いによって名称を異にしているだけで、当遺跡とは同一の遺跡と考えられている。当遺跡周辺には、東に木の本遺跡、西に長原遺跡（大阪市）・瓜破遺跡（大阪市）、南に津堂遺跡（藤井寺市）、北に城山遺跡（大阪市）がある。

当遺跡は、昭和53～54年度に八尾南遺跡調査会が実施した発掘調査（①）の結果から、長原

周辺の発掘調査一覧表

番号	調査主体	調査期間	文 献	発行
①	八尾南遺跡調査会	53年4月～55年3月	八尾南遺跡	1981. 3
②	長原遺跡調査会	53年7月～54年8月	大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告II	1982
③	八尾市教育委員会	55年6月	八尾南遺跡・東郷遺跡発掘調査概要 八尾市文化財報告6	1981. 3
④	同 上	55年12月～56年1月	未報告	1983. 8
⑤	同 上	56年6月～56年7月	八尾市埋蔵文化財発掘調査概要1980・1981年度 ⑧八尾市文化財調査研究会報告2	1983. 3
⑥	財大阪市文化財協会	57年12月～58年3月	未報告	1983. 3
⑦	当調査研究会(第1次)	58年2月～58年6月	昭和58年度事業概要報告： ⑧八尾市文化財調査研究会報告5	1984. 4
⑧	同 上(第2次)	59年1月～59年7月	昭和59年度事業概要報告： ⑧八尾市文化財調査研究会報告7	1985. 4
⑨	同 上(第3次)	59年7月～60年9月	八尾市埋蔵文化財発掘調査概要昭和59年度： ⑧八尾市文化財調査研究会報告6	1985. 3
⑩	八尾市教育委員会	59年7月	八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書： 八尾市文化財調査報告11	1985. 3
⑪	当調査研究会(第4次)	59年10月～59年11月	昭和59年度事業概要報告： ⑧八尾市文化財調査研究会報告7	1985. 4
⑫	同 上(第5次)	61年9月～62年7月	今回報告	—
⑬	同 上(第6次)	62年1月	昭和61年度事業概要報告： ⑧八尾市文化財調査研究会報告14	1987. 12
⑭	同 上(第7次)	62年2月～62年7月	今回報告	—
⑮	同 上(第8次)	62年5月～63年1月	同 上	—
⑯	同 上(第9次)	62年7月～62年8月	同 上	—
⑰	同 上(第10次)	62年7月～62年10月	同 上	—



調査地周辺図

遺跡とともに旧石器時代～鎌倉時代の複合遺跡として認識されている。この調査以後、当遺跡内では開発件数が増加し、昭和61年度までに大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会によって計9件の発掘調査が実施されている。今回の調査地は、昭和53年～54年度に八尾南遺跡調査会が実施した発掘調査地南端から北へ約100mにあたり、昭和55年度に八尾市教育委員会が実施した八尾南遺跡範囲確認調査(③)の第3調査区を含んでいる。

調査概要

調査は、調査地を北調査区(1800㎡)と南調査区(2700㎡)に二分して実施した。掘削に際しては、現地表下1.7～1.8mまでを機械掘削した後、0.2～0.4mを人力掘削した。その結果、古墳時代前期と中世の時期に比定される遺構・遺物を検出した(第1調査面)。さらに、0.2m前後下層で弥生時代後期に比定される遺構・遺物を検出した(第2調査面)。また、南調査区では、調査区側溝の断面で第2調査面下0.2m前後までの土層中に遺物が含まれていることが確認された。したがって、南調査区の南部約784㎡については、第2調査面下0.2m前後まで掘削して、弥生時代前期に比定される遺構面(第3調査面)の調査を実施した。なお、北調査区では第2調査面、南調査区では第3調査面の調査終了後、下層の状況を確認するため下層調査を実施した。

第1調査面

第1調査面は、現地表下2m(標高10m)前後に堆積する褐灰色～黄灰色粘質土層上面を調査対象面とした。調査の結果、古墳時代前期(庄内式期)と中世に比定される遺構・遺物を検出した。古墳時代前期に比定される遺構は、土坑1基・溝4条・小穴8個で、とくに北調査区の東部から北部にかけて集中している。中世に比定される遺構には、溝5条・小穴7個(北調査区)、溝11条・小穴8個(南調査区)がある。

第2調査面

第2調査面は、第1調査面下0.2m前後(標高9.8m)前後に堆積する褐灰色粘土層の上面を調査対象面にした。その結果、弥生時代後期に比定される水田・溝1条・自然河川3条を検出した。

第3調査面

南調査区の南部で検出した。第2調査面下0.2m(標高9.6m)前後に堆積する褐灰色～暗紫灰色粘土層上面を調査対象面とした。調査の結果、弥生時代前期に比定される溝・掘立柱建物・自然河川を検出した。

下層調査

既往調査で沖積地下部層(いわゆる長原地川)から後期旧石器時代に比定される遺物が出土しているため、この層中まで遺構・遺物の存在の確認に努めた。その結果、後期旧石器時代に比定される遺物の出土は認められなかったが、南調査区の北端で検出した自然河川でしがらみを検出した。

しがらみは、大小60本余りの杭を用いて構築されている。杭列は、四列で前二列と後二列の杭列をそれぞれ斜めに打ちこんで合掌させている。後二列の杭列上に木の葉が堆積していた。しがらみが構築されている自然河川は、調査区が限定されているため規模等は明確にし得ないが、南調査区の南西部から北部へ流路を持つものと考えられ、淡黄灰色細砂～粗砂を主とした砂層が堆積していた。遺物は、特にしがらみの上流部（南側）から弥生時代前期（畿内第1様式古段階）に比定される土器が出土している。

まとめ

弥生時代前期

この時期の遺構・遺物は主に南調査区の第3調査面および下層調査で確認された。遺構としては、掘立柱建物群・竈棺墓・しがらみ等である。今回の調査で検出した弥生時代前期の掘立柱建物は河内平野内においては山賀遺跡・美園遺跡^{注3}で検出されている程度である。また、下層調査で確認されたしがらみについても大阪府下では久宝寺遺跡^{注4}（八尾市）・池島遺跡^{注5}（東大阪市）で確認されている程度で貴重な資料の一つと言える。

弥生時代後期

調査の結果、比較的広範囲にわたって水田が存在していたことが確認された。なお、八尾南遺跡内では、昭和53～54年に当調査地から北150mの地点で八尾南遺跡調査会が実施した調査(①)ではこの時期の遺構が検出されている。さらに、南東約400mの地点で当調査研究会が実施した調査（第1次調査）(⑦)では方形周溝墓12基が検出されており、今回の調査成果を含めて当該期の集落構成が明確になってきた。

古墳時代前期

この時期に比定される遺構・遺物は当調査地の北方約100m一帯で実施された既往調査(①)で、集落遺構・墳墓遺構・生産遺構が検出されている。今回の調査では、北調査区で土坑1基・溝4条・小穴8個を検出したのみで、南調査区ではこの時期の遺構は皆無であった。以上のことから、既往調査で検出された当該期の集落の南端が当調査地の北調査区付近であったことが想定できよう。

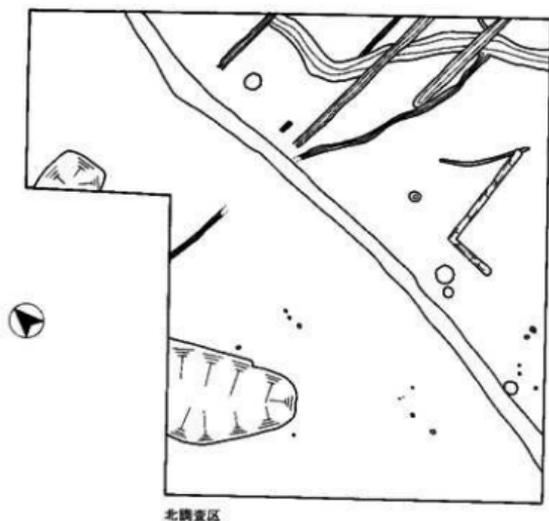
註1 00八尾市文化財調査研究会「八尾南遺跡（第2次調査）」『昭和59年度事業報告』 00八尾市文化財調査報告書7 1985

註2 00大阪文化財センター「山賀（その3）」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1984

註3 00大阪文化財センター「美園」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1984

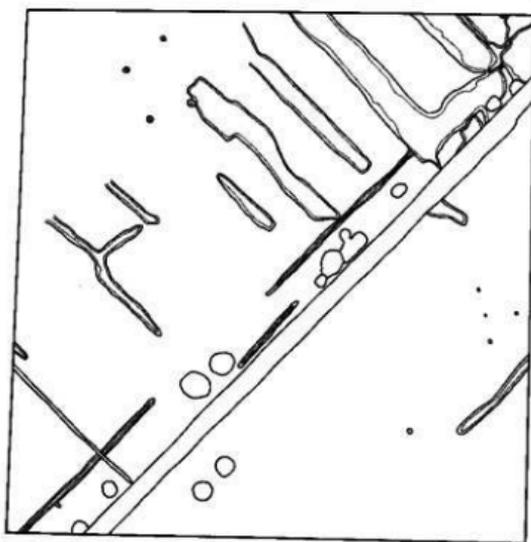
註4 00大阪文化財センター「久宝寺南（その2）」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1987

註5 大阪府教育委員会「池島遺跡試掘調査概要報告1」 1982



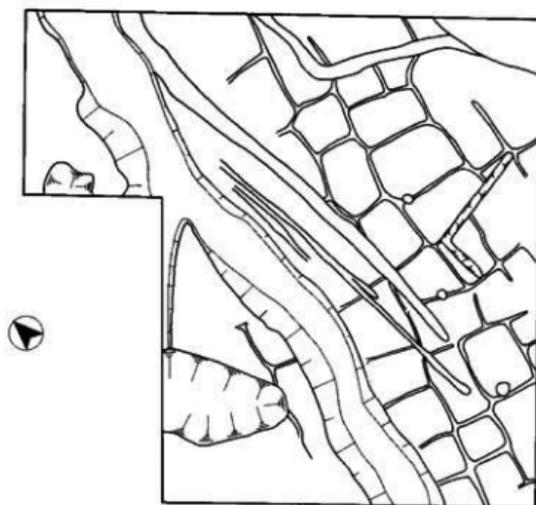
北調査区

0 10 20 m



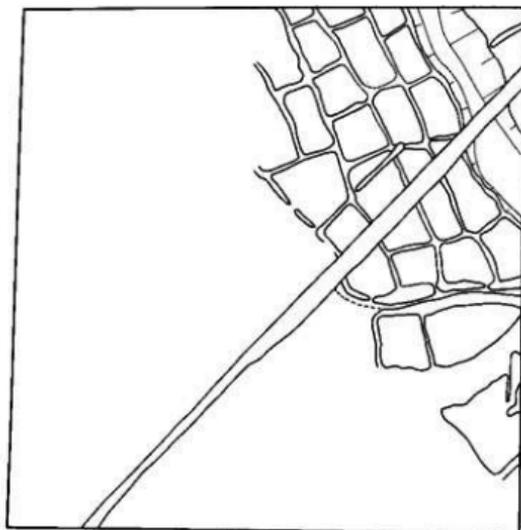
南調査区

第1調査面検出遺構平面図



北調査区

0 10 20 m

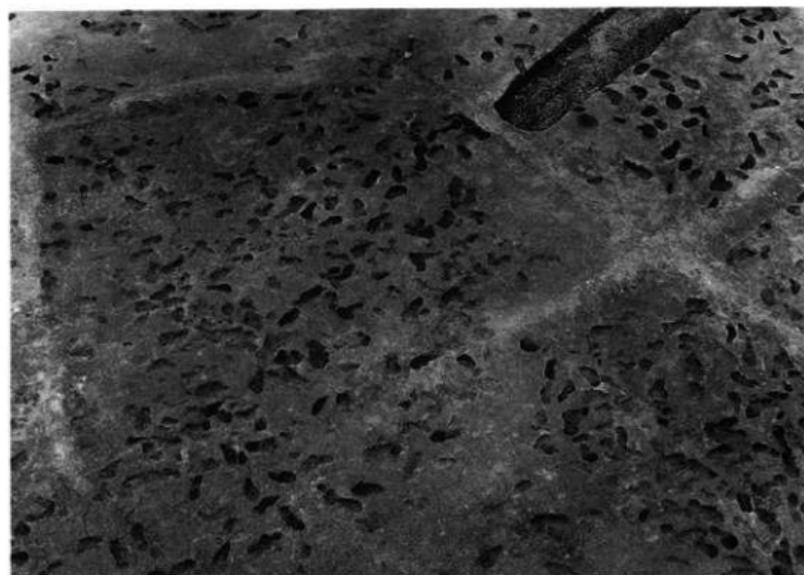


南調査区

第2調査面検出遺構平面図



北調査区 水田検出状況(東から)



北調査区 畦畔および足跡検出状況(東から)



南調査区 掘立柱建物検出状況(東から)



南調査区 しがらみ検出状況(南から)

8 やおみなみ 八尾南遺跡（第7次調査）

調査地 八尾市木の本110

調査期間 昭和62年2月10日～昭和62年7月8日

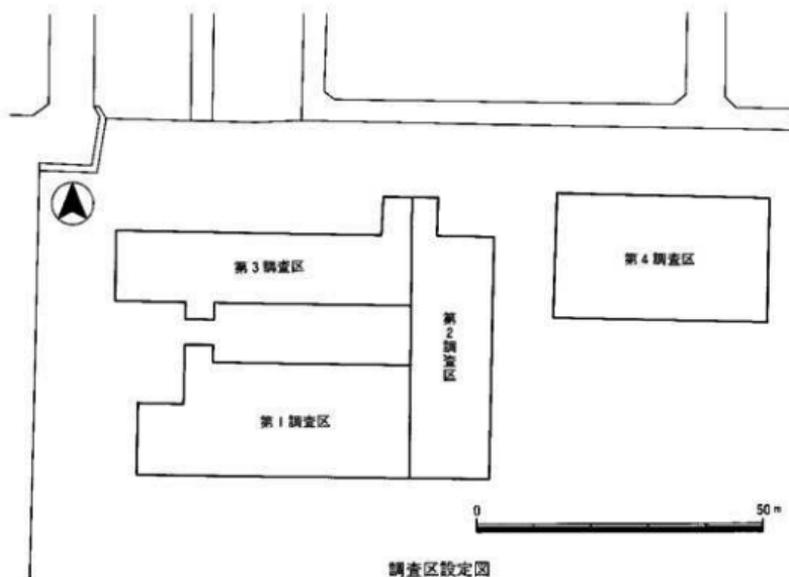
調査面積 3043㎡

はじめに

今回の発掘調査は仮称第2大正小学校建設に伴うもので当調査研究会が八尾南遺跡で実施した第7次調査にあたる。今回の調査地は、昭和61年度に実施した第6次調査(⑬)の第3調査区から北東約150m地点にあたり八尾南遺跡推定範囲の北東部に位置する。

調査概要

校舎・体育館建設予定地に4箇所(第1～第4調査区)の調査区を設定した。各調査区の面積は、第1調査区921㎡・第2調査区630㎡・第3調査区678㎡・第4調査区814㎡である。調査においては、八尾市教育委員会の試掘調査の結果に基づいて、現地表下0.8mまでを機械掘削し、



以下の各層については人力掘削を実施した。

調査では、第1調査区～第3調査区で3面(第1調査面～第3調査面)、第4調査区で4面(第1調査面～第4調査面)にわたる調査を実施した。その結果、第1調査区～第3調査区では古墳時代前期・古墳時代後期・平安時代後期～鎌倉時代初頭に比定される遺構を検出した。第4調査区では、古墳時代前期・古墳時代中期～後期・古墳時代後期・平安時代後期～鎌倉時代初頭に比定される遺構を検出した。

第1調査区

第1調査面

現地表下1.1m(標高9.1m)前後に存在する灰色粘土層上面で、平安時代後期～鎌倉時代初頭に比定される水田8筆・畦畔6条・溝1条を検出した。

第2調査面

第1調査面から0.3m下層に存在する濃灰色粘土層上面で、古墳時代後期に比定される水田9筆・畦畔10条・溝3条を検出した。

第3調査面

第2調査面から0.3m下層に存在する暗灰色粘土層上面で、古墳時代前期に比定される水田20筆・畦畔21条を検出した。

第2調査区

第1調査面

現地表下1.1m(標高9.1m)前後に存在する灰色粘土層上面で、平安時代後期～鎌倉時代初頭に比定される水田3筆・畦畔2条を検出した。

第2調査面

第1調査面から0.3m下層に存在する濃灰色粘土層上面で、古墳時代後期に比定される水田7筆・畦畔8条・溝4条を検出した。

第3調査面

第2調査面から0.3m下層に存在する暗灰色粘土層上面で、古墳時代前期に比定される水田15筆・畦畔18条を検出した。

第3調査区

第1調査面

現地表下1.1m(標高9.1m)前後に存在する灰色粘土層上面で、平安時代後期～鎌倉時代初頭に比定される水田5筆・畦畔3条・溝1条を検出した。

第2調査面

第1調査面から0.3m下層に存在する濃灰色粘土層上面で、古墳時代後期に比定される水田10

筆・畦畔9条・溝6条を検出した。

第3調査面

第2調査面から0.3m下層に存在する暗灰色粘土層上面で、古墳時代前期に比定される水田17筆・畦畔18条を検出した。

第4調査区

第1調査面

現地表下1.15m(標高9.05m)付近に存在する灰色粘土層上面で、平安時代後期～鎌倉時代初頭に比定される水田5筆・畦畔4条を検出した。

第2調査面

第1調査面から0.25m下層に存在する濃灰色粘土層上面で、古墳時代後期に比定される水田6筆・畦畔5条を検出した。

第3調査面

第2調査面から0.3m下層の暗茶灰色粘土層上面で、古墳時代中期～後期に比定される水田13筆・畦畔12条・溝1条を検出した。

第4調査面

第3調査面から0.1～0.5m下層に存在する暗灰色粘土と灰青色粘土層上面で、古墳時代前期に比定される水田16筆・畦畔20条・溝3条を検出した。

まとめ

調査の結果、古墳時代前期・古墳時代中期から後期・古墳時代後期・平安時代後期から鎌倉時代初期の4時期に比定される水田遺構を重層的に検出した。各水田遺構上面には洪水等に起因すると考えられる砂・シルト等が堆積しており、河川の氾濫によって埋没したことがうかがえる。

なお、周辺の既往調査の結果では、古墳時代後期を除けば今回検出した水田遺構の時期と符号する遺構が検出されている。今後、これらの遺構と今回検出した水田遺構との有機的な関係を明確にすることで、八尾南遺跡内での各時期の動向を明らかにする必要がある。



第1調査区 第3調査面全景(東から)



第2調査区 第3調査面全景(北から)



第3調査区 第3調査面全景(東から)



第4調査区 第4調査面全景(東から)

9 ^{やおみなみ}八尾南遺跡（第8次調査）

調査地 八尾市若林町1丁目87

調査期間 昭和62年5月18日～昭和63年1月31日

調査面積 9961㎡

はじめに

今回の発掘調査は店舗付住宅の建設に伴って実施したもので、当調査研究会が八尾南遺跡内で実施した発掘調査の第8次調査にあたる。今回の調査地は第5次調査地の(㊤)西30mにあたる。

調査概要

調査予定地が道路を挟んで東西に分断されているため、調査区を東調査区(5587㎡)と西調査区(4374㎡)に区別した。掘削にあたっては、八尾市教育委員会が昭和55年度に八尾南遺跡範囲確認調査で実施した第2調査区が東調査区の北東部にあたることから、この調査成果に基づいて掘削深度を決定した。掘削は現地表下1.6m前後に存在する盛土および旧表土までは機械で行い、以下は層理に従って人力掘削を実施した。

その結果、現地表下1.5～2.0m(標高10.5～11.0m)付近で弥生時代後期～古墳時代後期初頭に比定される遺物を包含する土層を確認した。この包含層を取り除くと、黄色～灰褐色・砂質土～シルト層が広がっており、この土層上面(標高10.0～10.65m)で弥生時代後期・古墳時代中期中葉・古墳時代中期末～後期初頭の3時期に比定される遺構を検出した。なお、上記調査終了後東西方向の調査基準線に沿ったトレンチ(幅1m)を東調査区で10本、西調査区で7本設定し、後期旧石器時代相当層の調査(下層調査)を実施した。

東調査区

調査区の中央部より南部一帯で遺構・遺物を検出した。検出した遺構は掘立柱建物2棟・井戸1基・土坑8基・溝16条・小穴102個である。時期別では、弥生時代後期のものと古墳時代中期中葉のものに区別できる。そのうち時期を明確に得たものは、弥生時代後期では井戸1基・土坑4基・溝4条で、古墳時代中期中葉では掘立柱建物2棟・土坑1基・溝3条である。なお、下層調査では、サヌカイトのフレイク5点が出土している。

西調査区

調査区の北西部を除いた全域で遺構・遺物を検出した。検出した遺構は方形周溝墓1基・方墳3基・掘立柱建物7棟・井戸3基・小穴205個である。時期別では、概ね弥生時代後期・古墳時代中期中葉・古墳時代中期末～後期初頭の3時期に区別できる。弥生時代後期に比定される

ものは、方形周溝墓1基・井戸1基・土坑16基・溝19条である。これらの時期の遺構は調査区の中央部を南北方向に伸びる埋没河川の上面及び西側に広がっている。一方、古墳時代中期末～後期初頭に比定される遺構は方墳3基で埋没河川の東側に位置している。下層調査では、サヌカイトの右舌尖頭器2点・石鏃5点・フレイク3点が出土している。

まとめ

今回の調査では、弥生時代後期・古墳時代中期・古墳時代中期末～後期初頭の3時期に比定される遺構・遺物を検出した。以下、時期ごとに概観する。

弥生時代後期

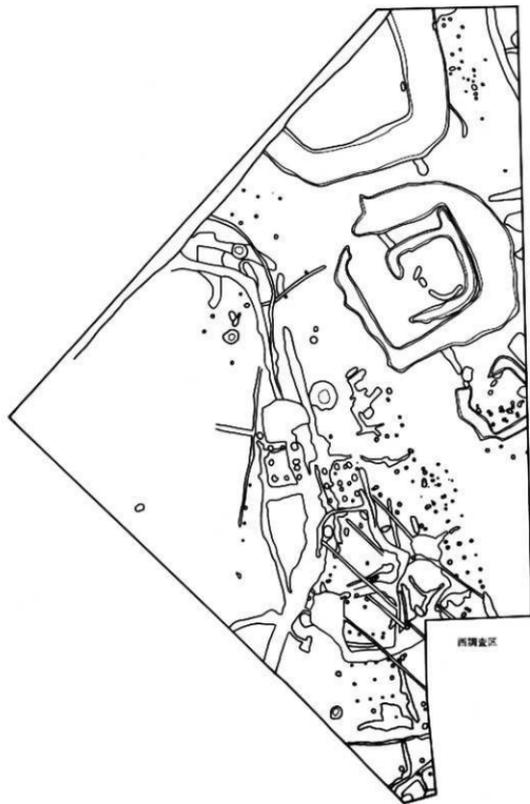
主な遺構としては、方形周溝墓1基・井戸2基・土坑8基・溝9条で、調査区のはほぼ全域で検出したが、西調査区の北部に遺構が集中している部分がある以外は散発的である。

古墳時代中期中葉

主に西調査区の西部付近で遺構を検出した。検出した遺構は、掘立柱建物9棟・井戸2基・土坑17基・溝20条である。掘立柱建物はすべて、主軸を北で東に振る方位を持つもので、溝遺構もこれらに規制され、主軸方向に平行するものと直交するものに区別できる。出土した遺物からみて、約半世紀にわたってこの地が居住地として利用されていたようである。なお、井戸内からは古墳時代中期中葉に比定される土師器壺、須恵器甕とともに鞍の前輪が出土している。

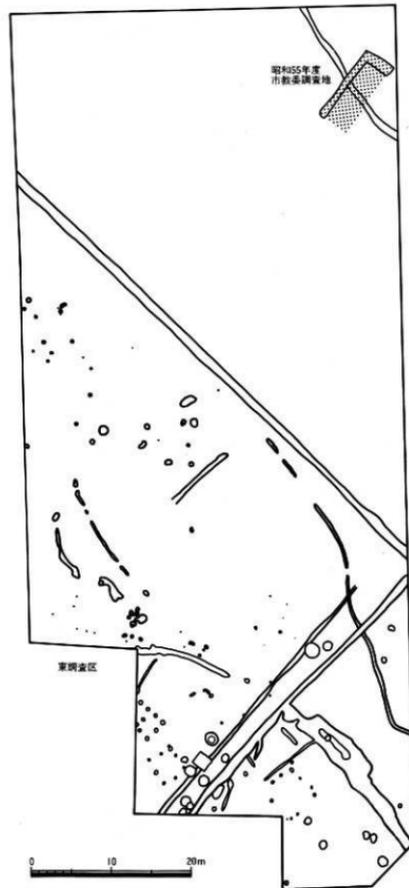
古墳時代中期末～後期初頭

この時期に比定される遺構は古墳（方墳）3基で、西調査区の東部で検出した。これらの古墳は古墳時代中期に比定される遺構を削平して構築されている。このうち、古墳2・古墳3から埴輪が出土している。



西調査区

検出遺構平面図



東調査区

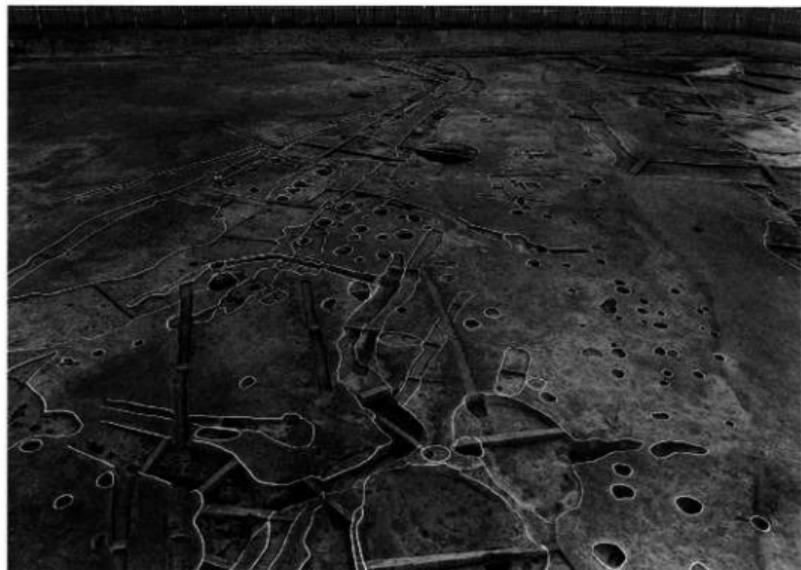
0 10 20m



東調査区全景(南から)



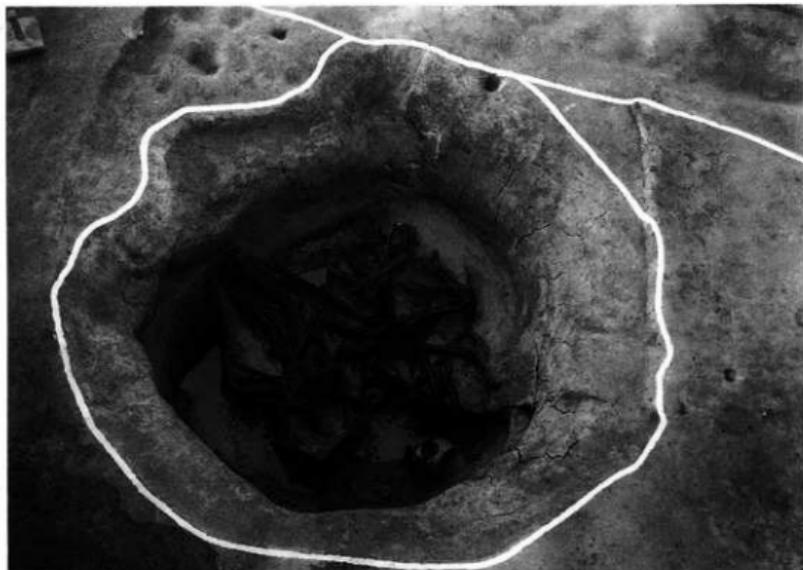
西調査区全景(南から)



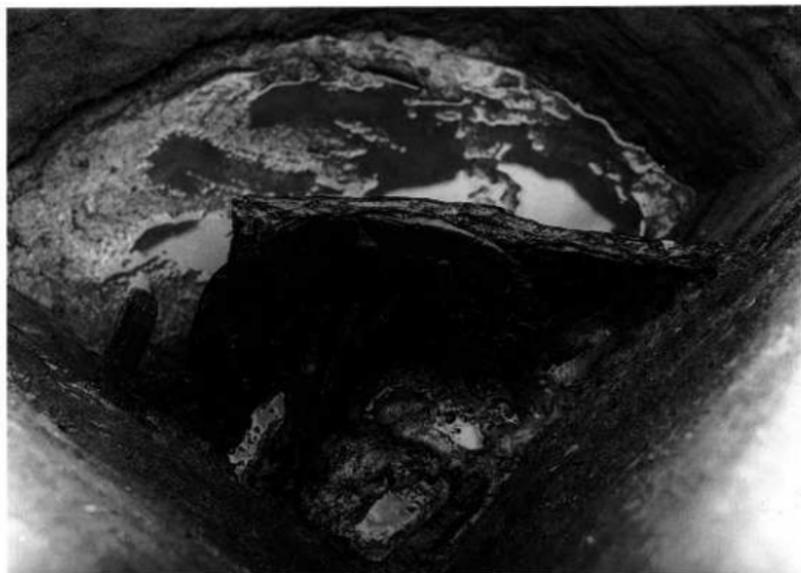
西調査区遺構検出状況(南から)



西調査区方形周溝墓・方壇検出状況(南から)



井戸4検出状況(東から)



鞍出土状況(東から)

10・11 ^{や おみなみ}八尾南遺跡 (第9次調査)

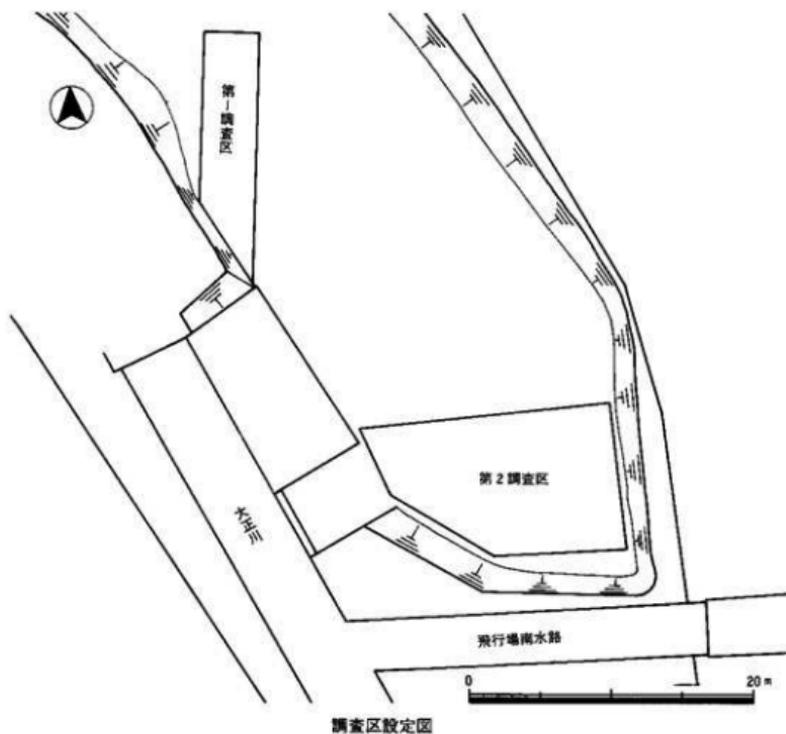
調査地 八尾市若林町1丁目23

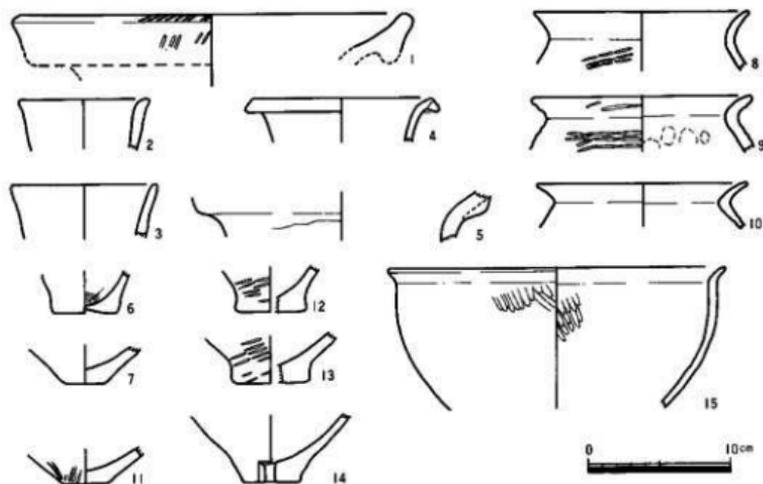
調査期間 昭和62年7月23日～昭和62年8月19日

調査面積 205㎡

はじめに

今回の調査は、大正川調整地導水路工事 (第1調査区) およびポンプ場建設 (第2調査区) に伴って実施したもので当調査研究会が八尾南遺跡内で実施した第9次調査にあたる。調査地点は昭和53～55年度に八尾南遺跡調査会が発掘調査 (①) を実施した調査地の東南端から南東方向130mにあたる。





出土遺物実測図

調査概要

調査対象地は2ヶ所で、北側に位置する調査区を第1調査区、南側の調査区を第2調査区とした。調査は八尾市教育委員会の指示に基づいて現地表下0.7m(標高9.0m)付近に存在する暗灰色粘土層上面を調査対象面とした。調査の結果、両調査区ともに顕著な遺構を検出するに至らなかったが、一部で弥生時代後期に比定される壺・鉢・甕を包含する土層を検出した。

出土遺物

第1調査区では、調査対象面を覆う黄灰色粘質土直上の一部に堆積していた黒灰色砂混り粘土層・淡灰色砂混り粘土層から土器の細片が出土した。また、第2調査区では、調査対象面直上に堆積していた淡灰色～淡灰黄色砂層から土器の小破片が出土した。遺存状況は、必ずしも良好とは言えず、洪水等によって当調査区一帯へ流入したものと考えられる。

出土遺物の総量は、第1・第2調査区を合わせてコンテナ箱に半分程度であった。そのうち実測可能なものは、第1調査区出土のもの5点(2・5・6・8・15)、第2調査区出土のもの10点(1・3・4・7・9～14)である。

壺(1～7)：二重口縁壺には、口縁端部に粘土紐を補足して下方へ拡張し、端面に衝描文、上端に刻み目を施すもの(1)と、頸部から外反したのち擬口縁に粘土帯を補足して外面に緩い稜を持って成形されるもの(5)がある。長頸壺(2・3)は、口縁部が上外方へ直線的に伸び、端部が丸く終わるもので、(2)は、端部でわずかに外反する。広口長頸壺(4)は、口

縁端部で外反し、粘土紐を補足して端面を斜下方へ拡張している。底部には、外底面がわずかに窪み、体部が上外方へ伸びるもの(6)と、平底で体部が斜上方へ伸びるもの(7)がある。

甕(8～13)：甕には、口縁部が体部から緩やかに外反するもの(8)、丸味を持って屈曲するもの(9)、「く」の字形に屈曲するもの(10)がある。(9)は、体部内面に指頭痕を残し、外面のタタキ目は水平方向である。底部には、平底の突出した底部から体部が上外方へ伸びるもの(12)と、体部が斜上方へ伸びるもの(13)がある。

底部有孔土器(14)：突出気味の平底から体部が斜上方へ伸び、底部中央に焼成前の穿孔がある。器表面の剥離が著しいが、外面はナデ調整もしくはヘラミガキを施しているようである。

鉢(15)：半球形の体部に短く外傾する口縁部を持つもので、体部内外面にはヘラミガキを施している。

まとめ

今回の調査では、弥生時代後期に比定される遺物を検出したものの遺構を検出するに至らなかった。既往調査では、当調査地の北西約400m(八尾南遺跡調査会調査地)では当該期の居住域が検出されている。さらに、当調査地南方約400m(第1次調査^{注1})で当該期の墓域が検出されている他、当調査地西方約250m(第5次調査^{注2})では生産域が検出されており今回の調査と有機的な関係が示唆されよう。^{注3}

注1 八尾南遺跡調査会「八尾南遺跡」一大阪市高速電気軌道第2号線延長工事に伴う発掘調査報告書 1981

注2 財八尾市文化財調査研究会「八尾南遺跡」[昭和58年度事業概要報告]財八尾市文化財調査研究会報告5 1984

注3 本報告7



第1調査区全景(北から)



第2調査区全景(西から)

12 や おみなみ 八尾南遺跡 (第10次調査)

調査地 八尾市西木の木4丁目4-1

調査期間 昭和62年7月27日～昭和62年10月5日

調査面積 696㎡

はじめに

今回の発掘調査は国家公務員合同宿舍建設に伴って実施したもので、当調査研究会が八尾南遺跡内で実施した発掘調査の第10次調査にあたる。今回の調査地は、昭和59年度に当調査研究会が実施した第3次調査地(⑨)のBトレンチの東端から約20mにあたる。

調査概要

宿舍建設予定地に合わせて東西60m・南北11.5mの調査区を設定した。掘削に際しては、第3次調査の調査成果をもとに、現地表下2mまでに存在する盛土・旧耕土を機械で排除し、以下約1mは人力掘削を行い、3面(第1調査面～第3調査面)にわたる調査を実施した。

第1調査面

現地表下2.3～2.5m(標高8.3～8.5m)に存在する茶褐色粘土上面で、平安時代末期に埋没した水田5筆・畦畔7条を検出した。

第2調査面

第1調査面から0.5～0.6m(標高7.8～8.0m)下層に存在する灰色粗砂層上面で、古墳時代中期に比定される溝1条・小穴15個を検出した。特に調査区の東部では小穴11個からなる杭列(櫛)を検出している。

第3調査面

第2調査面から0.1m下層(標高7.6～7.8m)に存在する緑灰色粘土上面で古墳時代中期初頭の水田14筆・畦畔11条を検出した。

まとめ

今回の調査の結果、第3次調査と同様、平安時代末期の水田遺構・古墳時代中期の集落遺構・古墳時代中期初頭の水田遺構^{注1}が検出されたことにより、各時期の遺構が東へ広がることが明らかになった。

註1 ⑨八尾市文化財調査研究会「Ⅱ八尾南遺跡発掘調査概要報告」[八尾市埋蔵文化財発掘調査概要昭和59年度]
 ⑨八尾市文化財調査研究会報告6 1985



第1調査面全景(西から)



第2調査面全景(西から)

13 東郷遺跡 (第24次調査)

調査地 八尾市桜ヶ丘3丁目124-1

調査期間 昭和62年4月8日～昭和62年4月23日

調査面積 258㎡



調査地周辺図

はじめに

今回の発掘調査は、共同住宅建設に伴うもので、八尾市教育委員会・当調査研究会が東郷遺跡内で実施した第24次調査にあたる。

当遺跡は、長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置しており、現在の行政区画では北本町・東本町・光町・桜ヶ丘・荘内町一帯にあたる。当遺跡の所在する沖積地は八尾市域の中央部を南東から北西へ伸びるもので、多くの遺跡が立地している。当遺跡の周辺には、南東に小阪合遺跡、北西に宮町遺跡、北東に萱振B遺跡が位置しており、南西部は成法寺遺跡と接している。

当遺跡では、昭和56年度から昭和62年度に至るまで八尾市教育委員会・当調査研究会により23次にわたる発掘調査が断続的に実施されてきた。その結果、弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡であることが確認されている。特に古墳時代前期（庄内式期～布留式期）の遺構・遺物が良好な形で検出されており、この時期の集落の在り方を知るうえで貴重な遺跡と言える。今回の調査地は八尾市教育委員会が実施した第22次調査地の北にあたる。

調査概要

調査対象地は、共同住宅予定地で平面L字形を呈する。掘削に際しては、現地表下約1.3m（標高7m）までの耕土・盛土は機械掘削で排除し、それより下層は人力掘削を実施した。調査では2面（第1調査面・第2調査面）を調査対象面とした。

第1調査面

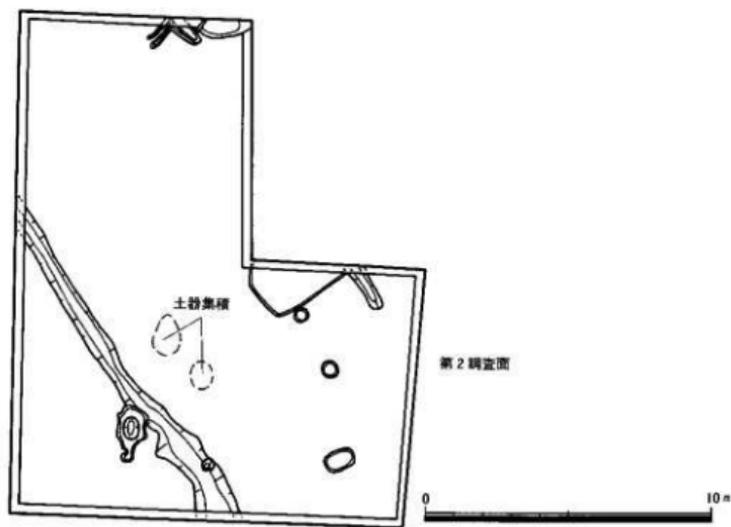
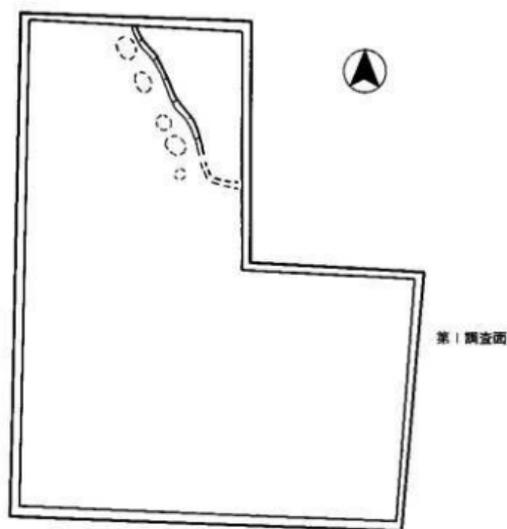
調査区の北東部の現地表下1.5m（標高6.8m）前後で古墳の一部を検出した。検出部で幅1.3m・深さ0.2mを測る溝を約7mにわたって検出した。溝内からは円筒埴輪が4点出土した他、壺・甕が出土している。形状や出土遺物からみて古墳（方墳）の周溝と考えられ、出土した埴輪は墳丘部に樹立されていたものが、後世の削平時に周溝内に転げ落ちたものと考えられる。出土した遺物からみて、古墳の構築時期は5世紀中葉に比定されよう。

第2調査面

現地表下1.8m（標高6.5m）前後で弥生時代後期と古墳時代前期（布留式期）の遺構・遺物を検出した。弥生時代後期の遺構には土坑1基・溝2条がある。古墳時代前期の遺構には、土坑3基・溝1条・小穴3個がある。

まとめ

今回の調査では、小面積にもかかわらず弥生時代後期～古墳時代中期に至る遺構・遺物を確認した。弥生時代後期に比定される遺構の検出例は東郷遺跡内では第13次調査につぐもので、当該期の集落の中心が遺跡推定範囲の北東部にあったことが明確となった。一方、調査区の北東部で検出した古墳（方墳）は当遺跡内では初めての検出例であり、河内平野低平地に位置する古墳の在り方を知るうえで一助にならう。



検出遺構平面図



第1調査面全景(南から)



第2調査面全景(南から)

14 東郷遺跡 (第25次調査)

調査地 八尾市北本町2丁目240～242
調査期間 昭和62年7月20～昭和62年9月17日
調査面積 900㎡

はじめに

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、八尾市教育委員会・当調査研究会が東郷遺跡内で実施した発掘調査の第25次調査にあたる。調査地点は昭和56年に八尾市教育委員会が実施した第4次調査地の西側にあたる。

調査概要

調査予定地は建物建築の基礎部分にあたり、南北方向に長い調査区(東西7m・南北64m)の調査区を5m間隔を開けて2ヶ所設定した。東側の調査区を第1調査区、西側の調査区を第2調査区と呼称した。調査では、2面(第1調査面・第2調査面)を調査対象面とした。

第1調査面

現地表下1.65～1.8m(標高6.5～6.6m)前後で、平安時代後期～鎌倉時代初頭と近世に比定される遺構を検出した。平安時代後期～鎌倉時代初頭に比定される遺構には、井戸2基・溝12基・水田5筆・畦畔4条がある。近世に比定される遺構には、井戸5基・溝1条がある。

第2調査面

第1調査面よりさらに0.2m下層(標高6.3m)で、古墳時代前期(庄内式期)に比定される井戸2基・水田4筆・畦畔2条を検出した。

まとめ

今回の調査では、古墳時代前期(庄内式期)・平安時代後期・鎌倉時代初頭・近世の各時期の遺構を検出した。そのうち古墳時代前期(庄内式期)と平安時代後期から鎌倉時代初頭の遺構は東隣の第4次調査および第12次調査地で検出された遺構と対応するもので、この時期の集落がさらに西側へ広がることが明らかになった。

註1 八尾市文化財調査研究会「第8章東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度』
 八尾市文化財調査研究会報告2 1983

註2 八尾市文化財調査研究会「東郷遺跡 - 有限会社ニュー四光マンション建設に伴う発掘調査概要」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査』(八尾市文化財調査研究会)



第2調査区第2調査面全景(北から)



第1調査区第2調査面全景(北から)



第1調査区第2調査面溝検出状況(西から)



第1調査区第1調査面井戸検出状況(東から)

15 東郷遺跡 (第26次調査)

調査地 八尾市荘内町1丁目28～31

調査期間 昭和63年1月16日～昭和63年1月29日

調査面積 49㎡

はじめに

今回の発掘調査は、電話通信線地下施設工事に伴うもので、八尾市教育委員会・当調査研究会が東郷遺跡内で実施した第26次調査にあたる。なお、調査地点は東郷遺跡推定範囲の南端にあたり、大阪府教育委員会が昭和62年度に府道拡張工事に伴って実施した調査地点（成法寺遺跡）の南東50mにあたる。

調査概要

掘削に際しては、大阪府教育委員会が昭和62年度に実施された調査の結果を参考にして、現地地表下0.3m（標高7.3m）までを機械掘削した。以下0.3mまでを人力掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

その結果、現地地表下0.6m（標高7.0m）前後に堆積する第4層淡茶褐色粘質シルト上面で古墳時代前期（庄内式期）に比定される遺構・遺物を検出した。なお、さらに下層の状況を確認する目的で、0.6mまで掘削を実施したが遺構・遺物は認められなかった。

基本層序

調査区で普遍的にみられた12層を基本層序とした。

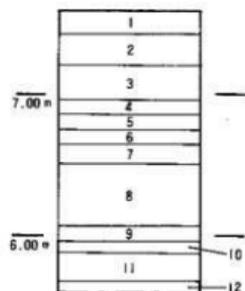
第1層 耕土：層厚20cm。現在の耕作土である。

第2層 灰褐色シルト：層厚10～15cm。径0.5～3cmの小石をごく少量含む土層で、耕上の床土である。

第3層 暗灰褐色粘質シルト：層厚30cm。この土層内には、古墳時代前期に比定される土器片を包含している。

第4層 淡茶褐色粘質シルト：層厚10～15cm。この上面（標高6.9～7.0m）では古墳時代前期に比定される遺構を検出した。

第5層 淡茶灰色粘質シルト：層厚12cm。ごく少量の



基本層序模式図

炭化物が含まれている。

第6層 暗灰茶色シルト粘土：層厚10cm。この土層は粘性が強く、下部付近には炭化物を包含している。

第7層 乳灰茶色粘土：層厚14cm。粘性の強い土層である。

第8層 青灰色粘土：層厚30～40cm。下部付近には細砂が少量含まれ、摩滅した弥生式土器1点が出土している。

第9層 淡青灰色細砂：層厚10～15cm。洪水等の氾濫による堆積土と考えられる。

第10層 暗灰青色粘質シルト：8～10cm。自然木などの植物遺体が少量含まれている。

第11層 暗灰色細砂混粘質シルト：層厚18～20cm。この土層で湧水がみられる。

第12層 暗灰色細砂混シルト：層厚10cm以上。

検出遺構

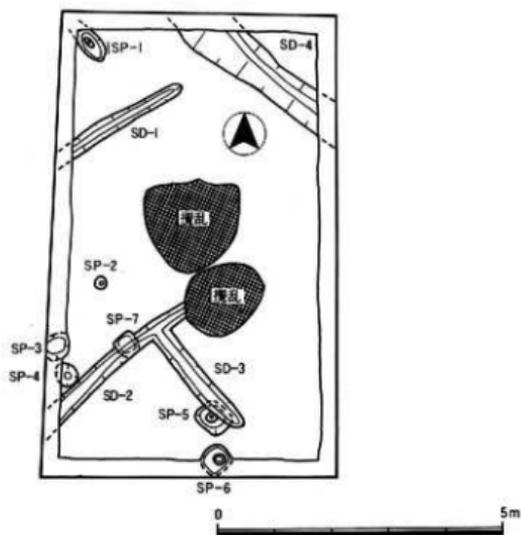
第4層上面で、古墳時代前期(庄内式期)に比定される溝4条(SD-1～SD-4)・小穴7個(SP-1～SP-7)を検出した。溝には流路の方向が北西-南西のもの2条(SD-1・SD-2)と南西-北西のもの2条(SD-3・SD-4)がある。断面の形状がU字形を呈し、内部堆積土層は灰褐色粘質シルトの単一層である。小穴群は大半が南西側のやや高い部分を中心に検出された。平面の形状には、楕円形のもの2個(SP-1・SP-3)、円形のもの1個(SP-2)、方形のもの4個(SP-4～SP-7)がある。また、SP-1・SP-5～SP-7には柱痕が認められ掘立柱建物を構成する柱穴と考えられる。

出土遺物

出土遺物は、包含層である第3層および遺構内からコンテナ箱にして約2箱分が出土している。時期的には古墳時代前期(庄内式期)のものが大半で、器種には壺・甕(V様式系・庄内式)・鉢・高杯などがある。

まとめ

今回の調査地は、当遺跡内の南端に位置し、南東側には小阪合遺跡、南西側には成法寺遺跡が近接する地点にあたる。今回の調査では、古墳時代前期に比定される遺構を検出した。この時期の遺構は既往調査の結果、東郷遺跡では遺跡推定範囲の中央部で検出されている他、当調査地点に近接する成法寺遺跡・小阪合遺跡でも同時期の遺構が検出されており、この時期に新たに集落が増大することが確認されている。今後、これらの事柄を踏まえて、遺跡間の有機的な関係を明らかにすべきであろう。



検出遺構平面図



調査区全景(西から)

16 田井中遺跡 (第5次調査)

調査地 八尾市空港1丁目81

調査期間 昭和62年10月19日～昭和62年12月5日

調査面積 216㎡

はじめに

今回の発掘調査は通信施設建設に伴うもので、当調査研究会が田井中遺跡内で実施した第5次調査にあたる。

当遺跡は長瀬川と平野川に挟まれた沖積地に位置しており、現在の行政区画では田井中4丁目を中心に広がっている。当遺跡の周辺には、同様の立地条件で南東に弓削遺跡、西に木の本遺跡、北西に太子堂遺跡・楢松遺跡・北に老原遺跡が位置している。

当遺跡発見の契機は、陸上自衛隊八尾駐屯地内での工事で、弥生時代前期～後期と古墳時代～奈良時代の土器が出土したことによるが、出土状況等の詳細は不明であった。ところが、昭和57年度に当調査研究会が同駐屯地内で発掘調査（第1次調査）を実施した結果、弥生時代前期～中期と古墳時代中期の遺物包含層のほか、小穴1個を検出した^{註1}。遺物包含層については二次堆積の可能性が考えられるが、小穴を検出したことから、時期は明確にできないものの、生活面の存在が明らかになった。さらに、昭和59年度にも当調査研究会が、同駐屯地内で発掘調査（第2次調査^{註2}）を実施しており、その結果、弥生時代中期と古墳時代前期の遺構を検出し、当遺跡に弥生時代中期と古墳時代前期の生活面が存在することが明らかになった。一方、これらの調査地の北東500～600mの地区は、府営住宅・市営住宅・公務員宿舍が建ち並ぶ住宅地であるが、老朽化が進んでおり、昭和58年度から継続的に建て替えが進められている。大阪府教育委員会ではこの一帯を「志紀遺跡」と呼称し、昭和58年度に府営住宅建て替えに伴う発掘調査を実施した結果、古墳時代の水田が検出されている（府教委昭和58年度調査）。続いて昭和60年度にも大阪府教育委員会は志紀1丁目と同様の発掘調査を実施されており、奈良時代の遺構のほか、奈良時代から鎌倉時代に対応する土層中で枚数の水田耕土が確認されている（府教委昭和60年度調査）。同じく昭和60年度に当調査研究会では、上記2件の調査地に隣接する志紀町西3丁目^{註3}で国家公務員合同宿舍建て替えに伴う発掘調査（第3次調査）を実施しており、その結果、平安時代末期と奈良時代の水田を検出した。さらに、昭和61年度にも第3次調査と同じ敷地内で発掘調査（第4次調査^{註4}）を実施しており、第3次調査同様奈良時代と平安時代の埋没水田を検出し、さらに下層において古墳時代中期以降の埋没水田を確認している。今回の調査地は、第



調査地周辺図

1次調査地の南東約10mに位置する。

調査概要

調査予定地は2ヶ所で、東側の調査区（東西16m・南北12m）を第1調査区で、西側の調査区（東西4m・南北6m）を第2調査区と呼称した。調査においては、八尾市教育委員会の指示書に基づき現地地表下2.3mまでは機械掘削し、以下の各層は人力による掘削を行ない遺構・遺物の検出に努めた。調査の結果、第1次調査区では現地地表下3m（標高8.5m）付近に堆積する灰青色シルト上面で、弥生時代前期～後期に比定される遺構・遺物を検出した。弥生時代前期に比定される遺構には土坑1基（SK-1）、弥生時代中期に比定される遺構には土坑6基（SK-2～SK-7）・溝2条（SD-1・2）、弥生時代後期に比定される遺構には、土坑1基（SK-8）がある他、時期不明の土坑3基（SK-9～SK-11）を検出した。

まとめ

今回の調査では、小面積であったにも関わらず弥生時代前期・中期・後期に比定される3時期の遺構を検出した。特に弥生時代前期の遺構の検出は、当遺跡内では初めて検出したもので、新たな知見を加える結果となった。今回の調査結果から、田井中遺跡が弥生時代全般にわたる遺跡であることが確認された。

- 註1 跡八尾市文化財調査研究会「田井中遺跡：陸上自衛隊八尾駐屯地内浴場増築に伴う発掘調査概要」[昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査]1983
- 註2 跡八尾市文化財調査研究会「田井中遺跡（第2次調査）」[昭和59年度事業概要報告]跡八尾市文化財調査研究会報告7 1985
- 註3 跡八尾市文化財調査研究会「田井中遺跡（第3次調査）」[昭和60年度事業概要報告]跡八尾市文化財調査研究会報告9 1986
- 註4 跡八尾市文化財調査研究会「田井中遺跡（第4次調査）」[昭和61年度事業概要報告]跡八尾市文化財調査研究会報告14 1987



第1調査区全景(東から)

17 田井中遺跡 (第6次調査)

調査地 八尾市志紀町西3丁目

調査期間 昭和62年11月24日～昭和62年12月26日

調査面積 348㎡

はじめに

今回の発掘調査は国家公務員合同宿舍建て替えに伴うもので、当調査研究会が田井中遺跡内で実施した第6次調査にあたる。調査地は昭和60年度に実施した田井中遺跡第3次調査地の第3調査区の北20mに位置する。なお、国家公務員合同宿舍建て替えに伴う発掘調査は、昭和60年度(第3次調査-第1調査区~第3調査区)^{※1}・昭和61年度(第4次調査-第4調査区・第5調査区)と継続して実施している関係から、今回の調査区の名称を第6次調査-第6調査区と呼称している。

調査概要

調査予定地は東西方向に長い調査区で東西30m・南北11.5mを測る。掘削に際しては第3次調査・第4次調査の調査結果を参考にして、現地表下1.8~1.9m前後までを機械掘削した。以下、約1.3mを人力掘削して遺構・遺物の検出に努めた。

その結果、現地表下1.9~2.0m(標高9.8~10.0m)前後に堆積する青灰色粘土上面で平安時代に埋没した水田を検出した(第1調査面)。さらに、標高9m前後に堆積する灰褐色粘土上面では奈良時代に埋没した水田を検出した(第2調査面)。第2調査面の調査終了後、下層の堆積状況や遺構・遺物の有無を確認する目的で一部でトレンチ調査(ド層調査)を実施した結果、弥生時代中期~古墳時代前期に比定される遺構・遺物を検出した。

第1調査面

現地表下1.9~2.0m(標高9.8~10.0m)付近に堆積する第6層青灰色粘土上面で水田2筆・畦畔2条を検出した。水田は全容を知り得たものは無く、田積も不明である。畦畔は水田耕作土である青灰色粘土を盛り上げて構築されている。水田上面に堆積する第5層灰色粗砂から出土した遺物からみて平安時代後期に埋没した水田と考えられる。

第2調査面

現地表下2.8~3.0m(標高9.0m)付近に堆積する灰褐色粘土上面で水田6筆・畦畔4条を検出した。水田は1筆耕地を知り得たものはないが、第4次調査の第5調査区で検出した当該期の水田と形状や畦畔の方向が一致している。畦畔はいずれも水田耕作土である灰褐色粘土を盛り

上げて構築されている。

下層調査

顕著な遺構を検出し得なかったが、弥生時代中期～古墳時代前期に比定される土器が少量出土している。

まとめ

今回の調査では、これまでの調査と同様、平安時代後期と奈良時代に埋没した水田を検出した。さらに下層の調査では、弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代前期に比定される土器を検出した。これらの土器の遺存状況はきわめて良好で、中でも弥生時代中期については付近に遺構が存在したことを示唆している。

註1 徳八尾市文化財調査研究会「田井中遺跡（第3次調査）」『昭和60年度事業概要報告』徳八尾市文化財調査研究会報告9 1986

註2 徳八尾市文化財調査研究会「田井中遺跡（第4次調査）」『昭和61年度事業概要報告』徳八尾市文化財調査研究会報告14 1987



第1調査面全景(東から)



第2調査面全景(東から)

18 萱振B遺跡（第4次調査）

調査地 八尾市緑ヶ丘1丁目118

調査期間 昭和62年12月3日～昭和63年3月19日

調査面積 1200㎡

はじめに

今回の発掘調査は市営住宅建て替えに伴うもので、当調査研究会が萱振B遺跡内で実施した第4次調査にあたる。

当遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置しており、現在の行政区画では緑ヶ丘1～4丁目にあたる。当遺跡の所在する沖積地は八尾市域の中央部を南東から北西へ伸びるもので、多くの遺跡が存在している。当遺跡の南には小阪合遺跡・成法寺



調査地周辺図

遺跡・東郷遺跡、西には宮町調査・佐堂遺跡、北には笠振A遺跡・山賀遺跡が存在している。

当遺跡内では、昭和57年に大阪府教育委員会によって府営住宅建て替えに伴う発掘調査が実施されている。その結果、古墳時代前期（布留式古墳）の土器墓室群が検出された。次いで、昭和58年には前記調査区の南隣りで、大阪府教育委員会が発掘調査を実施した結果、弥生時代中期の方形周溝墓が検出されている。さらに、昭和60年には当調査研究会が2度（第1次調査・第2次調査）にわたる調査を実施した結果、第1次調査では、古墳時代前期の建物^{21.3}を構成する柱穴群^{21.4}、第2次調査では古墳時代後期の古墳（方墳）1基を検出した。昭和61年度に当調査研究会が実施した第3次調査^{21.5}では、古墳時代前期の溝・小穴を検出している。今回の調査地は、第3次調査地の西隣りにあたる。

調査概要

住宅・雨水貯水槽の構築予定地にあわせて調査区を3ヶ所設定した。南から第1次調査区（東西42×南北12m）・第2次調査区（東西42×南北12m）・第3次調査区（東西10.5×南北9.1m）と呼称した。

掘削に際しては、八尾市教育委員会の指示書に基づいて、現地地表下約0.5m（標高6.5m）前後までの土層を機械掘削した。以下、0.7mを人力掘削して遺構・遺物の検出に努めた。その結果、第1調査区では1面、第2調査区・第3調査区では2面にわたる調査を実施した。

第1調査区

現地地表下0.6m（標高6.2～6.3m）前後に堆積する淡茶色細砂混粘土上面を調査対象とした。調査の結果、時期不明の溝1条を検出した。

第2調査区

2面（第1調査面・第2調査面）にわたる調査を実施した。第1調査面は現地地表下0.6m（標高6.2～6.3m）前後に存在する淡茶色細砂混粘土層上面を調査対象面とした。調査の結果、溝1条を検出した。第2調査面は第1調査面より約0.3m下層に堆積する灰青色シルト上面を調査対象面とした。その結果、古墳時代前期（布留式期）に比定される上坑1基・小穴5個・溝1条を検出した。

第3調査区

2面（第1調査面・第2調査面）にわたる調査を実施した。第1調査面は現地地表下0.8m（標高6.2m）前後に存在する淡茶色細砂混粘土層上面を調査対象面とした。調査の結果、鎌倉時代に比定される溝2条を検出した。第2調査面は第1調査面より約0.3m下層に堆積する茶褐色シルト混粘土上面を調査対象面とした。調査の結果、古墳時代前期（布留式期）に比定される溝1条を検出した。なお、この溝内の下層部分からは壺・甕・高杯等の土器類が多量に出土している。

まとめ

今回の調査では、古墳時代前期（布留式期）と鎌倉時代に比定される遺構を検出した。中でも第3調査区の第2調査面で検出した古墳時代前期（布留式期）に比定される溝からは、多量の土器が出土しており、布留式期の中段階の上器を考察するうえで良好な資料と言えよう。

註1 大阪府教育委員会「壹振遺跡発掘調査概要・I—八尾市緑ヶ丘2丁目所在—」1983

註2 大阪府教育委員会「壹振遺跡現地説明会資料」1983

註3 跡八尾市文化財調査研究会「壹振B遺跡（第1次調査）」昭和60年度事業概要報告 跡八尾市文化財調査研究会報告9 1986

註4 跡八尾市文化財調査研究会「壹振B遺跡（第2次調査）」昭和60年度事業概要報告 跡八尾市文化財調査研究会報告9 1986

註5 跡八尾市文化財調査研究会「壹振B遺跡（第3次調査）」昭和61年度事業概要報告 跡八尾市文化財調査研究会報告14 1987



第3調査区第2調査面全景(東から)

19 ^{あとべ}跡部遺跡（第3次調査）

調査地 八尾市安中町3丁目26・19-5

調査期間 昭和62年4月6日～昭和62年5月18日

調査面積 1150㎡

はじめに

今回の発掘調査は、集合住宅建設に伴うもので、当調査研究会が跡部遺跡内で実施した発掘調査の第3次調査にあたる。

跡部遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川から平野川が分流する地点以西の両河川に挟まれた三角状の微高地に位置する弥生時代以降の遺跡である。現在の行政区画では跡部本町・太子堂・春日町・渋川町にあたる。周辺には、植松遺跡・太子堂遺跡・亀井遺跡・竹淵遺跡・久宝寺遺跡が同様の地理的条件で位置している。なお、当遺跡内には、渋河寺跡の推定地が含まれている。



調査地周辺図

当遺跡内での発掘調査は、昭和56年11月に八尾市教育委員会が春日町1-57で実施したものが最初である(①)。この調査では、弥生時代前期～中期の溝、古墳時代前期の木棺等が検出された。その後、昭和57年度から59年度にかけて、八尾市教育委員会・当調査研究会が遺跡推定範囲の西部にあたる跡部本町で3度の調査を実施し、弥生時代後期～古墳時代前期と平安時代～鎌倉時代に比定される遺構・遺物が検出されている(②～④)。続いて昭和59年6月に八尾市教育委員会が当遺跡推定範囲の北東部にあたる安中町3-52で発掘調査を実施した結果、古墳時代中期末から後期初頭に比定される遺構・遺物が検出されている(⑤)。その他、当遺跡内には渋谷寺跡の推定地が含まれており、これまでに渋谷寺に関連する瓦等の遺物が出土している。今回の調査地は、八尾市教育委員会昭和59年度調査地(⑤)の北東に接している。

調査概要

八尾市教育委員会の指示書によれば、試掘調査で調査対象地の北東部で、近世の大和川付け替え(宝永元年 1704年)以降縮小した長瀬川旧流路跡である厚い砂の堆積が確認されたため、建物基礎部分のみトレンチ(第1調査区～第4調査区)を設定し、長瀬川旧流路・左岸堤防を検出することが主な目的とされていた。

各調査区の規模・方向等は以下の通りである。

第1調査区：調査対象地北部に設定 南東-北西方向 長さ73.5m

第2調査区：調査対象地西部に設定 北西-南東方向 長さ47m

第3調査区：調査対象地西部に設定 北西-南東方向 長さ39.5m

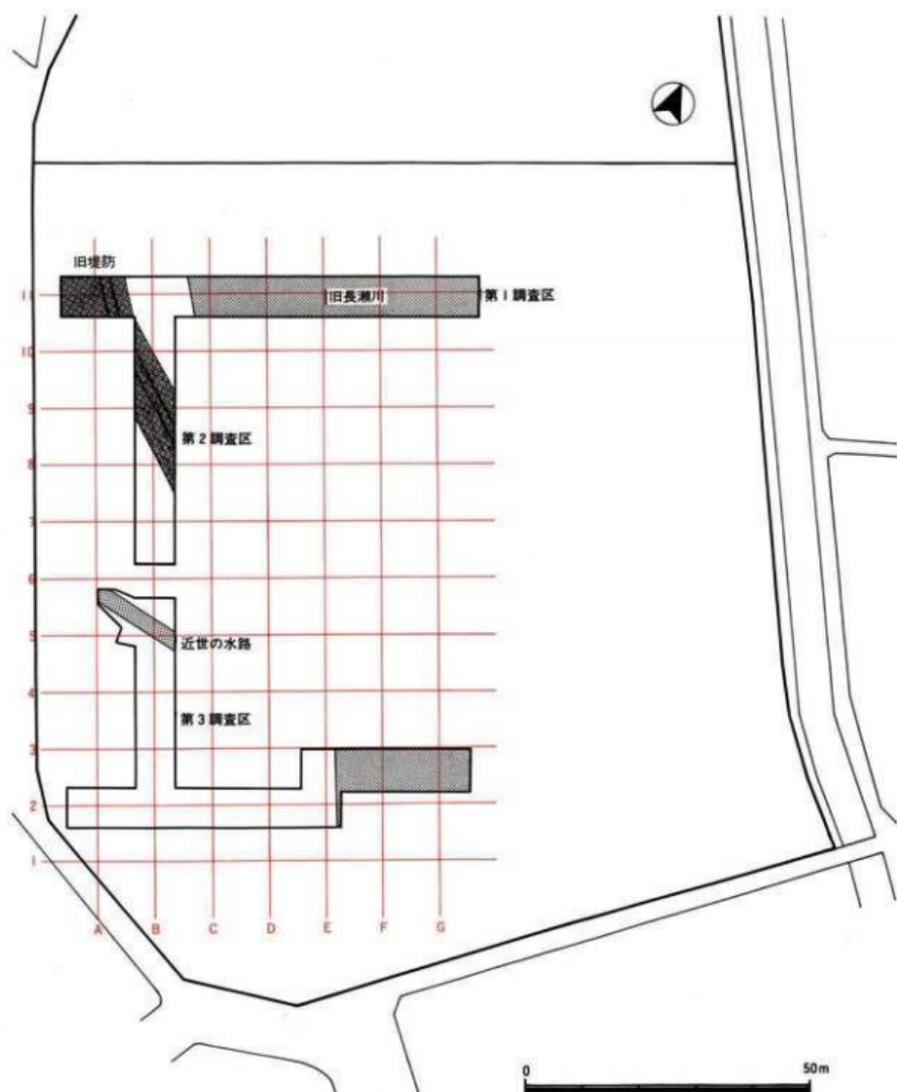
第4調査区：調査対象地南部に設定 南西-北東方向 長さ70m

掘削深度は、機械で2.5m、人力で1mである。掘削に際しては、壁面の勾配を充分とり段を設けたため、機械掘削の上幅7m・人力掘削の上幅1mとなり、事実上壁面観察のみの調査となった。また、第1調査区・第4調査区の北東側約1/2では、現地表から2.5m以上が厚い砂の堆積で占められていたため、人力掘削を断念し、長瀬川旧流路左岸の落ち込む部分を平面的に広げるような調査方法をとった。第3調査区北端では、機械掘削途中近世末期の水路の板枠を検出したため、この部分について拡張し、平面的な調査を実施した。

周辺の調査一覧表

番号	調査主体	調査地	調査期間	文 章	発行
①	八尾市教育委員会	春日町1-57	56年 11/9～11/19	八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 1960・1961年度；(財)報告2	1963. 3
②	当調査研究会(第1次)	跡部本町2-3	57年 10/1～10/5	昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査—その成果と概要	1963. 3
③	同 (第2次)	跡部本町2-46	59年 3/1～3/31	昭和59年度事業概要報告；(財)報告7	1965. 3
④	八尾市教育委員会	跡部本町2-44	59年 5/10～5/22	八尾市内遺跡跡地昭和59年度発掘調査報告；(財)報告11	1965. 3
⑤	同	安中町3-52	59年 6/18～7/2	同 上	1965. 3

* この調査地は昭和63年4月1日付で遺跡名を久宝寺遺跡と改訂



調査区設定図および地区割図

調査の結果、近世の水路・長瀬川旧流路左岸・堤防のほか、古墳時代の遺物包含層を確認した。

基本層序

調査地全域は0.5～0.7mの盛土で覆われており、北東部には長瀬川旧流路跡である砂が厚く堆積している。南西部では、概ね以下の6層の堆積が認められた。

第Ⅰ層：黄褐色粘質土～シルト。1m前後。長瀬川の縮小後近代の工場建設までに堆積した土層である。

第Ⅱ層：黄褐色砂質土。0～1m前後。長瀬川の旧堤防を構成する土層である。近世の遺物が若干含まれる。

第Ⅲ層：灰色粘土～粘質土。0.3～0.5m。鉄分の沈着が認められる。近世の水路はこの層上面から構築されている。

第Ⅳ層：灰緑色粘土～シルト。0.3～0.5m。

第Ⅴ層：青灰色粘土～シルト。0.3～0.5m。平安時代末期～鎌倉時代の遺物(4～10)を含む。この層が付け替え以前の長瀬川左岸を構成している。

第Ⅵ層：粘土・シルト・砂の互層。0.3～0.5m。調査地北西部でブロック状に堆積するⅥA層と、南西部で薄く何枚にも重なって堆積するⅥB層とに分かれる。ⅥB層の下部には、古墳時代中期～後期の遺物(1～3)が含まれる。

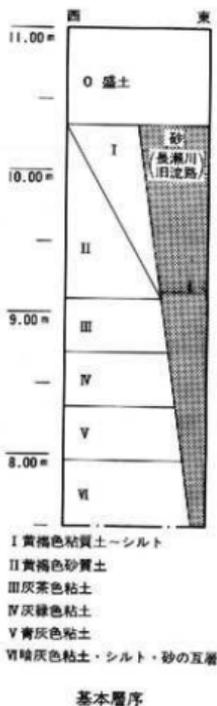
検出遺構 出土遺物の概要

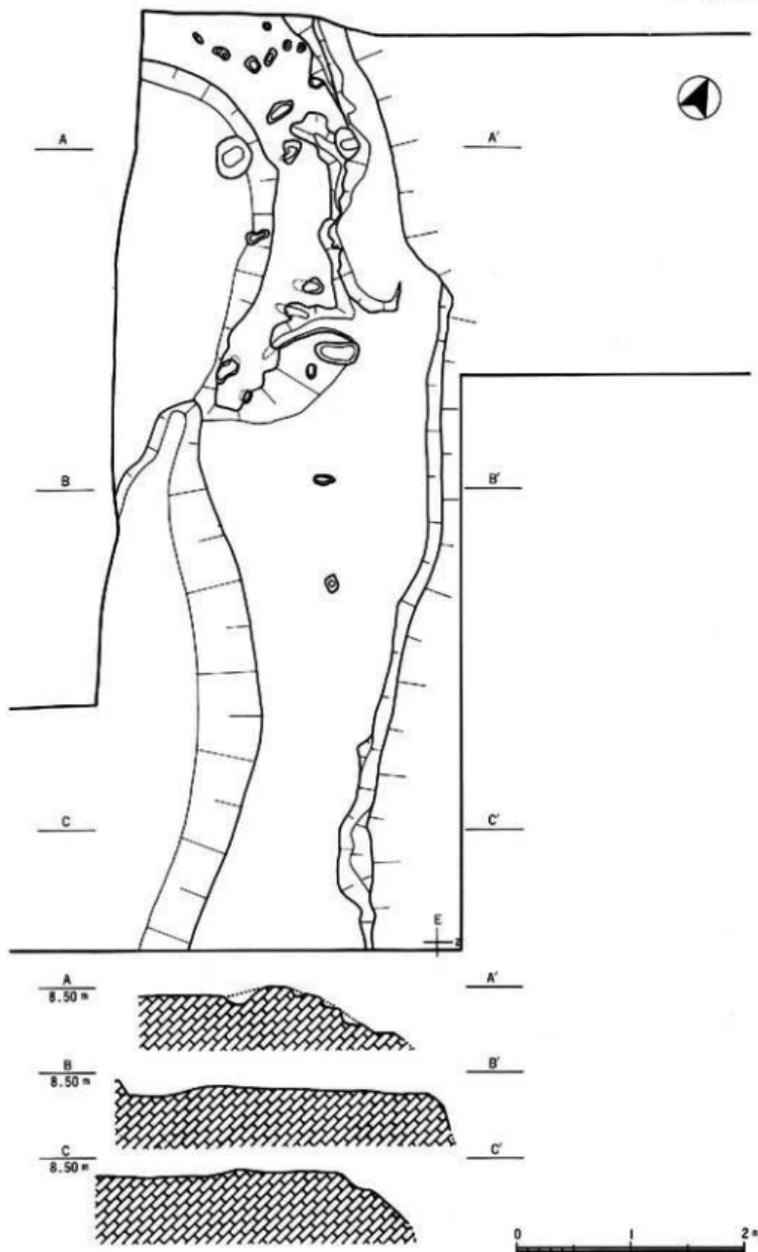
長瀬川左岸

第1調査区西端から22～24m地点および第4調査区西端から45～47m地点で検出した。第Ⅴ層が急に落ち込むもので、そこから東には砂が厚く堆積している。第Ⅴ層上面の標高は8.3～8.5m程度である。第Ⅴ層からは、土師器小皿(4・5)・中皿(6・7)・甕(8)・瓦器輪(9)・白磁碗(10)などが出土している。

長瀬川旧堤防

第1調査区西端から12m前後の範囲・第2調査区北端から12～30mの範囲で検出した。最上部はⅡ層が山形に堆積するもので、最上部の標高は9.5～9.8mを測る。堤防の北東側(河川側)には第Ⅲ層・第Ⅳ層の粘土～シルトが堆積しており、長瀬川縮小後徐々に堆積していったことが窺える。第2調査区の堤防南西側は下部に灰色粘土のブロック層と砂質土が交互に何層かずつ積み上げられている。





第4調査区旧長瀬川左岸断面図

近世の井戸

第1調査区西端から26m地点の南壁で検出した。上部は削平されており、全体の形状は不明であるが井戸側に桶・瓦を用いたもので、底部は長瀬川旧流路の砂層に達している。

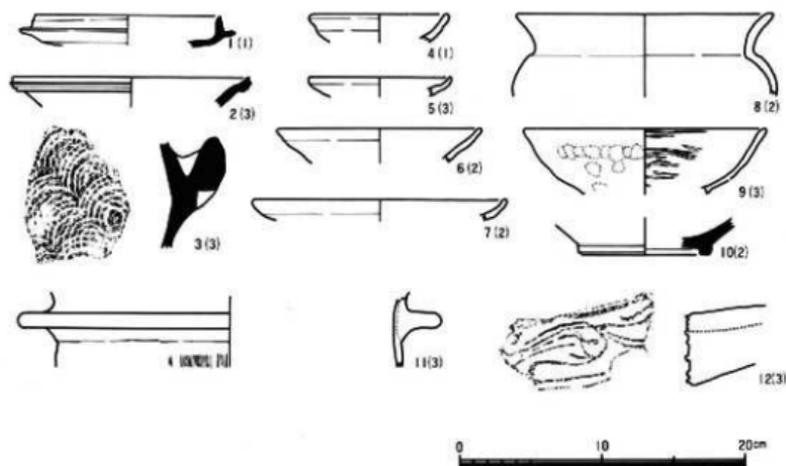
近世の水路

第3調査区北端で検出した。ほぼ東西に伸びる溝内部に木枠・竹管を埋めたもので、溝の構築面は標高9m前後の第III層灰色粘土上面と考えられる。溝の規模は幅5m・深さ2m程度である。溝底のレベル高は、西が高く東が低い。板材は溝底に据えられ、南北に側板を立て、釘・杭などで固定し、4層青灰色粘土と砂で埋め立てられている。木枠内部はほぼ上面まで5層粗砂で充填されており、中央部に竹管が埋設されている。竹管のレベルは東が高く西が低い。5層粗砂には、主に近世末期の陶磁器(13~52)が多量に含まれているが、他に洪河寺(飛鳥時代)の軒平瓦(12)も含まれている。

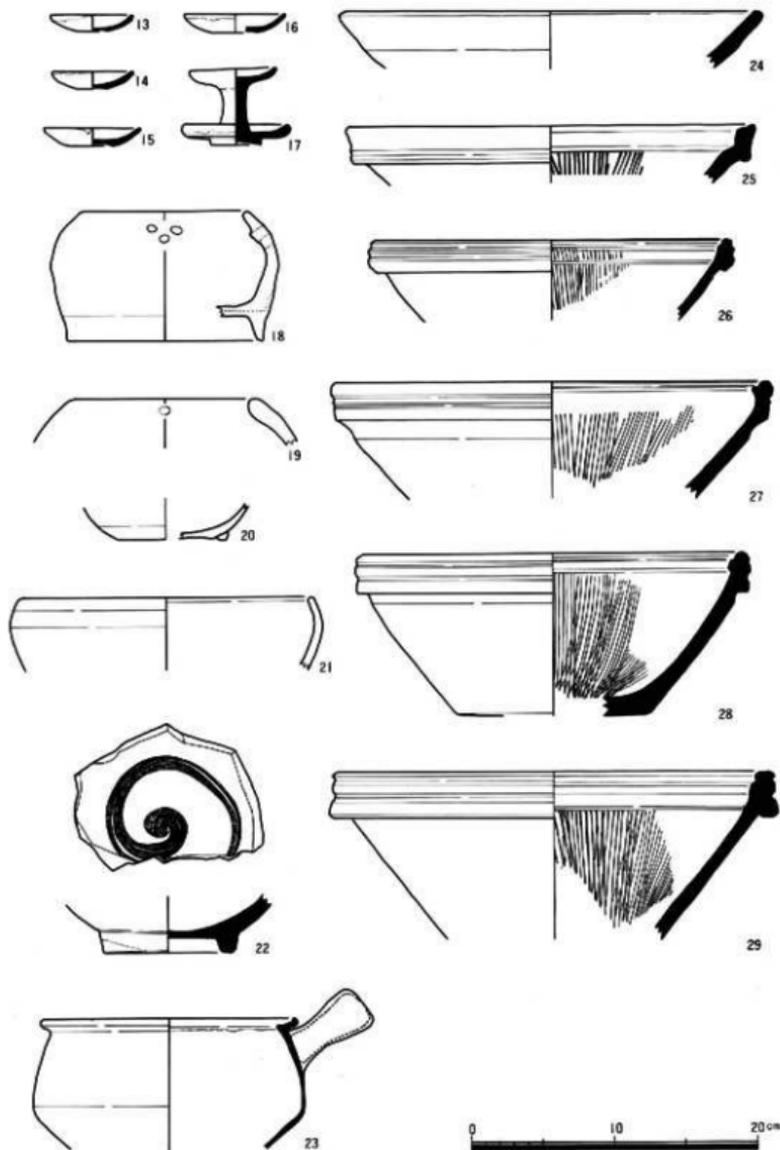
まとめ

調査の結果、長瀬川の変遷に伴って、3つの時期に大別することができる。①長瀬川の流路が固定するまでの時期(古墳時代~平安時代)・②大和川付け替えまでの時期(平安時代~江戸時代中期)・③付け替え以後の時期(江戸時代中期以降)

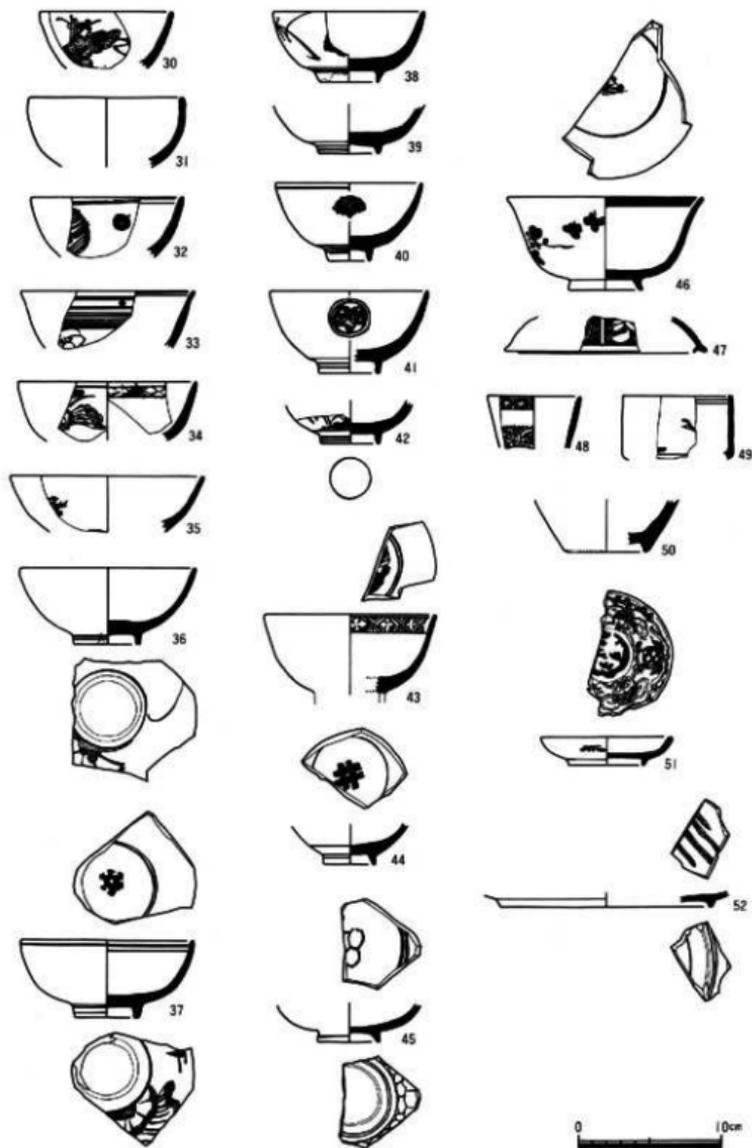
- ①の時期：一部で遺物包含層を確認したが、ほとんどは沼沢地状の土層堆積を示している。
 ②の時期：旧長瀬川左岸は、現長瀬川左岸より80m両側にあり、水量の豊富な大河であった。
 ③の時期：長瀬川が縮小した後は、井戸・水路が構築され、取水・排水に利用されていた。



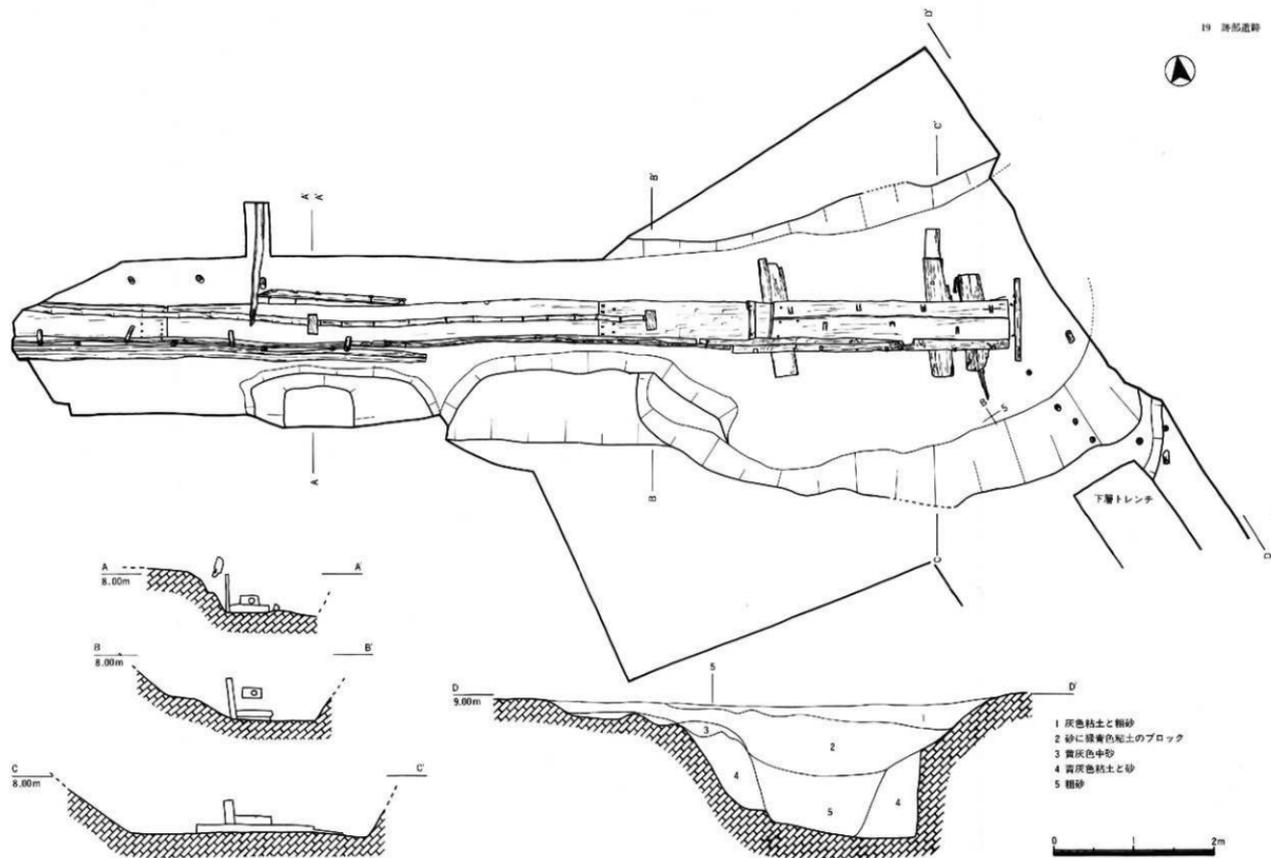
出土遺物実測図1 ()内の数字は調査区名



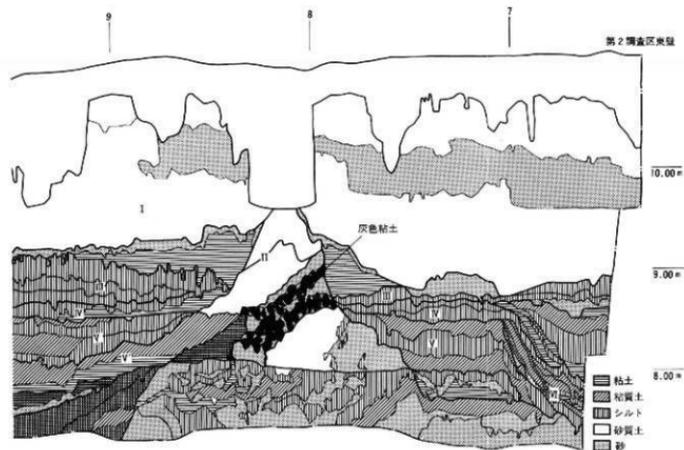
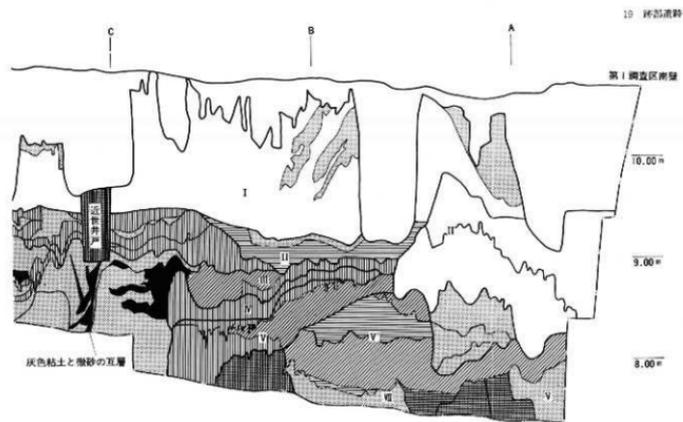
出土遺物実測図 2



出土遺物実測図 3



第3調査区 水路平断面図



断面略図 たて1:20 よこ1:100



第3調査区拡張区(西から)



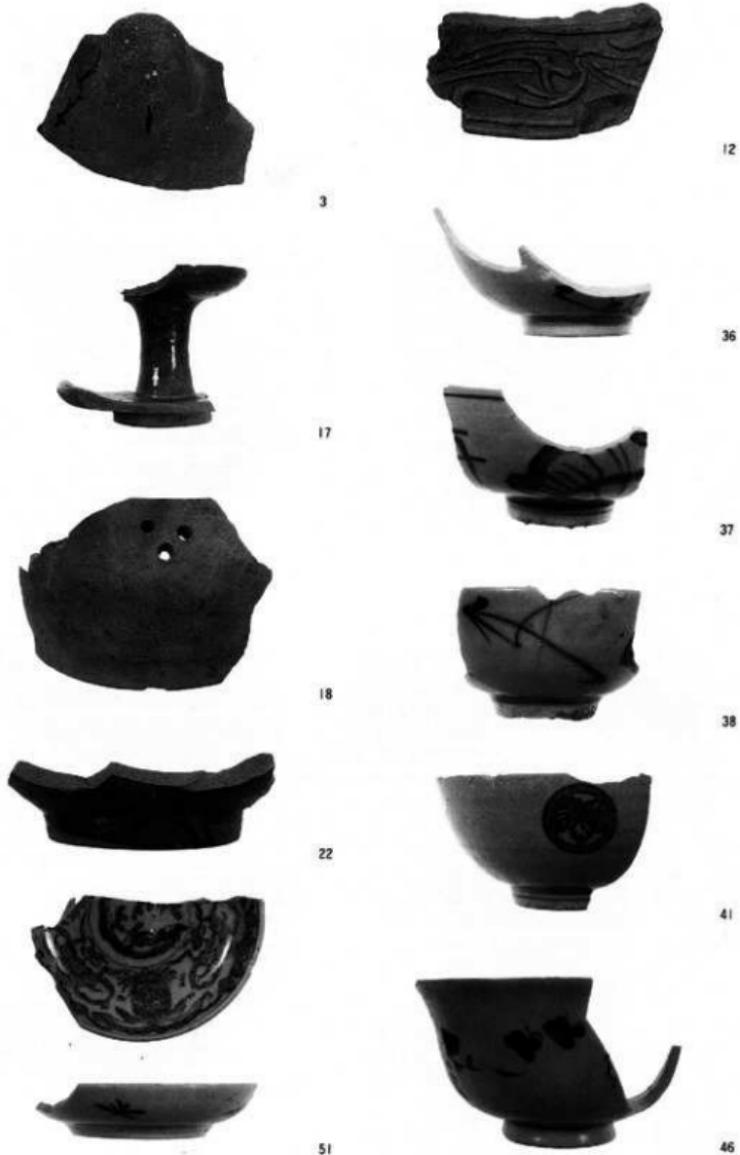
同上 近世の水路(西から)



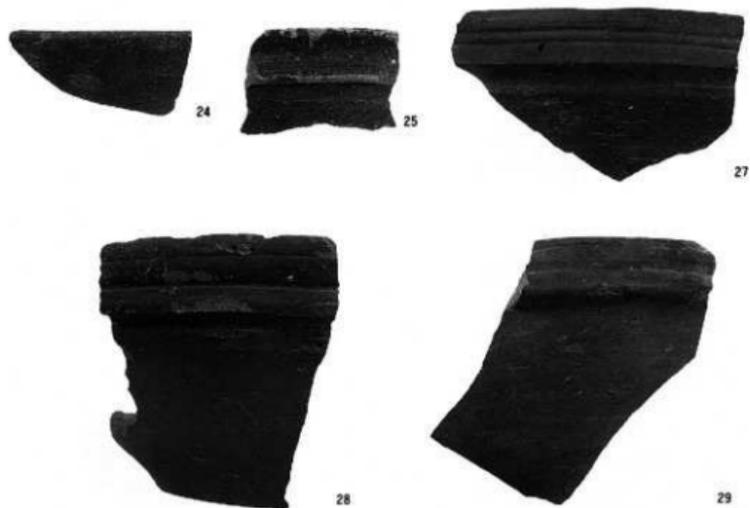
第3調査区東壁



第4調査区旧長瀬川左岸検出状況(南から)



甌 (3)、軒平瓦(12)、近世陶磁器(17·18·22·36~38·41·46·51)



こね鉢、すり鉢(約1:3)



20 成法寺遺跡（第3次調査）

調査地 八尾市清水町2丁目2-5

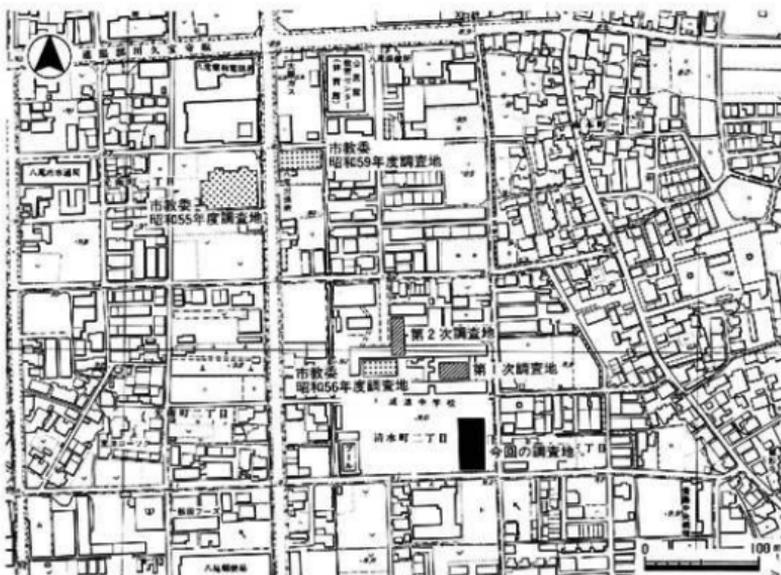
調査期間 昭和62年5月25日～昭和62年7月15日

調査面積 812㎡

はじめに

今回の発掘調査は、八尾市立成法中学校校体育館に伴うもので、当調査研究会が成法寺遺跡内で実施した第3次調査にあたる。

当遺跡は長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置しており、現在の行政区画では、光南町・本町・清水町・南本町・明美町一帯にあたる。当遺跡の周辺には、同様の立地条件で南東に東弓削遺跡・中田遺跡・小阪合遺跡・矢作遺跡、北東に東郷遺跡・壹振B遺跡、北西に宮町遺跡・佐堂遺跡が存在している。当遺跡の発見の契機は昭和56年5月に八尾市教育委員会が光南町1丁目で行った試掘調査による。その後、同地点での発掘調査によって古墳時代前期の方形周



調査地周辺図

溝墓と古墳時代後期の孤立柱建物群が検出され、2時期にわたる生活面が存在することが明らかになった。その後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により昭和62年度までに7回にわたる発掘調査が実施されてきた。これらの調査結果よって古墳時代前期～平安時代に至る遺構が広範囲にわたって存在することが明らかになった。

今回の調査区である成法中学校内では、校舎建設事業に伴う発掘調査を昭和56年度（八尾市教育委員会）・昭和57年度（当調査研究会—第2次調査）^{注2}・昭和58年度（当調査研究会—第3次調査）^{注3}の3回にわたり実施されてきた。これらの調査では、古墳時代前期の土坑・溝、古墳時代後期～奈良時代の土坑・孤立柱建物・溝が検出されている。今回の調査地は当中学校敷地内の南東部に位置し、当調査研究会が成法寺遺跡内で実施した第2次調査地から南へ80mの地点にあたる。

調査概要

体育館の建設予定地に合わせて調査区（東西20m・南北40m）の調査区を設定した。掘削に際しては、八尾市教育委員会が実施した試掘結果に基づいて、現状土下1.3mまでは機械掘削し、以下0.4mは人力掘削を実施した。調査では、2面（第1調査面・第2調査面）を調査対象とした。

第1調査面

現地地表下1.3m（標高7.9m）前後に堆積する橙色細砂混シルト層上面で鎌倉時代～近世に至る井戸2基・土坑1基・溝10条を検出した。

第2調査面

第1調査面から約0.4m下層（標高7.5m）付近に堆積する明青灰色細砂～黄橙色細砂混粘土層上面で奈良時代～鎌倉時代に比定される遺構・遺物を検出した。奈良時代に比定される遺構には、孤立柱建物3棟・土坑1基・溝34条、鎌倉時代に比定されるものには溝3条がある。

まとめ

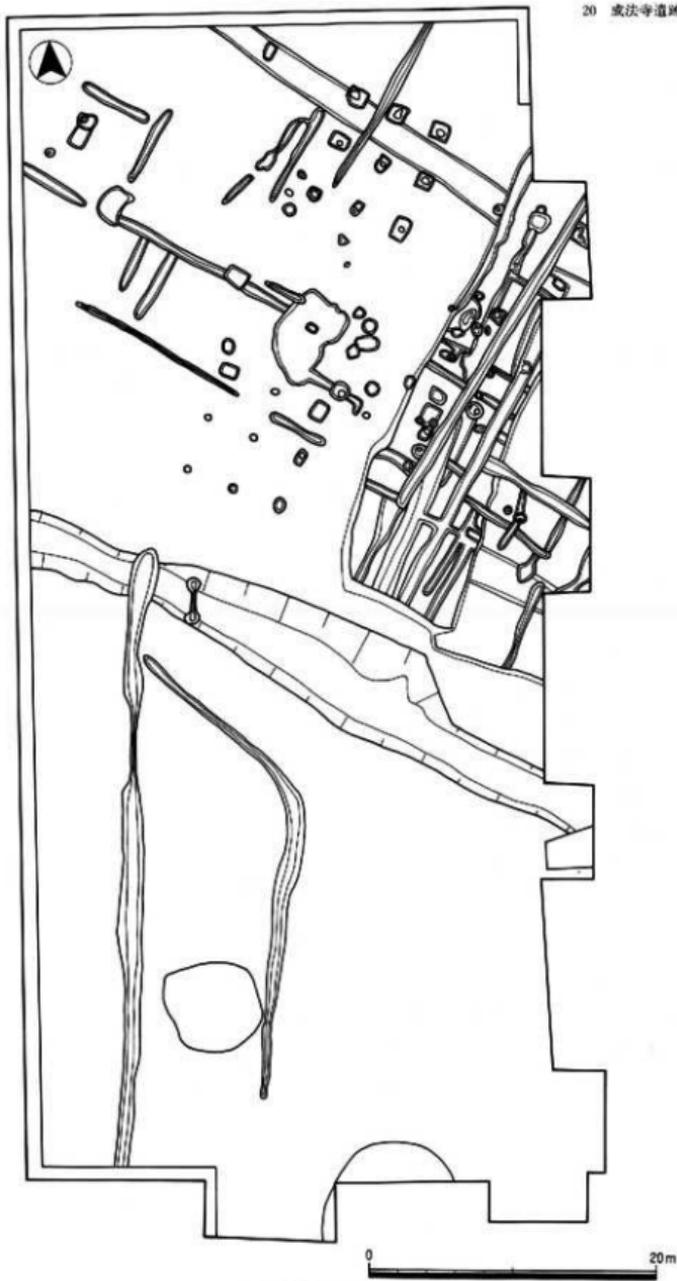
今回の調査では、奈良時代～近世に至る遺構・遺物を検出した。特に、今回の調査では、孤立柱建物を中核とする奈良時代の居住域の一部を検出することができた。奈良時代の遺構については、当調査地の北西約30～50m地点で昭和57年度に当調査研究会が実施した発掘調査（第2次調査）でもこの時期の遺構が検出されており、今回の調査の結果、少なくとも南北100mにわたって居住域が広がっていることが確認された。

注1 朝八尾市文化財調査研究会『成法寺遺跡』1983

注2 昭和56年8月24日～8月31日調査 未報告

注3 朝八尾市文化財調査研究会『成法寺遺跡：市立成法中学校校舎増築に伴う埋蔵文化財発掘調査概要』昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査』1983

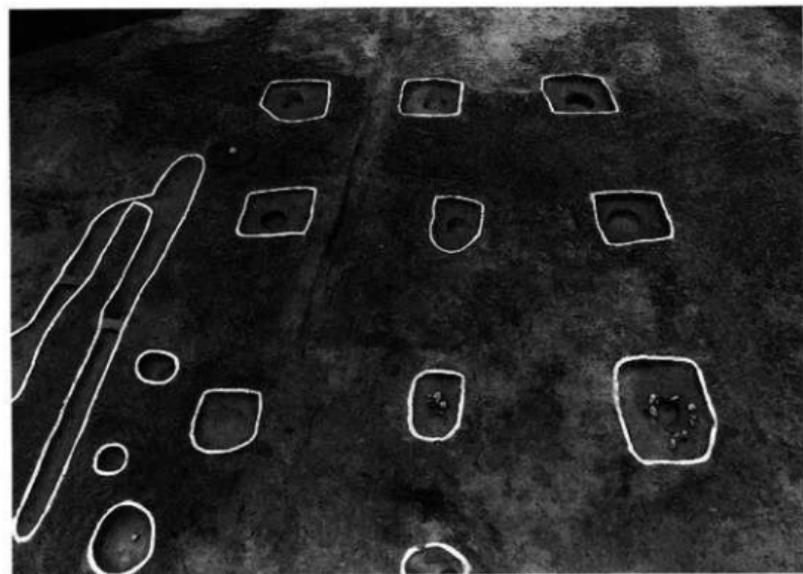
注4 朝八尾市文化財調査研究会『成法寺遺跡：八尾市立成法中学校校舎増改築に伴う発掘調査』昭和58年度事業概要報告』朝八尾市文化財調査研究会報告5 1984



検出遺構平面図



第2調査面全景(北から)



掘立柱建物検出状況(南から)

21 東弓削遺跡 (第3次調査)

調査地 八尾市八尾木東3丁目38

調査期間 昭和63年1月7日～昭和63年2月20日

調査面積 594㎡

はじめに

今回の発掘調査は、国家公務員合同宿舍建て替えに伴うもので、当調査研究会が東弓削遺跡内で実施した発掘調査の第3次調査にあたる。

当遺跡は、長瀬川から玉串川が分岐する「二俣」地区の北側に広がる沖積地上に位置しており、現在の行政区画では、東弓削・都塚・八尾木一带にあたる。当遺跡の所在する沖積地は、八尾市域の中央部を南東から北西に伸びるもので、当遺跡をはじめとして数多くの遺跡が立地している。当遺跡の北は中田遺跡と接し、さらに北～北西には小阪合遺跡・成法寺遺跡などが位置している。また、当遺跡の東には玉串川を挟んで恩智遺跡、長瀬川を挟んで南に弓削遺跡、西に老原遺跡が位置している。



調査地周辺図

当遺跡一带は、『統日本紀』神護景雲三年(769)十月三十日の条に「詔似由義宮、為西京」と記されているように由義宮・西の京の推定地とされている地域で、昭和42年に行なわれた国道170号線(大阪外環状線)の敷設工事の際、当該期に比定される土器が出土したことにより遺跡として認識されるようになった。その後、昭和50年には八尾市教育委員会により送水管敷設工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代中期から鎌倉時代に至る遺構・遺物が検出された。次いで昭和51年度には市教委が八尾木167番地で市立曙川中学校校舎建築に伴って実施した発掘調査では弥生時代後期～中世の遺物包含層を確認している。昭和57年度には、当調査研究会が前記と同じ調査地で校舎増築に伴って発掘調査(第1次調査)を実施した結果、古墳時代前期の遺物包含層と平安時代末期～鎌倉時代の水田を検出している。さらに、昭和61年度には東戸前102番地で当調査研究会が発掘調査(第2次調査)を実施しており、鎌倉時代末期の水田を検出している。

調査概要

宿舍建物の建設予定地に合わせて調査区を設定した。掘削に際しては、現地地表1～1.3mまでは機械掘削し、以下0.7mまでは人力掘削を実施して遺構・遺物の検出に努めた。調査では、3面(第1調査面～第3調査面)にわたる調査を実施した。なお、第3調査面の調査終了後、調査区の中央部に幅1m長さ40mのトレンチを設定し、1～1.3m程度を人力掘削して、遺構・遺物の確認を行なった(下層調査)。

第1調査面

現地地表0.9～1.3m(標高10.9～11.3m)の第3層茶灰色砂混粘質土上面で、近世の農耕に伴う多数の溝を検出した。溝は東西方向のもの28条、南北方向のもの9条あり、幅0.2～0.7m深さ0.05～0.15mを測る。内部には灰色粘土が堆積している。内部からは、陶磁器の小破片がごく少量出土している。

第2調査面

現地地表1.2～1.3m(標高10.7～11.0m)の第6層黄茶色礫混粘質土・粗砂上面で中世の畦状の高まりを検出した。南北方向に伸びるもので、幅0.5～1.1m・高さ0.1～0.2mを測る。中央部の南寄り、約3mの範囲が水口状にとざれている。ここより東側には、埋没河川である粗砂が堆積していることから、この高まりは、河川を区画する堤防・畦・道などの施設と考えることができる。東部に堆積する粗砂からは、おもに鎌倉時代の土師器皿・瓦器桶等の日常雑器や屋瓦が比較的多量に出土している。

第3調査面

現地地表1.4～1.7m(標高10.5～10.8m)の第7層灰茶色粘土上面で、水田を検出した。上層に堆積する粗砂から出土した遺物からみて、埋没時期は鎌倉時代と考えられる。水田は9筆あ

り、畦畔11条・唐鋤溝16条がある。唐鋤溝はすべて調査区の西部に集中していることから、東部と西部で異なった土地利用がおこなわれていたことが窺える。

下層調査

調査の結果、第9層・第11層で水田、第13層で古墳時代前期（庄内式期）の遺物包含層を確認した。

まとめ

今回の調査では、現地表下2.6～2.8m（標高9.5m）の範囲に古墳時代前期（庄内式期）の生活面があることが明確となった。なお、その上層に堆積する黒灰色粘土には、同時期の遺物のほかに弥生時代中期～後期のものもあり、近隣に弥生時代の生活面が存在する可能性が高い。

註1 八尾市教育委員会『東弓削遺跡』1976

註2 八尾市教育委員会「東弓削遺跡（八尾木東地区）」[昭和51・52年度歴史文化財発掘調査年報]：八尾市文化財調査報告4 1979

註3 朝八尾市文化財調査研究会「東弓削遺跡：市立曙川南中学校校舎増築に伴う発掘調査概要」[昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査] 1983

註4 朝八尾市文化財調査研究会「東弓削遺跡（第2次調査）」[昭和61年度事業概要報告] 朝八尾市文化財調査研究会報告14 1987



第1調査面全景(東から)



第3調査面全景(東から)

22 やほぎ 矢作遺跡 (第2次調査)

調査地 八尾市高美町4丁目141

調査期間 昭和62年10月23日～昭和62年11月18日

調査面積 160㎡

はじめに

今回の発掘調査は、旧八尾納税協会の事務所建設に伴って実施したもので、当調査研究会が矢作遺跡で実施した第2次調査にあたる。

当遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に位置しており、現在の行政区画では南本町5丁目～7丁目・高美町3丁目・4丁目にあたる。当遺跡周辺で当遺跡と同様の立地条件を示す遺跡は、南に東弓削遺跡、東に中田遺跡・小阪合遺跡、北に成法寺遺跡・東郷遺跡・壹振A遺跡がある。

当遺跡では、昭和55年度以降矢作神社周辺で、八尾市教育委員会による調査が数件実施され



調査地周辺図

ており、古墳時代と鎌倉時代の遺構が検出されている。昭和61年3月～4月に高美町3丁目
八尾市教育委員会が実施した発掘調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の溝、古墳時代後期
の大型掘立柱建物、鎌倉時代以降の耕作に伴う小溝が検出され、当遺跡が弥生時代後期から中
世に至る複合遺跡であることが明確になった。さらに、昭和61年度に当調査研究会が高美町3
丁目46で実施した調査（第1次調査）^{註1}では、弥生時代後期の溝、古墳時代後期の溝、平安時代
後期～鎌倉時代後期の掘立柱建物・井戸・土坑、室町時代の溝等が検出されている。なお、今
回の調査地点は当調査研究会が実施した第1調査地から南西約150mの地点にあたる。

調査概要

八尾市教育委員会の試掘結果に従って、現地表下1.1m付近までに堆積する盛土・田耕土につ
いては機械掘削し、以下0.5～0.7m前後を人力掘削した。

その結果、現地表下1.6m前後（標高8.7m）前後に堆積する灰茶色シルト層上面で、古墳時
代前期・古墳時代後期・奈良時代に比定される遺構・遺物を検出した。古墳時代前期に比定さ
れる遺構には、土坑1基がある。古墳時代後期に比定される遺構には、溝8条・小穴2個があ
る。奈良時代に比定される遺構は、自然河川である。

まとめ

今回の調査では、これまでの調査結果と同様、弥生時代後期・古墳時代前期・古墳時代後期・
奈良時代に比定される遺構・遺物を検出することができ、小面積であるにもかかわらず多大な
成果が得られた。また、包含層や自然河川からは二次堆積ではあるが直輪片が出土しており、
近隣に古墳の存在する可能性が示唆されよう。

註1 八尾市教育委員会「矢作遺跡発掘調査概要」〔八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告Ⅱ〕八尾市文化財調査報告15

註2 財団法人文化財調査研究会「矢作遺跡（第1次調査）」〔昭和61年度事業概要報告〕財団法人文化財調査研究会報告14
1987



検出遺構平面図



調査区全景(西から)



調査区東部(東から)

23 ^{きゅうほうじ}久宝寺遺跡 (第2次調査)

調査地 八尾市久宝寺6丁目226

調査期間 昭和63年2月16日～昭和63年2月29日

調査面積 210㎡

はじめに

今回の発掘調査は、共同住宅の建設に伴って実施したもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第2次調査にあたる。

久宝寺遺跡は、八尾市の北西部に位置し、旧大和川の主流である長瀬川左岸に立地する遺跡で現在の行政区画では北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・亀井・北亀井町および東大阪市大連南にあたる。当遺跡周辺では、東に東郷遺跡・成法寺遺跡、南に跡部遺跡・亀井遺跡・竹瀬遺跡、西に加美遺跡(大阪市)、北に弥刀遺跡(東大阪市)・佐堂遺跡・美園遺跡・宮町遺跡がある。



調査地周辺図

当遺跡内では、昭和56年度以降働大阪文化財センター・働東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会により発掘調査が実施されてきた。特に昭和57年度以降働大阪文化財センターにより近畿自動車道大塚～吹田線建設に伴う発掘調査が実施された結果、縄文時代晚期から平安時代に至る遺構・遺物が検出されている。

調査概要

共同住宅建築予定地にあわせて調査区を設定した。掘削に際しては、現地表下1.0mまでを機械掘削し、以下0.2mは人力掘削し遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、現地表下1.4m（標高6.6m）前後に堆積する暗灰色粘土層上面で、溝4条（SD-1～SD-4）と河道1条（NR-1）を検出した。

基本層序

第0層：盛土。近年に調査区西側へ客土された土層である。上面の標高8.00m前後。

第1層：耕土。暗灰色砂質土。層厚5～20cm。ただし、西側は客土する際に削平を受けている。

第2層：茶灰色砂質土。層厚10～25cm。調査区西側で認められ、近世から現代までの磁器等が出土した。

第3層：本層は、調査区東側と西側で層相が異なっていた。

第3A層 黄褐色細砂混り粘質土。層厚10～20cm。調査区東側で認められた。

第3B層 暗灰褐色砂質土。層厚10～30cm。調査区西側で認められた。

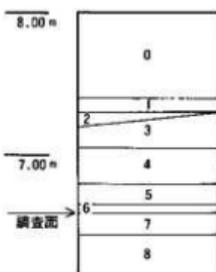
第4層：褐灰色細砂混り粘質土。層厚10～40cm。調査区全域で認められた。

第5層：暗褐色～暗黄褐色粘質土。層厚10～15cm。調査区東側で認められ、本層上面からNR-1が切込んでいる。

第6層：明灰色粘土。層厚5～15cm。粘性の高い土層である。調査区北東側で認められた。なお、第3層から本層までの土層中には弥生時代後期から奈良時代までの土器が混在していた。

第7層：暗灰色粘土。層厚10～20cm。調査区東側で認められた。本層上面を調査面とした。

第8層：暗灰茶色細砂混り粘土。層厚30cm以上。調査区東側で認められた。第8層と本層の境界線は不明瞭である。両層から弥生時代後期の土器が出土した。



基本層序模式図

検出遺構・出土遺物

溝（SD-1～SD-4）

SD-1

調査区の北東隅で検出した。北西—南東方向へ伸びるもので両端は調査区外に至る。検出長2.0m、幅0.9~1.0m、深さ0.35mを測る。断面の形状は、逆台形である。内部堆積土は、上層の淡灰褐色砂質土—粘質土と下層の灰茶色細砂混粘土の2層に分れるが、境界線は不明瞭である。内部から、土師器と須恵器の小破片が出土している。

SD-2

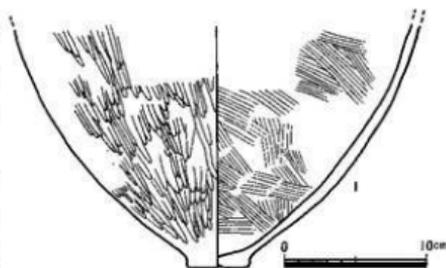
調査区東側の中央部付近で検出した。東北東—西南西へ直線的に伸びる。検出長5.2m、幅0.2m、深さ0.08m前後を測る。断面の形状は半円形を呈する。内部堆積土は、灰褐色粘土一層である。内部から土師器の小破片が少量出土している。

SD-3

SD-2の北1.5mで検出した。SD-2とほぼ平行して伸びるが、西端は北方へ屈曲する。検出長4.6m、幅0.25m前後、深さ0.06m前後を測る。断面の形状は、半円形を呈する。内部堆積土層は灰褐色粘土一層である。内部から土師器の小破片が少量出土している。

SD-4

調査区の中央部付近で検出した。平面の形状は、「く」の字形を呈するもので、南西側は自然河道(NR-1)によって切られている。検出長4.0m、幅1.5~2.8m、深さ0.4mを測る。断面の形状は、逆三角形を呈する。内部には、上層から淡黄灰色粘土混り微砂・淡灰白色微砂・淡灰色粘土混り微砂・暗灰色細砂混り粘土が堆積している。遺物は主に淡灰色粘土混り微砂と暗灰色細砂混り粘土から、弥生時代後期に比定される壺・高杯・甕の小破片と土師器の小破片が出土している。



SD-4 出土遺物実測図

河道 (NR-1)

NR-1

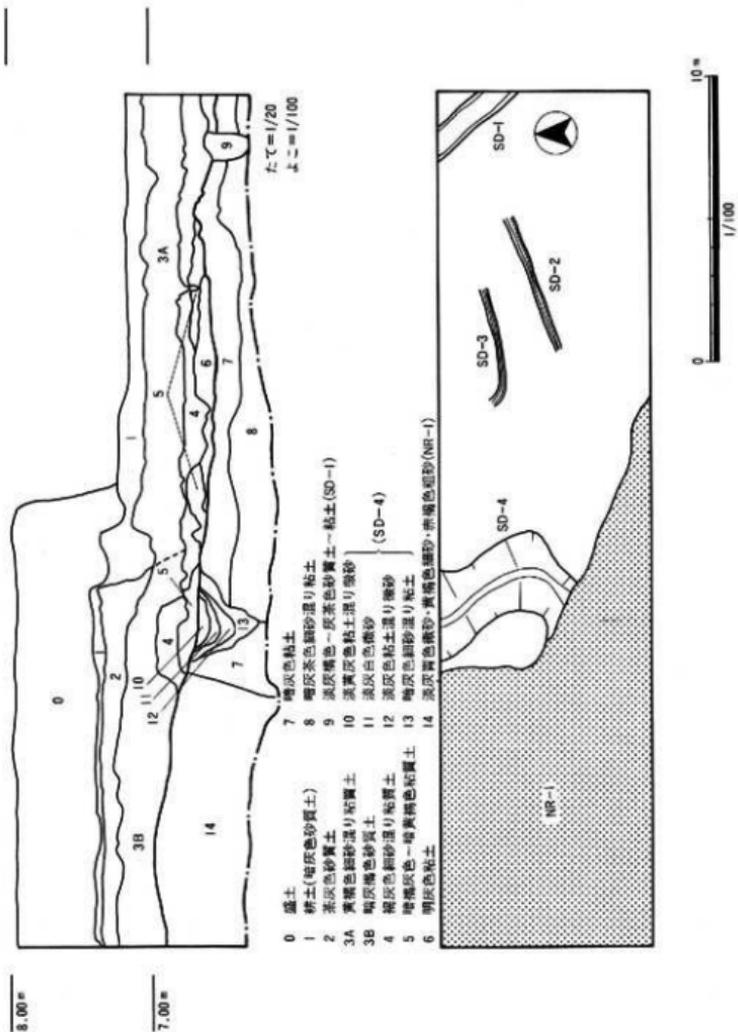
調査区の中中央部付近から西側全域で検出した。検出長12.5m、幅10m以上、深さ1m以上を測る。内部には、淡灰青色微砂・黄褐色細砂・赤褐色粗砂が堆積している。出土遺物には、弥生時代後期の壺・鉢・高杯・甕、古墳時代前期から後期の土師器鉢・高杯・甕・須恵器杯身・杯蓋・甕・器台、奈良時代の土師器杯、須恵器杯身、丸瓦がある。

まとめ

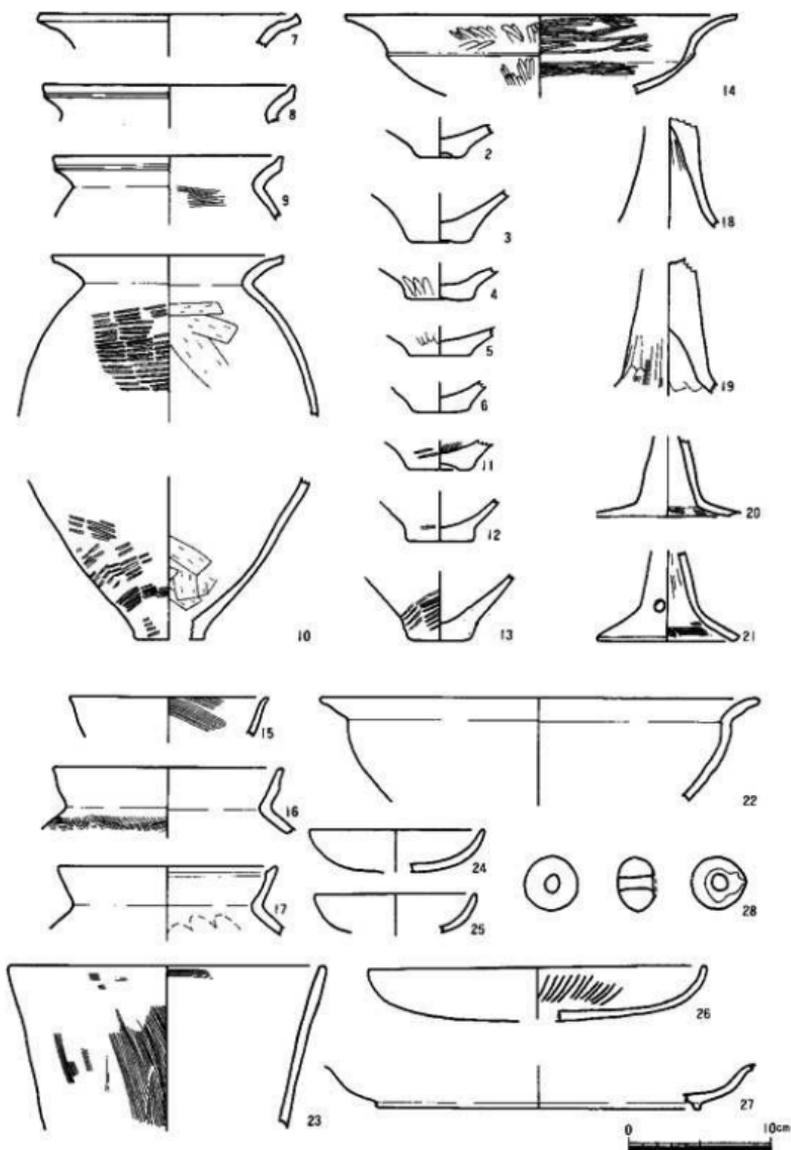
久宝寺遺跡では、これまでに実施されてきた調査の結果、縄文時代晩期から平安時代に至る

遺構・遺物が検出されており、遺跡の実態が解明されつつある。

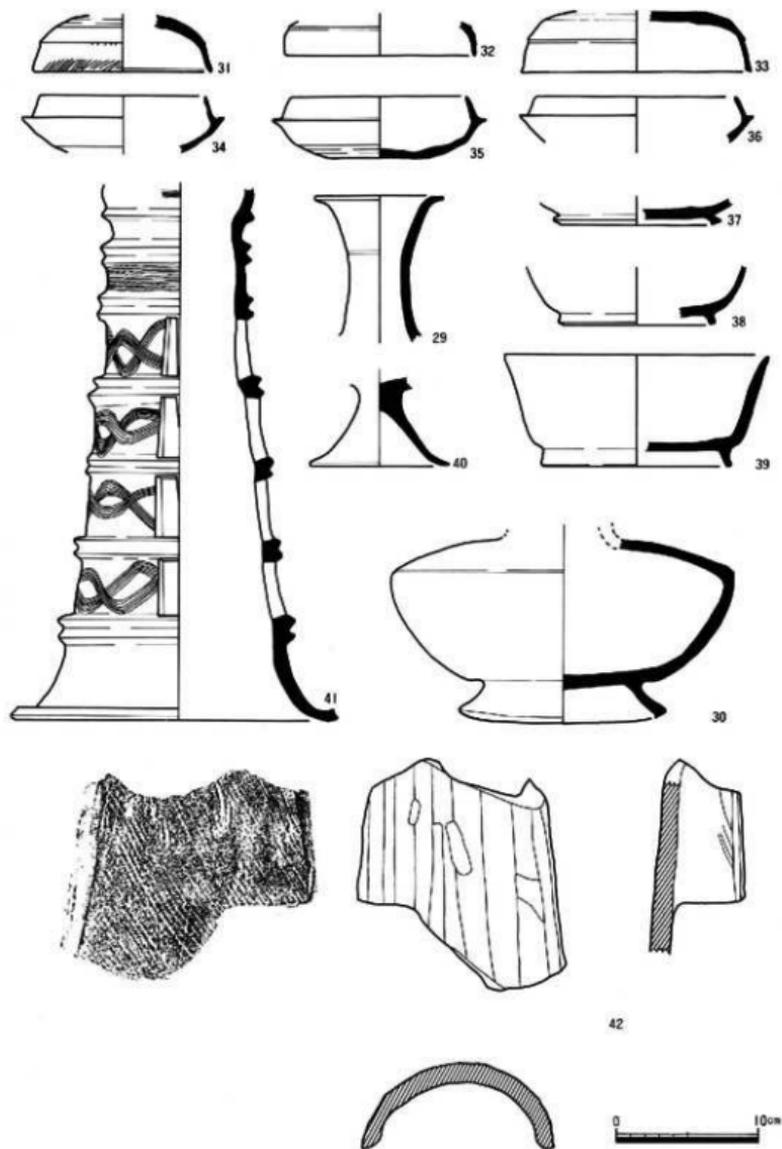
今回の調査では、弥生時代後期から奈良時代に至る遺構・遺物を検出した。特に遺物については比較的良好な資料が出土していることから、当調査地に近接して集落が存在している可能性が高いと考えられる。



検出遺構平面図



出土遺物実測図1



出土遺物実測図 2

出土遺物観察表

遺物番号	器 種	法 量 (cm)	形 態・調 整 等 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	出 土 位 置
1	弥生土器 壺	底 径 4.2	中央がわずかに窪んだ突出した底部から、斜上方へ丸味をもって体部が伸びる。 内面はハケメ。外面体部は縦方向のヘラミガキ。底部外側面はナデ。	淡茶灰色	やや粗	良好	SD-4
2	弥生土器 壺	底 径 3.0	中央が窪み突出した底部である。 内外面とも調整不明。	暗茶色	良	良好	第7層
3	弥生土器 壺	底 径 4.0	中央がわずかに窪み突出した底部である。 内外面とも調整不明。	暗灰茶色	良	良好	第7層
4	弥生土器 壺	底 径 4.3	形態は3に似る。 内面は板状工具によるナデ。外面は縦方向のヘラミガキ。	淡灰茶色	良	良好	第7層
5	弥生土器 壺	底 径 4.2	突出した平底である。 内面は板状工具によるナデ。外面は縦方向のヘラミガキ。	淡灰茶色	良	良好	第7層
6	弥生土器 壺	底 径 3.8	形態は5に似る。 内外面とも調整不明。	茶褐色	良	良好	NR-1
7	弥生土器 壺	口 径 18.0	外上方へ外反する口縁部である。肩部に直立気中の面をもち、上端は上方へつまみ上げている。 内外面ともヨコナデ。	茶褐色	良	良好	第8層
8	弥生土器 甕	口 径 17.5	体部から「く」の字影に同量して口上方へ伸びた後、上端を上方へつまみ上げて丸く終わる口縁部である。肩部外面に一列の同輪を巡らせて肩直下の丸味のある線を浮きあがらせている。 内外面ともヨコナデ。	茶褐色	良	良好	第8層
9	弥生土器 甕	口 径 15.8	形態は8に似る。 口縁部内外面および体部外面はヨコナデ。体部内面はヘラミガキ。	暗茶色	良	良好	第8層

遺物番号	品 種	法 量 (cm)	形 態・刷 撃 等 の 特 徴	色 調	防 土	焼 成	出 土 位 置
10	弥生土器 甕	口 径 16.0 底 径 4.8	突出した平底の底部から斜上方へ内湾して 体部が伸びる。体部は倒卵形である。体部か ら「く」の字形に屈曲して外反する口縁部で ある。口縁部は直交気味の面をもつ。 口縁部内外面はヨコナテ。体部内面はヘラ ズリ。外面はタタキ。	暗灰褐色	良	良好	第8層
11	弥生土器 甕	底 径 4.6	中央が窪んだ突出した平底の底部である。 内面はハケメ。外面はタタキ。	淡灰褐色	良	良好	第8層
12	弥生土器 甕	底 径 4.4	突出した平底の底部から斜上方へ体部が伸 びる。 内面は板状工具の痕跡が残るが調整は不 明確。	淡灰褐色	良	良好	第8層
13	弥生土器 甕	底 径 4.6	胴部は12に似る。 内面は板状工具によるナデと思われるが不 明確。外面はタタキ。外底面に木炭痕がみら れる。	淡赤褐色	良	良好	第8層
14	弥生土器 高 杯	口 径 27.4	斜上方へ内湾して伸びる杯底部から口縁部 が上外方へ屈曲して外反する。口縁部外面に 横シラも、口縁部は外反する面をもつ。 口縁部はヨコナテの後、内面は横方向のヘ ラミガキ、外面は縦方向のヘラミガキ。杯底 部内面は密なヘラミガキ、外面はヘラミガキ。	赤褐色	良	良好	第8層
15	土師器 甕	口 径 13.8	上外方へ伸び、端部でわずかに外反する口 縁部である。端部は丸い。 内面にハケメが認められるが全体に不明瞭。	淡灰褐色	良	良好	第6層
16	土師器 甕	口 径 15.9	「く」の字形に屈曲する底部から内湾気味に 上外方へ口縁部が伸びる。口縁部は内傾し た面をもつ。 口縁部は内外湾ともヨコナテ。体部外面上 位は斜方向のハケメ調整の後、横方向のハケ メ。体部内面は調整不明。	淡灰褐色	良	良好	第6層
17	土師器 甕	口 径 16.2	形態は16に似るが、口縁部は若干肥厚し、 内傾した面をもつ。 口縁部内外湾および体部外面はヨコナテ。 体部内面上位に横傾調整がみられる。	淡灰褐色	良	良好	第6層
18	土師器 高 杯		下外方へ直線的に伸び、やや丸味をもって 伸びる脚部である。 内外面とも調整不明。	乳灰褐色	良	良好	第6層
19	土師器 高 杯		下外方へ直線的に伸び、わずかに屈曲して 広がる脚部である。 内面はヘラ状工具によるナデ。外面はヘラ ミガキ。	乳灰褐色	精良	良好	第6層

遺物番号	器 種	法 量 (cm)	形 態・装 飾 等 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	出 土 位 置
20	土師器 高 杯	胴 径 10.6φ	下外方へまっすぐ伸びる柱状部と「く」の字形に外方へ屈曲してまっすぐ伸びる腰部からなる脚部である。内側縁状部はヘラケズリ、胴部はナメの後ハケメ調整。外面はナメ。	暗赤茶色	良	良好	第4層
21	土師器 高 杯	胴 径 10.6	下外方へまっすぐ伸びる柱状部からゆるやかに屈曲してまっすぐ伸びて腰部へ至る脚部である。二方に通孔を穿つ。 腰部内面にハケメがみられるが、調整は全体に不明瞭。	淡灰茶色	精良	良好	第6層
22	土師器 鉢	口 径 30.8	上外方へ内湾して伸びる腰部から屈曲して斜上方へ外反する口縁部へ至る。口縁端部は丸く終わる。 口縁部内外面はヨコナメと思われるが全体に調整不明瞭。	淡灰茶色	良	良好	第4層
23	土師器 甌	口 径 22.0	上外方へまっすぐ伸びる筒形の腰部である。口縁部はわずかに内湾し、端部は丸く終わる。口縁部はヨコナメの後、横方向のハケメ。腰部外面は縦方向のハケメ。	明褐色	精良	良好	第3B層
24	土師器 杯	口 径 12.0	浅い半球形の杯底部からやや角度をかえて口縁部へ至る。口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナメ。腰部はナメ。	明褐色	精良	良好	第4層
25	土師器 杯	口 径 11.2	形態は24に似る。 調整も24に似るが、不明瞭。	明褐色	精良	良好	第3B層
26	土師器 皿	口 径 23.3	平らな底部から丸味をもって上方へ立ち上がり口縁部へ至る。口縁部で内傾気味となり、端部は丸く終わる。 口縁部内外面はヨコナメ。外部内外面はナメの後、内面に斜行文のヘラミガキ。	明褐色	精良	良好	第3B層
27	土師器 台付大皿	高台径 22.4 高台高 0.6	平らな底部から斜上方へ伸びた後、上外方へ屈曲し、口縁部で外反する。底文気味な「ハ」の字形の高台を築付し、接地面は平らな面を成す。内外面とも同転ナメ。	乳灰茶色	良	良好	第6層
28	土 釜	径 3.70	平面の形状は四角を呈し、中央に四孔を穿つ。断面の形状は楕円形を呈する。一部で剝離しているが、現存量約30g。	乳灰茶色	良	良好	第5層
29	灰志器 長頸甌	口 径 9.0	口縁部は細長く、外反しながら上方へ伸びて口縁部で水平になり、端部は丸く終わる。口縁部中に一列の凹線を巡らす。 内外面とも同転ナメ。全体に淡緑褐色の自然釉がかかる。	淡灰色	磁部	劣成	第3B層

遺物番号	部 種	法 量 (cm)	形 態・調 整 等 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	出土位置
30	須恵器 長頸瓶	胴部最大径 23.9 底 径 14.6	胴部の最大径は、上方から肩付近で求められ、肩が張る形態である。胴部に一糸の凹線を巡らす。底部には「ハ」の字形の比較的高い高台を貼付し、内端部で接地する。 内外面とも回転ナデ。内面に灰白色（石灰質か？）の物質が付着。	淡灰青色	緻密	良好	第3B層
31	須恵器 杯 蓋	口 径 12.5	丸縁のある天井部に「ハ」の字形で外反気味に造り出す口縁部である。縁は全く鋭さを欠き、厚だけのものである。口縁端部に内傾する明瞭な段を有する。天井部外面は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。口縁部外面に斜方向のヘラ刷文を施す。	淡灰青色	密	堅緻	NR-1
32	須恵器 杯 蓋	口 径 13.3	天井部からまっすぐ造り出す口縁部である。口縁端部は丸く終わる。縁はきわめて形骸化し、天井端部に凹線を巡らせて縁を斜形的に浮かび上げられている。 口縁部内外面とも回転ナデ。	灰青色	緻密	堅緻	NR-1
33	須恵器 杯 蓋	口 径 16.0 底 径 4.3	平らな天井部から口縁部は直下へ下る。口縁端部は内傾し、明瞭な段を有する。縁はきわめて形骸化し、天井端部に凹線を巡らせて縁を斜形的に浮かび上げられている。天井部外面は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。天井部内面中央近くに同心円文がみられる。	灰色	緻密	堅緻	第3B層
34	須恵器 杯 身	口 径 11.5 受部径 14.2	たちあがりは比較的短く内傾し、ゆるやかな「S」字形を呈する。口縁端部は丸く終わる。受部は比較的長く、端部は丸い。外面底部は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。	淡灰青色	緻密	堅緻	第6層
35	須恵器 杯 身	口 径 12.2 受部径 15.0 形 高 4.3	たちあがりはまっすぐで比較的短く内傾する。端部は丸く終わる。受部は比較的長く端部は丸い。底部外面は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデ。 内底面中央近くに同心円文がみられる。	灰色	密	堅緻	NR-1
36	須恵器 杯 身	口 径 14.0 受部径 16.5	形態、調整は35に似る。	灰色	密	堅緻	第4層
37	須恵器 杯 身	高台径 11.8 高台高 0.7	平らな底部に「ハ」の字形に開く高台を貼付する。高台は端部で厚くなり、わずかに窪んだ面をもち内端部で接地する。 底部外面は回転ヘラケズリの後、回転ナデを施し、一部で磨止ナデが認められる。他の部分は回転ナデ。	淡灰色	緻密	良好	第3B層
38	須恵器 杯 身	高台径 11.0 高台高 0.7	ほぼ平らな底部から丸味をもって上の方へ立ち上る体部である。底部には直立気味な「ハ」の字形の高台を貼付する。高台の接地面はほぼ平面を成す。 内外面とも回転ナデ。	灰青色	緻密	良好	第3B層
39	須恵器 杯 身	口 径 18.6 形 高 7.8 高台高 1.2 高台径 13.4	胴部から口縁部は逆「ハ」の字形に開く。平らな底部に直立気味な「ハ」の字形の高台を貼付し、高台の接地面はほぼ平らな面を成す。外底面中央で回転ヘラケズリがみられ、他の部分は回転ナデ。	淡灰色	緻密	良好	第3B層

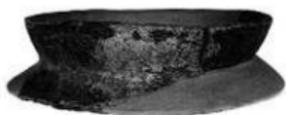
遺物番号	器 種	法 量 (cm)	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼成	出土位置
40	須恵形 高 杯	標 量 9.9	杯状部は下方へ直線的に伸び、肩部でゆるやかに外反する。端部は丸く終わる。 基部内面で回転ヘラズリがみられ、他は回転ナシ。	淡灰色	緻密	良好	第3B層
41	須恵形 器 台	標 量 23.2	内面はほとんど欠損しており、形跡は不明であるが、外面基部近くに波状文を施す。肩部は、下方へ向うに促い広がる円筒形を呈し、肩部で大きく外反し、端部は外傾したやや強んだ蓋をもつ。外面の台部と肩部の境には、一帯の鋭い凸線が押し、肩部外面には2条、対の鋭い凸線が押し、文様帯が5つみられる。最上の文様帯には波状文を施す。以下4つには複合波状文が施され、四方に長方形の透孔が穿たれている。 内面は回転ナシ。一部に緑灰色の自然釉がかかっている。	淡灰色	緻密	良好	NR-1
42	丸 瓦		凸面はヘラズリが施され、凹面は斜方向のヘラズリを施して、緩かい帯状区を消している。	淡灰色	やや粗	良好	第3B層



調査区全景(東から)



器台出土状況(西から)



17



39



24



40



35



29



30



41

土師器壺(17)・杯(24)、須恵器杯身(35・39)・高杯(40)・器台(41)

24 ^{なかつた} 中田遺跡 (第1次調査)

調査地 八尾市中田2丁目29・39

調査期間 昭和63年2月22日～昭和63年3月11日

調査面積 100㎡

はじめに

今回の発掘調査はマンション建設に伴って実施したもので、当調査研究会が中田遺跡内で実施した最初の調査である。

当遺跡は長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置しており、現在の行政区画では八尾市中田・八尾木一帯にあたる。当遺跡の位置する沖積地上には数多くの遺跡があり、当遺跡の周辺では、南に東弓削遺跡・西に矢作遺跡・北に小阪合遺跡が近接している。

当遺跡内では、昭和45年に区画整理事業が施行され、それに伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・中田遺跡調査会によって実施されており、多大な成果が得られている。今回の調査地はこれらの調査地から東へ約500mの地点にあたる。



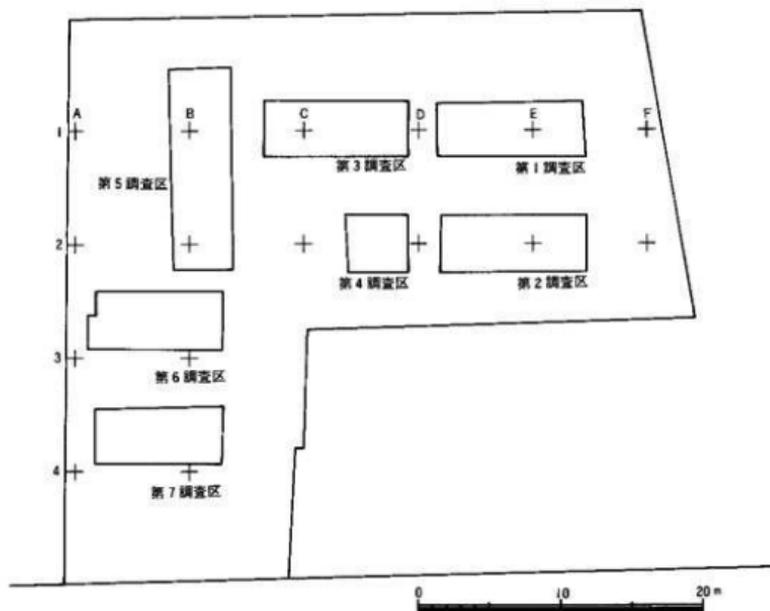
調査地周辺図

調査概要

当初、八尾市教育委員会の指示通り、22箇所の基礎杭（約100㎡）についての調査を行う予定であったが、敷地境界に接する基礎杭位置ではオープンカット工法による掘削ができなため、指示位置通りの調査を行っていない部分がある。結果的には、約100㎡の調査面積の範囲内で15箇所の基礎杭位置についての調査を実施した。

掘削については、八尾市教育委員会の試掘結果を踏まえ、現地表下1.5～1.8mまでに堆積する土層を機械で掘削し、以下0.4～0.6mを手掘りとして緑灰色粘土～シルト上面を調査対象とした。なお、調査地は湧水量が多く土質も軟弱であることが試掘調査の段階でわかっており、安全を考慮して壁面の勾配は多めにとったが、各調査区で壁面が崩れたため、十分な調査はできなかった。

調査の結果、調査対象地の東部にあたる第1調査区～第4調査区では、弥生時代後期の遺物包含層である黒灰色粘土から少量の土器類（24・30～32・37）が出土しただけである。一方、調査対象地の西部にあたる第5調査区では溝2条、第7調査区では井戸1基・落ち込み1個が検出され、遺構内部および遺物包含層から多量の土器類が出土している。第6調査区では遺構



調査地設定図

は検出されなかったものの、多量の土器類が出土している。これらの出土量はコンテナに5箱程度で、遺存状態は概ね良好、しかも比較的まとまった形で出土したものが多く。

弥生時代後期以外では、須恵器を含む古墳時代の土器類が若干量出土しており、流出包含層であるシルト～粗砂および流路跡から、中近世の土器類がコンテナに1箱程度出土している。その他、水田耕作土の可能性のある土層を2枚確認している。

基本層序

第0層：盛土。0.4～0.7m。現地表面の標高は10.4～10.7mで、北東が高く南西が低い。

第1層：黒灰色砂質土。0.15～0.4m。近年までの耕作土である。

第2層：緑灰色砂質土。0.2～0.4m。耕作土の床土、下部に粘質土が堆積する部分もある。

第3層：茶褐色砂質土。0.2m前後。近世の陶磁器片を若干含む。調査地中央部には、この上面から切り込む粗砂の堆積(流路跡)があり、内部から中近世の遺物が出上している。

第4層：茶褐色粘質土～シルト。0.2m前後。東部は礫混じりの硬くしまった土層、西部は湧水量の多い軟弱な土層である。

第5層：灰色シルト～微砂。0.3～0.5m。第4層同様湧水量の多い土層で、中世(13世紀以降)の瓦器柄等を含んでいる。

第6層：灰色粘土。0.3m。水田耕作土の可能性のある土層で、西ほど粘性が高い。東端ではこの上面から流路の可能性のある微砂が切り込んでおり、中世の遺物を含んでいる。

第7層：暗灰色粘土。0.2m。東部では細砂を含む

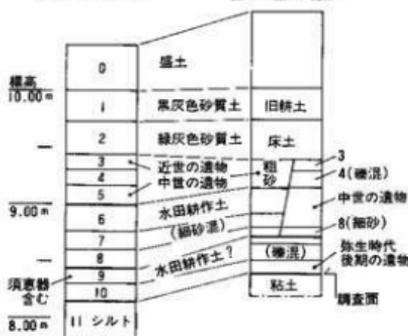
第8層：青灰色シルト～細砂。0.2～0.25m。東端は細砂。湧水量はきわめて多く、調査中この層の崩れが大きい。

第9層：赤褐色～灰色粘土。0.15～0.25m。水田耕作土の可能性のある土層で粘性は低い。東部では下部に礫の混入が認められ、西部では須恵器を含む古墳時代の遺物が若干認められる。

第10層：黒灰色粘土。0.1～0.25m。弥生時代後期の遺物包含層である。

第5～第7調査区

第1～第4調査区



- | | |
|--------------|--------------|
| 3 茶褐色砂質土 | 7 暗灰色粘土 |
| 4 茶褐色粘質土～シルト | 8 青灰色シルト～細砂 |
| 5 灰色シルト～微砂 | 9 赤褐色～灰色粘土 |
| 6 灰色粘土 | 10 黒灰色粘土 |
| | 11 緑灰色粘土～シルト |

柱状図

西部では厚く堆積し、炭化物を
含む。

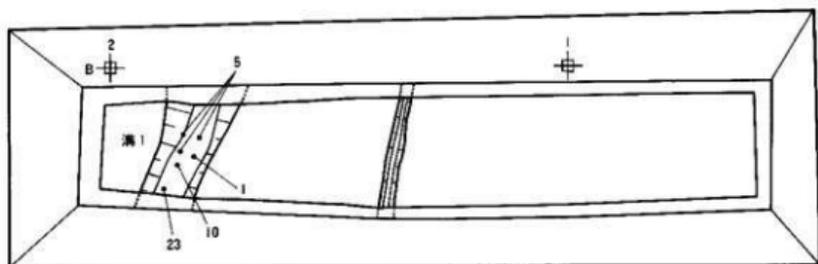
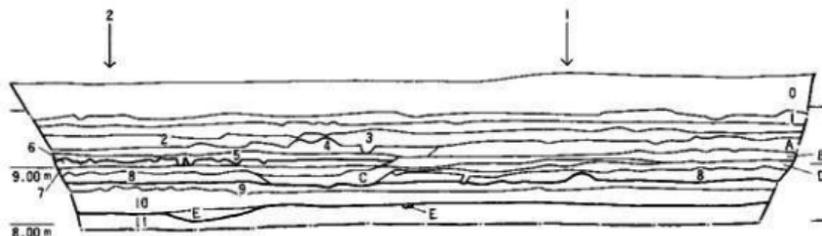
第11層：緑灰色粘土～シルト。0.4m以
上。弥生時代後期の遺構面であ
る。東部ほど粘性が高い。上面
の標高は8.15～8.4mで、北東が
高く南西が低い。

検出遺構と出土遺物

ここでは、第5調査区～第7調査区につ
いての概要を記す。なお、出土した土器類
の内訳は右表の通りである。

・第5調査区

調査地の北西隅に位置する調査区である。ここでは、調査区の中央から南部で2条の溝（溝1・溝2）を検出した。遺構内および第10層からの遺物の出土量はコンテナに1箱である。



- | | | |
|---------------|-------------|-------------|
| 0 盛土 | 6 灰色シルト質粘土 | A 茶灰色シルト質粘土 |
| 1 黒灰色砂質土(旧耕土) | 7 暗灰色粘土 | B 黄茶色粗砂 |
| 2 緑灰色砂質土(床土) | 8 黄灰色シルト | C 灰色シルト |
| 3 茶褐色砂質土 | 9 赤褐色シルト質粘土 | D 灰色粗砂 |
| 4 茶褐色粘質土～シルト | 10 黒灰色粘土 | E 黒褐色シルト質粘土 |
| 5 灰色微砂 | 11 緑灰色シルト | |

第5調査区平面図

出土遺物内訳表

調査区	遺構	口縁部		底(蓋)部		体部		土	石器類					
		壺	高杯	壺	高杯	壺	高杯							
1	第10層					1								
2	*	1	3	1			1	1	2	5	2			
3	*		5	1	1		4	1	42	6	2	1		
4	*						2							
	溝1								3	3				
5	溝2	9	17	1	2	1	2	7	2	1	123	68	4	
	第10層	3	14	1	1		1	1	4	3	15	74	2	
6	*	3	18	4	3		2	6		5	97	118	8	
	溝1	2	28	1	1			11	1	2	92	132	4	2
7	溝1						1							
	第10層	3	30	3	3	1	4	16	4	3	158	135	10	3

溝1

調査区中央部で検出した。ほぼ東-西に伸び、断面の形状は逆台形である。幅0.2m・深さ0.05m程度を測る。内部堆積土は黒褐色粘土、内部から弥生土器の小片が数点出土している。

溝2

調査区南部で検出した。南東-北西に伸び、断面の形状は浅い半円形である。幅1.0~1.3m・深さ0.3m前後を測る。溝底の標高は北西が高く南東が低い。内部堆積土は黒褐色粘土で、内部から弥生土器(1~23)が出土している。そのうち甕(1・5)、鉢(10)、高杯(23)は溝底に接した状態で検出された。

壺(18~20)：広口壺(18)・複合口縁壺(19)・底部がある。広口壺(18)は口縁端面に衝抜き波状文を施す。複合口縁壺(19)は下段の口縁端と頸部の貼り付け突帯の上下端にヘラによる刻み目を施すもので、頸部内外に赤色顔料が付着する。(20)は大型の壺の底部である。

甕(1~9・13~16)：小型のもの(1・4)、中型のもの(5~9)、底部(13~16)がある。体部の形態は(3)が球形近くに張ると思われるが、他でみると体部の張りは少ない。口縁部は体部から丸く屈曲するものが多い。口縁端部の形態には、擬口縁で終るもの(1)、尖りぎみに終るもの(2・3)、立ち上がるもの(4~9)がある。口縁端部外面には、強いヨコナデによるものか、(4)では鋭い稜線、(6・8)では凹線状の凹みが一周する。(1・5・6)でみると体部は3段階の分割成形が行われているが、最下段の接合部が特に明瞭に認められる。底部には、体部からあまり突出しないもの(1・13)と突出するもの(14~16)がある。

鉢(10~12)：直口の有孔鉢(10)のほか、底部(11・12)がある。(10)は甕の体部下半と共通する形を呈するもので、口縁端部は未調整の擬口縁で終り、底面に焼成前の孔を持つ。(11)は焼成後に底面内外から孔を穿とうとしているが、未貫通のままである。(12)は尖りぎみの底部で焼成前の孔を持つ。

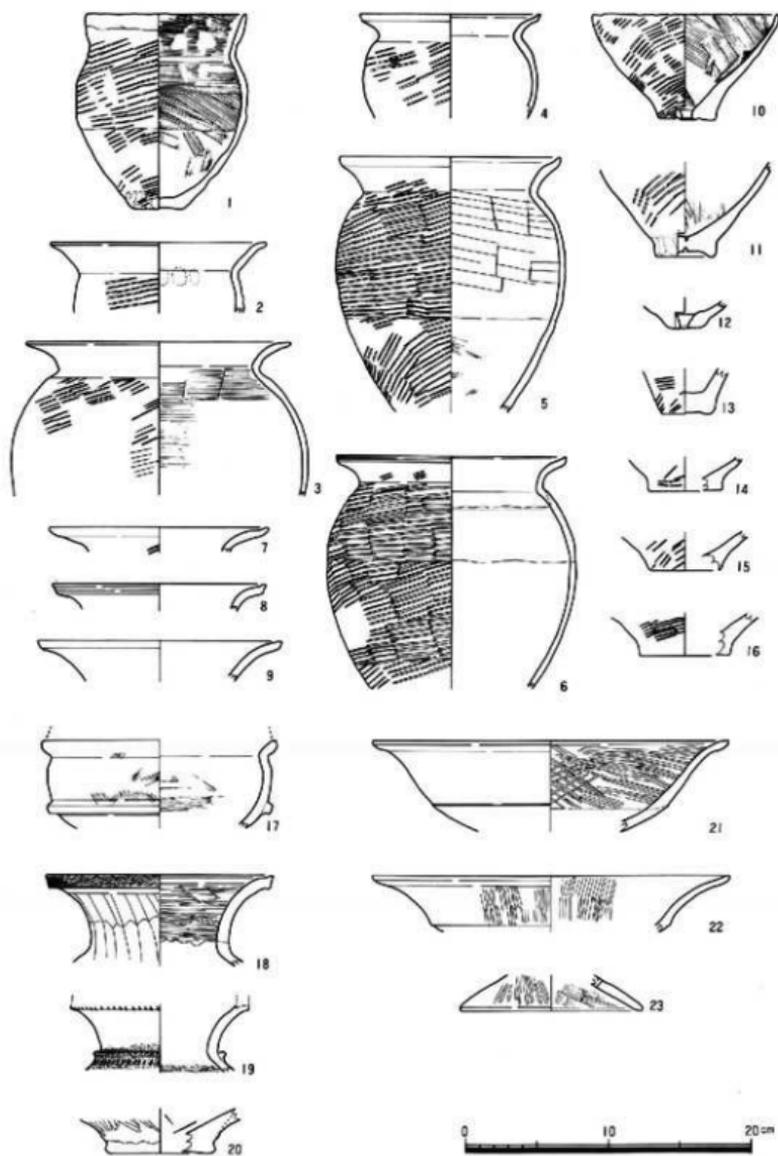
高杯(21~23)：大型で段を有する杯部(21~23)と小型の裾部(23)がある。(21)は深くて丸みのある杯底部で、段は鈍い。(22)の段は鋭い稜線となる。(23)は1孔のみ残存する。

手焙り形土器(17)：丸みのある体部に貼り付け突帯を廻らせるもので、受け口状の口縁部を持つ。覆部の破片が数点出土しているが接合できない。

第10層出土遺物

壺(27・28・30)：広口壺(27)・複合口縁壺(28)・底部(30)がある。広口壺(27)は拡張した口縁端面に2条の凹線文を廻らせ、竹管押圧円形浮文を貼る。複合口縁壺(28)は下段の口縁端にヘラによる刻み目を施す。底部(30)は体部から突出する平底で、腹部は大きく張る。

甕(25・28・33~35)：口縁部(25・26)・底部(33~35)がある。口縁部は端部に凹線状の凹みが一周するもの(25)と尖りぎみに丸く終るもの(26)を図示したが、溝2でみたように



第5調査区 溝2出土遺物

立ち上がるものも数点認められる。底部はいずれも体部から突出するもので、小型で平底のもの(33・34)と大型で上げ底状のもの(35)がある。

鉢(29・36)：大型鉢の口縁部(29)と小型鉢の底部(36)がある。(29)は口縁部が内湾して立ち上がるもので、口縁部外面に凹線状の凹みが一周する。(36)の底部は高台のように「ハ」の字形につまみ出される。

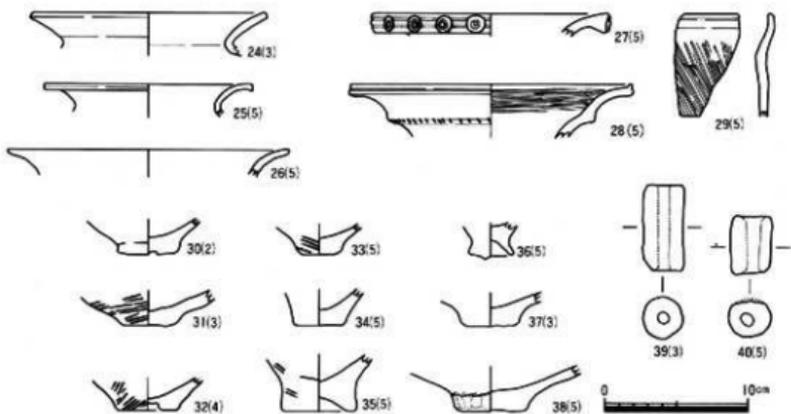
土錘(40)：管状土錘で一部を欠損する。紐ずれ痕があり、中央部はわずかに凹んでいる。

・第6調査区

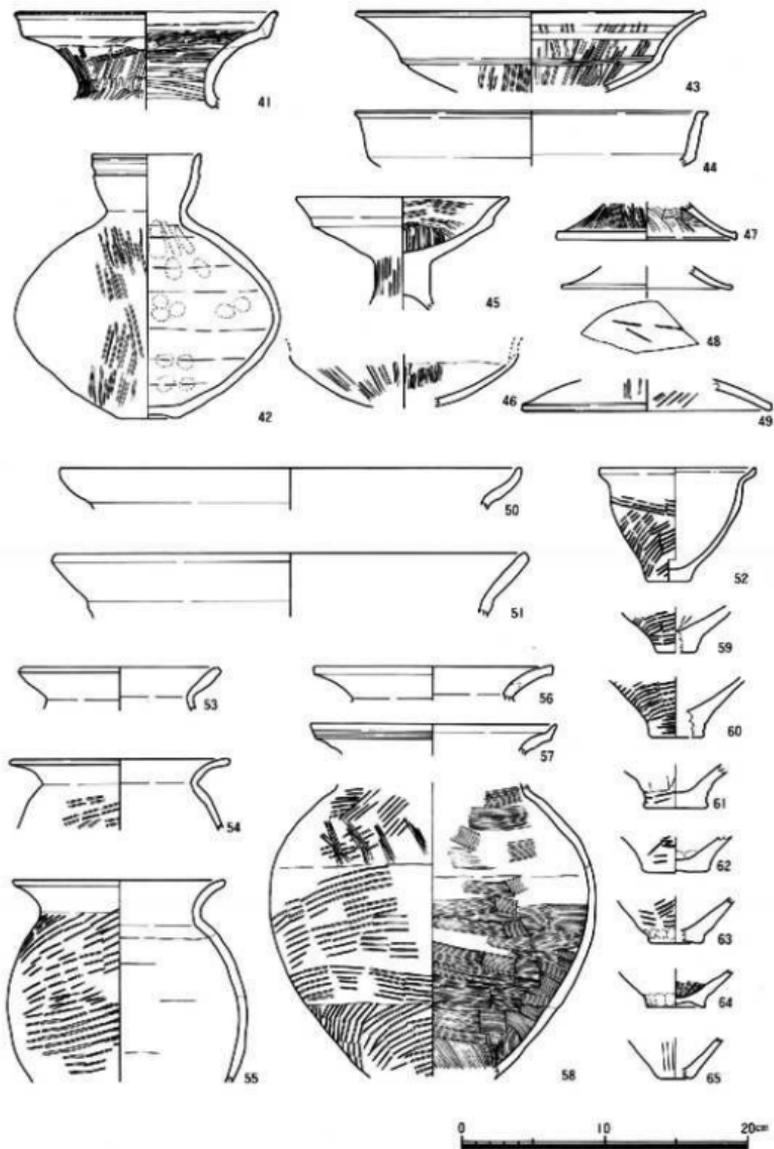
調査地の西部中央、第5調査区の南に設定した調査区である。ここでは明確な掘り込みは確認していないが、調査面である第11層が調査区南部中央から北東・北西へ徐々に落ち込んでおり、第10層が厚く堆積していた。遺物はこの第10層から出土したが、特に西側で多量の土器が集積していた。出土量はコンテナ1箱程度である。

壺(41・42)：複合口縁壺(41)と短頸壺(42)がある。複合口縁壺(41)は口縁部上端にヘラによる刻み目文を施す。短頸壺(42)は口縁部外面に凹線文が廻るもので、体部は中位で著しく張り、底部は体部から突出しない上げ底状で、新しい様相を持つものと思われる。

甕(53~63)・口縁部(53~57)・体部(58)・底部(59~63)がある。体部から丸く屈曲して口縁部に至るものがほとんどである。端部は丸みのある面を持つもの(53~56)が最も多く認められるが、(57)のように、上方へ立ち上がり、側面に凹線状の凹みを持つものもある。体部(58)は上方で強く張る器形で、タタキ調整の後肩部に一定の間隔で縦位のハケを施すもので、



第2調査区～第5調査区 第10層出土遺物 ()内は調査区番号

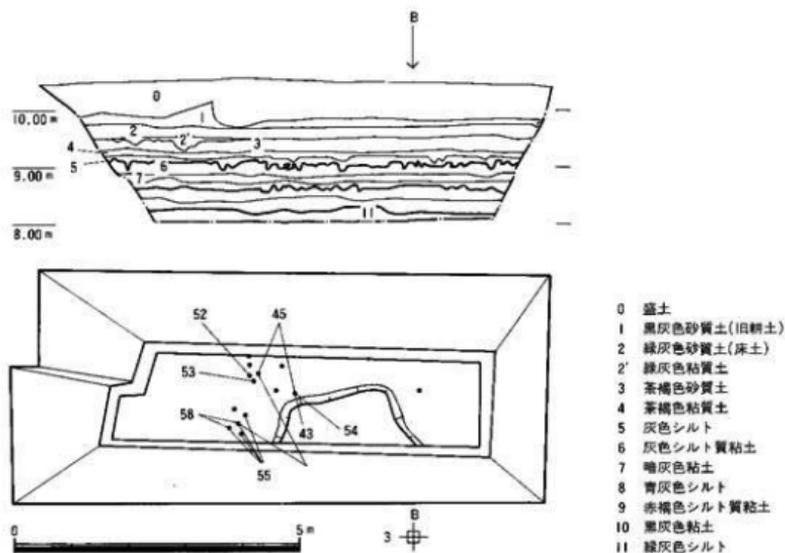


第6調査区第10層出土遺物

やや新しい傾向を示すものといえる。底部はすべて体部から突出するもので、(61・62)は平底、(63)はわずかに上げ底きみとなる。

鉢 (50~52・64・65) : 大型鉢 (50・51)・小型鉢 (52)・底部 (64・65) がある。大型鉢のうち (50) は内湾する口縁部を、(51) は直線的に伸びる口縁部を持つ。小型鉢 (52) は受け口状に立ち上がる口縁部を有するもので、体部からわずかに突出する底部を持つ。(64) は高台のようにつまみ出される上げ底状、(65) は短頸壺 (42) の底部のように体部から突出しない小さな上げ底状である。

高杯 (43~49) : 杯部 (43~46)・裾部 (47~49) がある。杯部はすべて段を有するもので、(43・44) は大型で、(45・46) はやや小さい。(43) の口縁部は外反して長く伸び、(44) の口縁部は直線的に外傾する。(45) は外反ぎみの短い口縁部で、太く短い中実の脚を持つ。(46) は口縁部の接合部からはがれたものである。裾部は (47・48) が外反して開くもので (49) は内湾して開く。(47) は1孔残存、(48) は内面にヘラ描きの記号文を有する。



第6調査区平面断面図 数字は遺物番号

・ 第7調査区

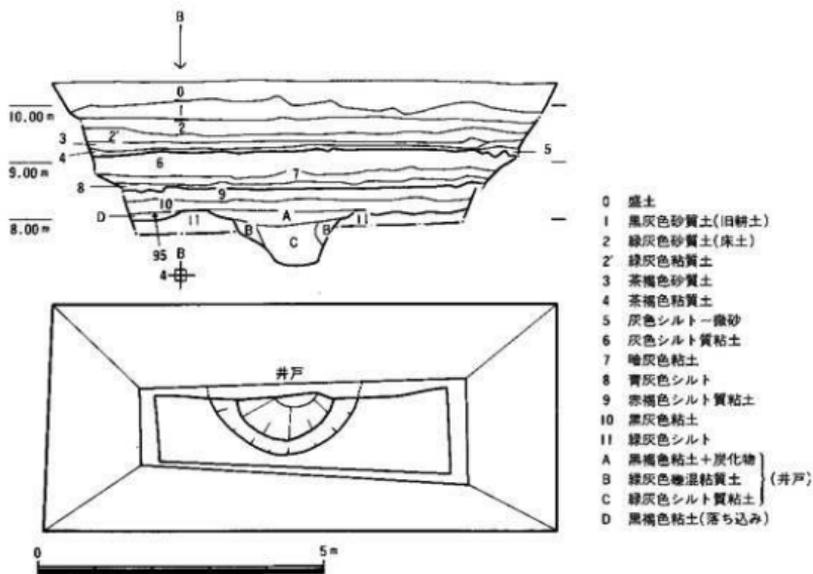
調査地南西端、第6調査区の南に設定した調査区である。ここでは井戸1基・落ち込み1個を検出した。遺構内部および第10層からは、コンテナに3箱程度の土器類が出土している。

井戸

調査区南部中央で井戸の北半分を検出した。2段の掘り形を有するもので、上面径2.5m・深さ1.0m程度の規模を有する。内部堆積土は、上方からA層植物遺体を含む黒褐色粘土・B層緑灰色礫混粘質土・C層緑灰色シルトと灰黒色シルトの互層からなる。ここでは、掘削途中南壁が崩れ、井戸が完全に埋まってしまったため、遺物の堆積状況は不明瞭ではあるが、遺物は主に上層のB層中に密集していたようで、井戸底からの出土はなかった。

壺(88・89)：ともに広口壺である。(88)は「く」の字形の口縁部を持つ広口の短頸壺である。(89)は口縁下端を拡張させて広い面を作るもので、側面には横掃きの波状文が施される。

甕(66~84)：やや大型の甕(67~70)・中型の甕(66・68・69・81)の他、口縁部(71~80)・底部(82~84)がある。全体の形状にはバラつきがあり、まとまりを欠くが、概ね体部の張りが弱い器形で、口縁部は(70)のみ「く」の字形に鋭く屈曲するが、他はすべて体部から丸く屈曲して口縁部に移行する。口縁端部の形態には、尖りぎみに終るもの(66・71・74・78~80)・



第7調査区平断面図 番号は遺物番号

面を持つもの(67・68・70・73)・立ちあがるもの(69・72・77)・段をなすもの(75・76)がある。底部はすべて体部から突出する上げ底から平底である。左上がりのタタキ目を持つ甕(66)は器形が著しく重んでおり、体部から突出するドーナツ状の底部を持つ。体部のみ遺存する甕(81)は扁平な器形で、外底面にもタタキ目調整が施されている。第5調査区溝2の竈でみたように、ここでも分割成形時の接合痕が認められ、特に(66~68・81)の体部下半で顕著である。

鉢(85~87)：小型鉢(85・86)・大型鉢(87)がある。(85)は体部からわずかに突出する底部で、焼成前の孔を有する。(86)は体部から連続する小さな平底で外面に弱いヘラケズリが行われている。大型鉢(87)は注口を持つもので、内外に弱いヘラケズリが認められる。

高杯(90~92)：有段の杯部(90)ほか柱状部(91)・裾部(92)がある。(90)は杯底部から鈍い稜を持って外傾する口縁部が伸びる。(91)は3孔を有する。(92)は外反して開く。

敲石(93)：河原石を未加工のまま利用したものと思われる。敲打痕はないが両端に擦痕状の使用痕が認められる。

砥石(94)：扁平な砂岩を割り、利用したものである。使用面は1面で、その2箇所に赤色顔料が付着している。

落ち込み

調査区南壁東端で第11層上面が落ち込んでいる部分が認められた。平面では捉えていないため、土坑状になるものか溝状になるものか不明である。壁面の観察では東西0.9m・深さ0.15mの規模を測り、内部には黒褐色粘土が堆積し、壺(95)が出土している。

壺(95)：球形に近い体部中位以下が遺存する。底部は丸底を押しつぶしたような形状で、外面全体を横位のハケで調整しており、形態・調整ともに特異なものである。

第10層出土遺物

壺(96~98・100~103)：長頸壺(96)・広口壺(97・98)・底部(100~103)がある。長頸壺(96)は外面にヘラ描きの記号文が施される。広口壺はともに口縁端部を下へ拡張して広い面を作るもので、(97)は下端にヘラによる刻み目文、(98)は側面に櫛(半截竹管の可能性もある)描きの波状文を施す。底部はすべて体部から突出するもので、平底のもの(100~102)・上げ底のもの(103)がある。

甕(111~118・122~128)：ハケ調整のみのもの(111~113)・タタキ目調整のもの(114~116・118)・タタキ目調整後にハケを用いるもの(117)・底部(122~128)がある。(111)は口縁部および底部の形態・内面に施されている弱いヘラケズリ等から一時期古いものに比定できる。また、胎土に含まれる砂粒やその色調などから、他の地域からもたらされた可能性も考えられる。(112・113)はタタキ目調整の甕に比して体部の張りが強いようである。内面の調整はナテ

仕上げされており、丁寧なつくりである。タタキ目調整のみ壘(114~116・118)の形態は変化に富んでおり、全形のわかるものは(115)のみである。(114)は屈曲部の器肉が厚く、先細となって端部に至る。(115)は3段階の分割成形が行われており、最下段ではタタキ目の方向を逆転させ、綾杉文ようになる。底部は体部から突出する上げ底である。(116)は球形近くに張る体部を持っており、粘土の接合痕は螺旋状にまわっている。(118)は口縁端部が強いヨコナデによって段状になるものである。タタキ目調整後にハケ目を施す壘(117)は体部から一旦立ち上がった後に開く口縁部を持つもので、全体をタタキ目調整した後腹部以下に縦位のハケが施されている。底部は体部から突出する平底(123~125・128)が多くみられるが、突出しない平底(126~127)・ドーナツ状の底部(122)がある。

鉢(119~121・129)：小型鉢(119~121)・底部(129)がある。(119~121)はすべて擬口縁で終る直口の鉢である。(119)はきわめて小型のもので、底部は著しく突出する。(120)は体部から突出しない上げ底を持つ。(121・128)はともに底面に焼成前の孔を有する。

高杯(105~107)：柱状部から裾部(105)・裾部(106・107)がある。(105)は中実の柱状部を有し、水平近くに開く裾部には4孔を持つ。(106)は外反して開き、1孔を有する。(107)は内湾ぎみに開く薄手の裾部である。

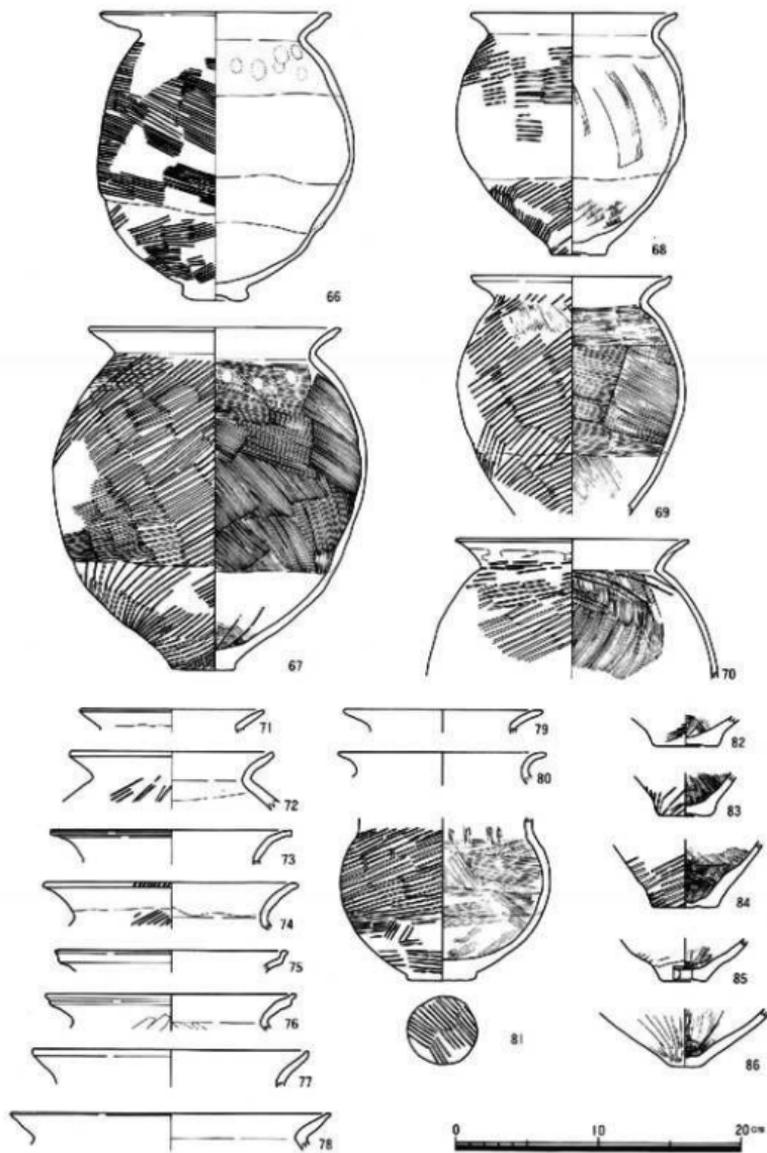
手培り形土器(99)：覆部は出土していないが、口縁部内面に上方へ立ち上がる覆部の接合痕が認められたため、手培り形土器とした。受け口状に立ち上がる口縁部を持つもので、体部外面にヘラ描きの斜格子文が施されている。

土錘(108~109)：ともに管状土錘で紐ずれ痕が認められる。(108)は外面に強い向取りが行われたためか断面の形状は六角形に近く、孔は楕円形を呈している。(109)は全体が歪んでおり、孔の位置も中心からずれている。

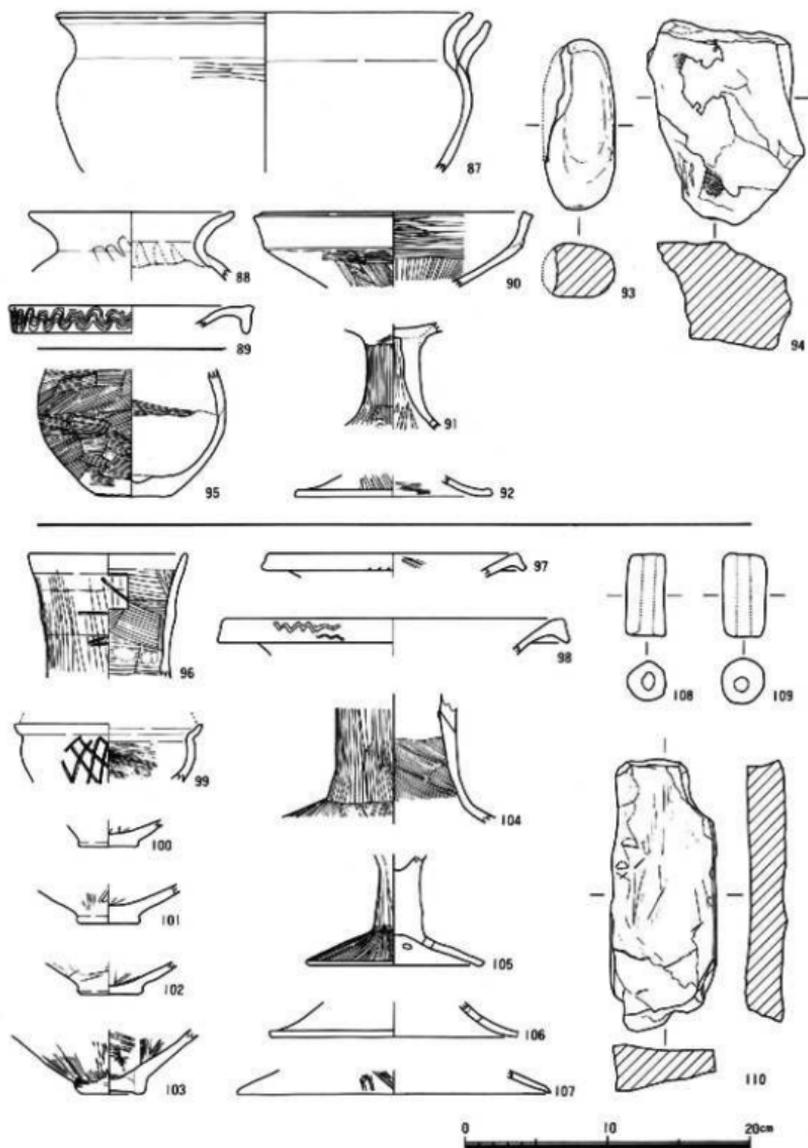
砥石(110)：扁平にはぎとった石材の短辺・裏面を未調整のまま使用する。長辺はある程度の調整によって平滑にされており、使用痕も認められるが、主な使用面は上面の1面のみで、中央部は凹んでいる。

まとめ

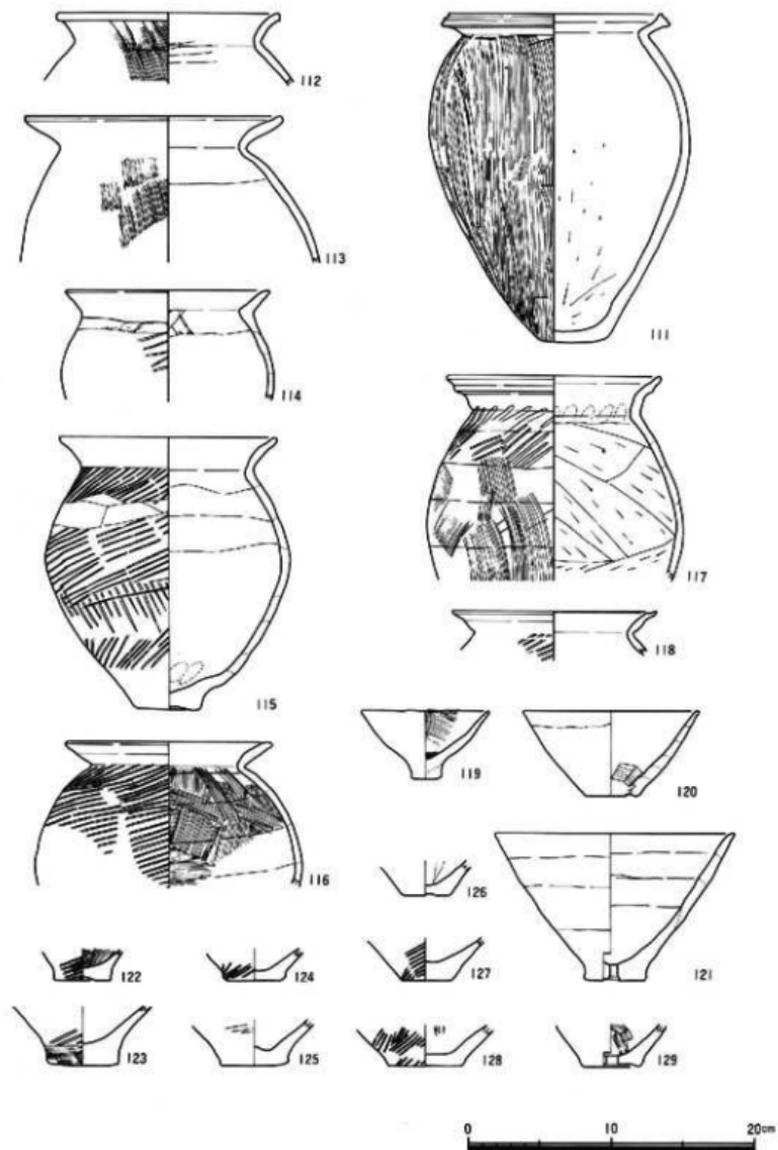
今回の調査地は、これまで行われている中田遺跡の調査地から東へ500m程度離れている。また、地形的には、玉串川の旧堤防が落ち込み、低平地と接する地点にあたっている。このことから、今回の調査地付近は、中田遺跡範囲の東辺にあたるものと考えられる。今回の調査は小規模なトレンチ調査のくり返しであり、「遺物拾い」の感は免れ得ないが、調査対象とした弥生時代後期の他、古墳時代と鎌倉時代の遺物に加え、2時期の水田土層も確認している。以上の調査結果から、従来から言われているように、当遺跡が広範囲に広がる複合遺跡であることが裏付けられた。



第7調査区井戸出土遺物



第7調査区井戸(87~94)、落ち込み(95)、第10層(96~110)出土遺物



第7調査区第10層出土遺物

出土遺物観察表

第5調査区 溝2

遺物番号	形 状	寸法 (cm)	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼成	備 考
1	小型鏡	口 径 11.1 最大径 12 底 径 3.4 高 13.65	外反する口縁部、気衝形の体部、突出しない平底。 3段階の分期成形、口縁タタキ出し、端部未調整、外面タタキ(2条)、内面ハケ(5~8条)。	暗赤褐色	粗	良好	ほぼ完成
2	鏡	口 径 15 最大径 19	外反する口縁部、端部は尖りぎみに終る、体部の張りは弱い。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ(3条)、内面折頭広度あり。	灰緑色	やや粗	良、 乾貫	
3	鏡	口 径 18.5 最大径 20.8	強く外反する口縁部、端部は尖りぎみに終る、体部は球形近く強く張る。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ(3条)、内面ハケ(9条)。	暗赤褐色 内面灰黒色	粗	良好	
4	鏡	口 径 12.6 最大径 12.2	強く外反する口縁部、端部は強いヨコナデによって強くつまみ上げられ、面を持つ。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ(2条)、内面ナデ。	明褐色	やや粗	良好	塚付着
5	鏡	口 径 15.3 最大径 16.2	外反する口縁部、端部は丸みを持ってつまみ上げられる、体部は倒卵形。 3段階の分期成形、口縁タタキ出し・ヨコナデ、体部外面タタキ(3条)、内面ナデ。	暗赤褐色	粗	良好	底部分積 塚付着
6	鏡	口 径 16 最大径 17.4	強く外反する口縁部、端部はつまみ上げられ面に凹溝を持つ、体部は倒卵形。 3段階の分期成形、口縁タタキ出し・ヨコナデ、体部外面タタキ(3条)、内面ナデ。	暗赤褐色	密	良好	体部1/2積 塚付着。
7	鏡	口 径 15.2	ゆるく外反する口縁部、端部は丸みを持ってつまみ上げられる。 口縁タタキ出し・ヨコナデ。	赤褐色～ 黒灰色	やや粗	良好	黒垢?
8	鏡	口 径 14.8	強く外反する口縁部、端部には2条の凹溝を持つ。 ヨコナデ。	淡茶色～ 灰緑色	やや粗	良好	
9	鏡	口 径 17	外反する強い口縁部、端部はわずかにつまみ上げられ、面を持つ。 ヨコナデ。	淡茶色～ 明褐色	やや粗 チャート・ 石英	良好	
10	鉢	口 径 13 底 径 3.95 唇 高 7.3 孔 径0.7~1	わずかに立ち上がる口縁部、端部未調整、体部は泡門餅形、底部はわずかに突出する平直に焼成前穿孔。 外面タタキ(4条)、内面ハケ(7~8条)。	明褐色	やや粗	良好	完形 黒垢あり 塚付着
11	鉢	底 径 4 孔径0.3~0.4	体部は浅凹桶形、底部は明確に突出する上げ底、焼成後に未貫通の孔。 外面タタキ(2条)、内面ハケ(5~7条)。	乳灰色 内面淡茶色	密 赤色酸化粒	良好	黒垢あり
12	鉢	底 径 2 孔径0.5~1.25	わずかに突出する尖り状の底部、焼成前穿孔。 ナデ。	淡赤褐色 中粒黒灰色	粗	良好	
13	鉢	底 径 2.4	突出しない平底。 外面タタキ(4条)、内面ナデ。	暗赤褐色 内面灰褐色	やや粗	良好	
14	鉢	底 径 5	明確に突出する平底。 外面タタキの痕跡・内面ナデ。	暗赤褐色 中粒黒灰色	やや粗	良好	

遺物番号	器 種	法量 (cm)	形 態 ・ 調 整 等 の 特 徴	色 調	粘 土	焼 成	備 考
15	甕	底 径 4.8	底部から突出する底部。 外面タタキ(2条)・内面ナデ。	灰青色 内面灰黒色	やや粗	良好	
16	甕	底 径 6.2	底部から突出する底部。 外面タタキ(4条)・内面ナデ。	暗赤褐色	粗	良好	横付着
17	手造形ナデ		丸みのある「く」の字形の口縁部。端部欠損 体部は半球形で下に凸部を貼る。 口縁部・凸部上下ヨコナデ。体部ハケ(10 条)張ナデ。	黄褐色～ 淡茶色	やや粗	良好	蓋部あり 黒腐あり
18	広口壺	口 径 15.8	外傾した後外反する口縁部。端部はつまみ 上げられ側面に流状文を貼す。 口縁部ヨコナデ。外面板状工具によるナデ。 内面横へラミガキ。口頸部の接合痕あり。	黄褐色～ 赤褐色 中核灰黒色	やや粗	良好	黒腐あり
19	短口口縁部	—	「く」の字形に外反する口縁部。上段の口縁 部は接合部から欠損。頸部部に凸部を貼る。 下段の口縁部・凸部上下段にへらによる刻目。 ナデ 凸部上段ヨコナデ。	赤褐色～ 暗赤褐色 中核灰黒色	密 赤色酸化紋	良好	
20	甕	底 径 7.7	底部から突出する底部。 外面へラミガキ・内面ナデ。	赤褐色～ 黄茶色	粗 花瓣状粒	良	
21	高 杯	口 径 25	狭い縁を持って外反する長い口縁部。端部 丸みのある面を持つ。 口縁部ヨコナデ。外面放射状へラミガキの 痕跡。内面乱向へラミガキ。	赤褐色～ 暗赤褐色	やや粗	良好	
22	高 杯	口 径 25	狭い縁を持って外反する口縁部。端部つま み上げまみに丸く終る。 口縁部ヨコナデ。放射状へラミガキ。	淡赤褐色 中核灰黒色	やや粗	良好	
23	高 杯	底 径 12.6	内側まみに伸びる唇部。端部は唇内を減じ て丸みのある面を持つ。1孔残存。 外面放射状へラミガキ。内面ハケ(7条)。端 部ヨコナデ。	暗赤褐色	やや粗	良好	

第2調査区～第5調査区 第10層

遺物番号 調査区	器 種	法量 (cm)	形 態 ・ 調 整 等 の 特 徴	色 調	粘 土	焼 成	備 考
(3)	甕	口 径 16.3	丸みのある「く」の字形の口縁部。端部は外 傾する面。 ヨコナデ。	黄褐色 中核灰褐色	やや粗	良好	赤色酸化紋
(5)	甕	口 径 14.5	丸く屈曲した縁水平近くに伸びる口縁部。 端部側面に凹線を持つ。 ヨコナデ。	黒褐色	粗	良好	
(5)	甕	口 径 19.6	外反まみに伸びる口縁部。端部は唇内を減 じて丸く終る。 ヨコナデ。	淡赤褐色 中核灰黒色	やや粗	良好	
(5)	広口壺	口 径 16.4	水平近くに開く口縁部。端部は下に肥厚し、 広い面を作る。側面には2条の内縁・竹管押 江内形浮文(4個残存)を貼る。 ヨコナデ。	明褐色～ 赤褐色 中核灰黒色	やや粗	良	表面刻施
(5)	複合口縁部	口 径 19.7	2段に外反する口縁部。端部は上方へつま み上げ。側面は凹線状の凸みが一列する。屈 曲部にへらによる刻目。 内面横へラミガキ後。ヨコナデ。	暗赤褐色～ 黄茶色	密	良好	

遺物番号 調査区名	器 種	寸法 (cm)	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼成	備 考
29 (5)	大型鉢		内湾がみに立ち上がる口縁部。端部は丸く 外側へラミガキ・内面ナデ。口縁部ヨコナ デ。	淡赤褐色 中層灰黑色	やや粗	良好	
30 (2)	甕	底 径 4.2	突出する平底。外底面中央には窪み(径0.7 cm・深さ0.2cm)を有する。 外面タタキ(3条)・内面ナデ。	赤褐色 内面灰黑色	やや粗	良好	
31 (3)	甕	底 径 3.7	突出する平底。体部の張り強い。 外面タタキ(3条)・内面ナデ。	赤褐色 内面灰黑色	やや粗	良好	
32 (4)	甕	底 径 4.1	突出しないドーナツ状の底部。 外面タタキ(3~4条)・内面ナデ。	赤褐色 内面灰褐色	密	良好	
33 (5)	甕	底 径 2.2	体部からあずかに突出する平底。 外面タタキ(3条)・内面ナデ。	灰褐色	やや粗	良好	
34 (5)	甕	底 径 3	体部からあまり突出しない平底。 ナデ。	淡赤褐色	密	良	表面割傷
35 (5)	鉢	底 径 5	体部から突出する上げ蓋。外底面の窪みは 深い(1.0cm)。 外面タタキ(3条)・内面ナデ。	灰褐色	やや粗	良	
36 (5)	鉢	底 径 3.1	「ハ」の字形につまみ出される底部。端部は 水調整。 手づくお成形。	淡赤褐色	密	良	
37 (3)	甕	底 径 3.2	突出する平底。 外面ナデ、内面クモの櫛状工具の圧痕。	黄褐色 内面灰黑色	やや粗	良好	
38 (5)	甕	底 径 4.8	体部から突出する上げ蓋状。体部の張りは 強い。 底面窪みおさえ、外面へラミガキ、内面ナ デ。	茶褐色～ 暗赤褐色	やや粗	良好	黒斑あり
39 (3)	土 鉢	径 2.4 長さ 4.1 孔 径 0.9	太短い管状土鉢。 一部割傷、擦ずれ痕あり。	黄茶色	やや粗 チャット	良好	ほぼ完形
40 (5)	土 鉢	径 3 長さ 6.1 孔 径 0.8	管状土鉢。 一部欠損、擦ずれ痕あり。	灰黑色～ 黄茶色	やや粗	良好	ほぼ完形 黒斑?

第6調査区 第10層

遺物番号	器 種	寸法 (cm)	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼成	備 考
41	複合口縁甕	口 径 17.9	外反する口縁部に外縁する口縁部。端部は 外につまみ、へらによる刻目を施す。 外面へラミガキ・内面へラミガキ、口 縁部ヨコナデ。	暗赤褐色	やや粗 花崗岩粒	良好	黒斑あり
42	短甕	口 径 7.5 最大径 18.6 底 径 4.6 器 高 18.3	内湾がみの口縁部。端部外面に2条の凹線。 体部はソコバン形。底部は突出しない内底。 急き上げ成形。口縁部ヨコナデ。外面体部 へラミガキ。内面体部ユビオサエ。	明褐色 内面乳灰色	やや粗	良好	2/3残存 黒斑あり

植物番号	部 種	法量 (cm)	形 態 ・ 調 整 等 の 特 徴	色 調	粘 土	焼 成	備 考
43	高 杯	口 径 24.15	鈍い稜を持って外反する口縁部、端部は丸みのある面となる。 放射状ヘラミダキ後口縁部ヨコナデ、器面外部面輪ヘラミダキ。	明褐色～ 黄褐色	密	良好	
44	高 杯	口 径 24.5	鈍い稜を持って外傾する口縁部、端部は外へつまみ面となる。 ヨコナデ。	茶褐色	やや粗	良好	
45	高 杯	口 径 14.85	浅めの杯底部から稜を持って直立した後直線的に伸びる口縁部、柱状部は小突。 外面口縁部ヨコナデ・柱状部輪ヘラミダキ、内面杯底部・方向・口縁部稜方向ヘラミダキ。	茶褐色～ 緑赤褐色	粗	良好	備付者
46	高 杯	—	浅い半球形の杯底部、口縁部の接合部から欠損。 放射状ヘラミダキ。	灰緑色～ 茶褐色	やや粗	良好	
47	高 杯	別 径 12.5	外反がみに開く傾部、端部は下につまみ面を持つ。1孔残存。 外面放射状ヘラミダキ、内面ハケ(4条)。	緑赤褐色～ 乳褐色 内面灰褐色 中緑灰色	密	良好	備付者
48	高 杯	別 径 11.9	外反がみに開く傾部、端部は器内を減して丸く終る、内面にヘラミダキ記号文。 ヨコナデ。	灰青色～ 明褐色	やや粗	良	表皮剝離
49	高 杯	別 径 17	内湾がみに開く傾部、端部は丸みのある面ヘラミダキ、通部ヨコナデ。	乳褐色 中緑淡紅色	密	良好	
50	大型鉢	口 径 39.2	内湾して立ち上がる口縁部、端部丸く終る。 ヨコナデ。	緑赤褐色	粗	良好	
51	大型鉢	口 径 32.9	直線的に伸びる口縁部、端部は器内を埋して丸みのある面を持つ。 ヨコナデ。	茶褐色	粗	良好	
52	小型鉢	口 径 10.7 底 径 3.1 器 高 8.0	開いた後内湾して立つ短い口縁部、体部は深い逆円錐形、底部は突出する平底。 2線附の分洞成形、外面タタキ(2～3条)。	淡褐色～ 灰灰色	粗	良	2/3残存 底面あり
53	甕	口 径 13.75	丸みのある「く」の字形の口縁部、端部は丸みのある面。 ヨコナデ。	淡褐色～ 赤褐色	やや粗	良好	備付者
54	甕	口 径 15.1	「く」の字形に屈曲した後水平近くに関く口縁部、端部凹線状の内湾、体部の張り強い。口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ(3条)内面ナデ。	淡赤褐色～ 淡灰褐色	密	良好	底面あり
55	甕	口 径 14.8 最大径 16.9	丸く屈曲する口縁部、端部は丸みのある面を持つ、体部の張りは弱い。 巻き上げ成形、口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ(2条)・内面ナデ。	黄褐色～ 淡赤褐色 内面灰黄色	密 チャート	良好	2/3残存 備付者
56	甕	口 径 16.7	外反がみに大きく開く口縁部、端部は面を持つ。 ヨコナデ。	茶褐色 内面緑灰色	粗	良好	底面あり
57	甕	口 径 17.2	外反した後外に稜を持って立ち上がる口縁部、側面には凹線状の凹みが一箇する。 ヨコナデ。	茶褐色～ 赤褐色	やや粗	良好	

遺物番号	器 種	法量 (cm)	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	成 成	備 考
58	甕	最大径 22.8	倒卵形の体部。 3段階の分割成形、外面タタキ(3条)後脛部に散発的なハケ(8条)・内面縞ハケ(6条)。	茶褐色 内面黄褐色	粗 チャー)	良好	体部1/4残存 備付者
59	甕	底 径 2.8	体部から突出する平底。 外面タタキ・内面タモの縞状のナデ。	赤褐色 内面黒灰色	やや粗	良好	
60	甕	底 径 3.8	体部から突出する。 外面タタキ・内面ナデ。	赤褐色一 明褐色 内面灰色	やや粗	良好	
61	甕	底 径 4.4	体部から突出する平底。 外面縞ハケ(8条)。	黒灰色一 暗褐色	粗	良	
62	甕	底 径 4.8	体部からわずかに突出する上げ底状。 外面タタキ ¹⁾ ・内面エビナデ。	暗褐色	滑	良	備付者
63	甕	底 径 3.6	体部から突出する上げ底。 外面タタキ(4条)・底面縞線エビオサエ、 内面ナデ。	暗赤褐色 内面灰色	やや粗	良好	
64	鉢	底 径 4.2	高台状につまみ出される底部。 外面ナデ、底面縞線エビオサエ、内面タモ の縞状ハケ(10条)。	乳白色 中核黒灰色	滑 赤色酸化状	良好	
65	鉢	底 径 2.2	体部から突出しない円底。 外面ヘラナデ・内面ナデ。	乳白色 中核灰色	滑 赤色酸化状	良	

第7調査区 井戸

遺物番号	器 種	法量 (cm)	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	成 成	備 考
66	甕	口 径 15.8 最大径 17.95 底 径 4.6 底 高 20.2	内筒ぎみの口縁部、肩部丸く終る。体部は 中位で強る。底部は突出するド・ナツ状。 4段階の分割成形、口縁部ヨコナデ、体部 外面五稜タタキ(4条)・内面エビナデ・ナデ。	茶褐色一 赤褐色 中核黒灰色	滑 赤色酸化状	良好	1212定形 備付者
67	甕	口 径 17.55 最大径 21.95 底 径 4.5 底 高 24.1	丸みのある「く」の字形の口縁部、肩部丸み のある面、体部倒卵形、底部突出する平底。 3段階分割成形、口縁部ヨコナデ、外面体 部タタキ(3条)、外面縞部・内面ハケ(7-10条)。	灰褐色一 淡赤褐色	やや粗	良好	1213定形 備付者
68	甕	口 径 14.1 最大径 15.95 底 径 3.85 底 高 17	外反する口縁部、肩部は丸みのある面、体 部は倒卵形、底部は突出する上げ底状。 3段階分割成形、口縁部ヨコナデ、体部外 面タタキ(3条)・内面ハケ(5-6条)。	黄褐色一 灰褐色	やや粗	良好	1214定形 備付者
69	甕	口 径 14 最大径 16	外反ぎみの口縁部、肩部はつまみ上げ面を 持つ。体部は倒卵形。 3段階分割成形、タタキ出し口縁、口縁部ヨ コナデ、外面タタキ(2条)・内面ハケ(4-6条)。	黄褐色一 灰褐色	粗	良好	1/3残存 備付者
70	甕	口 径 16	「く」の字形に外反する口縁部、肩部は外反 する面を持つ。体部の強りは強い。 タタキ出し口縁、口縁部ヨコナデ、外面タ タキ(2条)・内面ハケ(7条)。	明褐色	やや粗	良好	備付者
71	甕	口 径 12.8	直線的に伸びる口縁部、肩部は丸みのある 面を持つ。 ヨコナデ。	暗灰色	やや粗	良好	

植物番号	部 位	法 量 (cm)	形 態・調 整 等 の 特 徴	色 調	胎 上	成 果	備 考
72	葉	口 径 14.2	「く」の字形に外反する口縁部。端部は器内を減じ、つまみ上げぎみとなる。口縁部ヨコナデ、外面タタキ(2条)、内面ナデ。	淡赤褐色	やや粗	良好	
73	葉	F1 径 16.8	外反する口縁部。端部は外側する面を持つ。ヨコナデ。	暗赤褐色	密	良好	種付者
74	葉	口 径性 17.6	「く」の字形に外反する口縁部。端部は丸みのある面となり、へうによる折角を持つ。口縁部ヨコナデ、外面タタキ(3条)。	灰褐色	やや粗	良好	
75	葉	F1 径 15.7	外反ぎみに立つ受口状口縁部。端部は外へつまみ出される。ヨコナデ。	暗赤褐色	密	良好	種付者
76	葉	口 径 17.35	「く」の字形に外反する口縁部。端部は立ち上がった後外へつまむ。ヨコナデ。	緑灰褐色	やや粗	良好	種付者
77	葉	F1 径 19.2	外反ぎみに弾びた後内折する口縁部。端部はわずかにつまみ上げられる。ヨコナデ。	淡茶褐色	密 器母	良好	種付者
78	葉	F1 径 22.4	内面ぎみに開く口縁部。端部は器内を減して尖りぎみに終る。ヨコナデ。	淡赤褐色 中粒灰色	密 赤色酸化皮	良好	種付者
79	葉	F1 径 13.6	垂直的に開く口縁部。端部は尖りぎみに丸く終る。ヨコナデ。	暗灰褐色 内面黒灰色	やや粗	良好	
80	葉	口 径 14.4	丸く外反する口縁部。端部は尖りぎみに丸く終る。タタキ出し口縁、ヨコナデ。	灰褐色 中粒灰色	粗	良	
81	葉	最大径 14.65 底 径 4.8	球形の体部。底部は突出する平底。2段階分層形成。外面・内面タタキ(3条)、内面ハケ(6条)。	暗赤褐色～ 茶褐色 内面黒灰色	やや粗	良好	体部2/3程 黒斑あり
82	葉	底 径 4.25	体部から突出する1段縁。外面タタキ(4条)・内面ハケ(10条)。	灰褐色 内面黒灰色	密	良好	
83	葉	底 径 3.5	体部から突出する1段縁。外面タタキ(3条)・内面ハケ(10条)。	暗赤褐色 内面黒灰色	密	良好	種付者
84	葉	底 径 4.4	体部からわずかに突出する平底。底面に本盤状。外面タタキ(3条)・内面ハケ(10条)。	灰褐色 内面黄褐色	やや粗	良好	
85	鉢	底 径 3.2 口径 0.8-1.2	体部からわずかに突出する尖りぎみの平底。口径に他成形の穿孔。外面タタキ(2条)・内面ハケ(7条)。	黄褐色	やや粗 チャーン	良好	
86	鉢	底 径 1.8	体部から突出しない小さな平底。外面底部器縁にヘラケズリ(下→上)・ヘラナデ、内面ハケ(8条)。	赤褐色～ 黒灰色	やや粗	良好	黒斑あり

器物番号	器 種	法量 (cm)	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼成	備 考
87	大甕鉢	口 径 28.7	内湾ぎみに立つ口縁部、端部は丸く終り、外に凹線状の凹みが一周する。注口を有する。体部に横方向のヘラズリ後ヘラズリ、口縁部ヨコナデ。	黄褐色～淡赤褐色	やや粗	良好	注口あり
88	短脚壺	口 径 14.2	「く」の字形に丸く屈曲する口縁部、端部は丸く終る。口縁部ヨコナデ、肩部衝おさえナデ。	明褐色 内面体部 淡黒色	やや粗	良好	
89	広口壺	口 径 17	水平近くに大きく開く口縁部、端部は下に拡張し、流状文を施す。ヨコナデ。	黄褐色	やや粗	良好	
90	高 杯	口 径 18.3	鈍い縁を持った後外反ぎみに開く口縁部、端部は外傾する面を持つ。外面口縁部ヨコナデ・杯部ハケ(8-9条)、内面口縁部・体部放射状ヘラミガキ。	茶褐色～ 塚赤褐色	やや粗 花崗岩粒	良好	黒斑あり
91	高 杯	—	中空の柱状部、3孔を有する。杯部の接合は円板状、外面ヘラミガキ、内面杯部ナデ・柱状部しぼり目・ヘラナデ。	黄褐色 杯底部 灰褐色	密	良好	
92	高 杯	幅 径 13.6	外反ぎみに開く口縁部、端部は丸みのある面を持つ。外面放射状ヘラミガキ、内面ハケ(7条)。	茶褐色	密	良好	
93	磁石?	幅 径 4.8 長 さ 11.9 厚 さ 3.8	長方形の川原石、一部欠損、敲打痕?有り痕、両面にあり。				
94	磁石	幅 径 10.1 長 さ 13.6 厚 さ 6.8	扁平な砂岩を感研して使用、使用面は1面ののみ、裏面は使用中・使用後に欠損か、使用面に赤色顔料付着。				

落ち込み

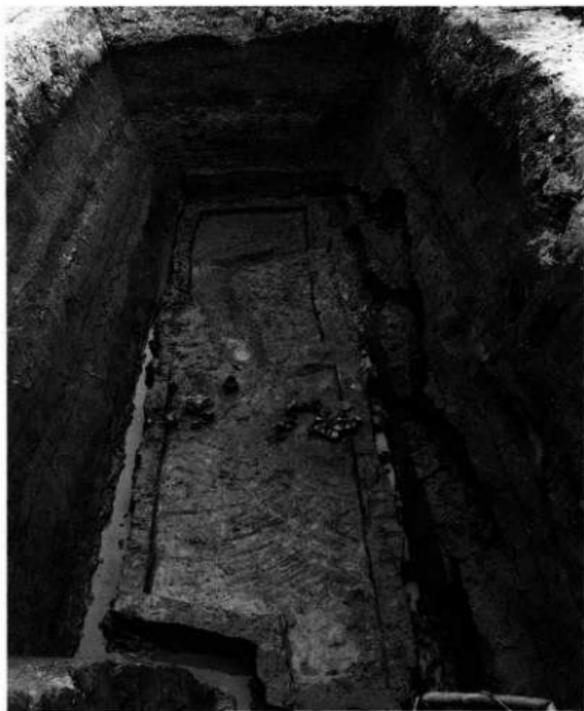
器物番号	器 種	法量 (cm)	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼成	備 考
95	壺	最大径 13.2 底 径 5.5	球形の体部、肩部は突出せずおしつぶされたような平底。3段階分製成形(接合部での欠損)、外面全体乱方向のハケ(5-8条)・内面エビナデ。	茶褐色	やや粗	良好	体部下半部 黒斑あり 底付着

第10層

器物番号	器 種	法量 (cm)	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼成	備 考
96	長脚甕	口 径 11	外傾する口縁部、端部は器内を成して丸く終る。外面にヘラ掃き記号文。端部ヨコナデ、外面縦ヘラミガキ、内面横ハケ(4条)。	明褐色	やや粗 花崗岩粒 赤色酸化粒	良好	黒斑あり
97	広口壺	口 径 17.5	直線的に開く口縁部、端部は下へ拡張して面を作る。下縁にヘラによる刷り目。ヨコナデ。	淡褐色	やや粗	良好	
98	広口壺	口 径 23.8	外反ぎみに開く口縁部、端部は下へ拡張して面を作る。裏面に流状文(半截竹管使用か)、ヨコナデ。	淡赤褐色～ 明褐色	やや粗	良	黒斑あり
99	手埴り形 土 器	口 径 13.1	体部から内湾して立つ口縁部、外面体部にヘラ掃き記号文。外面ヨコナデ、内面口縁部ヨコナデ・体部ハケ(8条)。	淡褐色	やや粗	良好	

遺物番号	器 種	法量 (cm)	形態・商標等の特徴	色 調	胎 土	地 成	備 考
100	壺	底 径 4.2	体部から突出する低い平底。 外底面に木炭痕、内面クモの巣状の工具痕。	淡棕色～ 黄茶色	やや粗	良好	
101	壺	底 径 4.2	体部から突出する平底。 外底面に木炭痕？ 外面ハケ・ヘラミガキ の痕跡。内面クモの巣状の工具痕。	黒褐色 内面灰褐色	密	良好	
102	壺	底 径 4.6	体部から突出する平底。 外面に工具痕、外底面に木炭痕・内面クモ の巣状の工具痕。	黒灰色～ 黒褐色 内面黄茶色	密	良好	黒斑？ 煤付着
103	壺	底 径 4.8	体部から突出する上げ底。 口縁光輝・外面体部ハケ(5条)・外底面ヘ ラズリ・内面体部クモの巣状のハケ(5～6 条)。	黄褐色～ 淡赤褐色	やや粗 チャーム	良好	体部の破片 あり
104	壺 台	—	筒形の体部からゆるやかに開く腹部。1孔 残存。 外側柱状部ヘラミガキ・裾部ハケ(9条)。 内面柱状部ハケ(10～11条)。	褐色褐色 裾部内面 灰褐色	やや粗	良好	
105	高 杯	総 径 12.1	中央の柱状部、裾部は直線的に大きく開く。 杯底部は深く凹む。3孔を有する。 外側放射状ヘラミガキ、裾部ヨコナデ、杯 底部ヘラミガキの痕跡。	暗赤褐色～ 黄褐色 杯底部 黒灰色	やや粗	良好	脚部完形
106	高 杯	底 径	外反して開く腹部。端部はつまみ上げて面 を弁る。1孔残存。 外面ヘラミガキの痕跡。	黄茶色～ 淡棕色	密	良好	
107	高 杯	底 径 22	内湾きみの腹部。端部は下へ尖りきみに終 る。 外面ハケの痕跡。	灰黄色～ 灰色	密	良好	黒斑？
108	上 鉢	径 2.6 長さ 5.75 孔 径 1.25	管状上鉢。口は楕圓形。 絶ずれ痕あり。へうによる歯取りで六角形 を呈する。	淡赤褐色	粗 花園管粒	良好	完形
109	上 鉢	径 3 長さ 5.7 孔 径 1	管状上鉢。孔は中心からずれる。 絶ずれ痕あり。	灰黄色	やや粗	良好	完形
110	磨 石	幅 7.2 長さ 18.4 厚 2.25	扁平な楕圓形を使用。使用面は一面。				
111	甕	口 径 14.8 最大径 18.2 底 径 4.8 高 23	口へ開く短い口縁部。端部は並列した脚部に 内縁を持つ。体部は楕圓形。突出しない平底。 口縁部ヨコナデ。外側体部全体ハケ(8条)・ 内面ヘラズリ(下→上)後ナデ。	黄灰色～ 淡棕色	やや粗 チャーム 石莖	良好	煤付着
112	甕	口 径 15.4	先みのある「く」の字形に類する口縁部。 端部は面を持つ。 口縁部ヨコナデ。体部外面ハケ(15～18 条)。内面ヘラズリか。	茶褐色	密 空母	良好	煤付着
113	甕	口 径 17.85 最大径 14.8	内湾する口縁部。端部はつまみ上げきみに なり先みのある面を持つ。 口縁部ヨコナデ。体部外面ハケ(6条)・ 内面ナデ。	茶褐色～ 赤褐色	密 空母	良好	
114	甕	口 径 14.1 最大径 14.8	「く」の字形に直線的に伸びる口縁部。端部 は器内を減じて尖りきみに終る。 口縁部ヨコナデ。体部外面タキ(2条)・ 内面ナデ。	明棕色～ 黄茶色	密	良	

器物番号	部 種	法量 (cm)	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	状態	備 考
115	甗	口 径 15 最大径 17.1 底 径 4.4 高 19.2	外反ぎみの口縁部、肩部はつまみ上げきみ、 腹部は胴形、底部は突出する上げ底状、 3段階分割成形。口縁部ヨコナデ、体部外 面タタキ(2条)・内面ナデ。	黄褐色～ 暗褐色	密 雲母	良好	ほぼ完形 黒斑あり
116	甗	口 径 14.1 最大径 18.7	「く」の字形の口縁部、肩部は尖りきみに丸 く終る。体部は球形？ 巻き上げ成形。口縁部ヨコナデ、体部外面 タタキ(2条)・内面縦溝のハケ(13～15条)。	淡褐色～ 灰青色	やや粗 赤色酸化鉄	良好	ほぼ完形 黒斑あり 煤付者
117	甗	口 径 14.85 最大径 17.9	外傾した後2段に屈曲する口縁部、肩部は 丸く終る。最大径はやや下にある。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ(2条)後 腹部に縦ハケ(7条)・内面ヘラケズリ(下→上)。	茶褐色 内面灰色	粗 花崗岩粒・ 角閃石	良好	2/3残 煤付者
118	甗	口 径 14.25	外反する口縁部、肩部は尖りきみに終る。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ(2条)。	暗赤褐色～ 淡褐色。	やや粗	良好	
119	小型鉢	口 径 8.85 底 径 2.1 器 高 4.8	逆円錐形。直口の縦口縁、肩部未調整、茶 尾は着しく突出する平底。 手つくぬ成形？ 外面ナデ、内面クモの黒 状ハケ(9～12条)。	茶褐色 内面黒灰色	密	良好	1/3残
120	小型鉢	口 径 12.1 底 径 3.8 器 高 6	逆円錐形。直口の縦口縁、肩部未調整、底 部に突出しない凹み底。 巻き上げ成形？ ナデ、内面底部にクモの 黒状ハケ(5～6条)。	茶褐色～ 淡褐色 中粒灰黑色	やや粗 赤色酸化鉄 石英・鉄石	良好	1/3残
121	鉢	口 径 16.8 底 径 4.2 器 高 10.4 孔径 0.5～0.9	逆円錐形。直口の縦口縁、肩部は外へつま まれる。突出平底に内外から発成前の傘孔。 口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	緑灰褐色 内面茶褐色	粗 花崗岩粒・ 角閃石	良好	2/3残
122	甗	底 径 4	突出するドーナツ状の底部、底面の形は 二くおずか。 外面タタキ(4条)・内面ハケ(12条)。	灰黄褐色	密	良好	
123	甗	底 径 4.9	突出する平底。 外面タタキ(2条)・底側面ハケ状工具で面 取り？内面ナデ。	暗赤褐色	やや粗	良好	煤付者
124	甗	底 径 4.2	突出する低い平底。 外面タタキ(4条)・内面ナデ。	暗褐色～ 黄褐色	やや粗	良好	
125	甗	底 径 4.8	突出する平底。 外面タタキの縦溝、底側面・内面ナデ。	暗赤褐色	やや粗	良好	
126	甗	底 径 3.4	突出しない平底。底面中央におわずかな凹み。 内面ナデ。	暗赤褐色	やや粗	良好	煤付者
127	甗	底 径 3.5	突出しない平底。 外面タタキ(3条)・内面ナデ。	黒灰色～ 黒褐色	やや粗	良好	
128	甗	底 径 5.2	突出ぎみの平底。 外面タタキ(3条)・内面ナデ？	暗赤褐色 内面黒灰色	やや粗	良好	
129	鉢	底 径 4.2 孔 径 0.8	突出ぎみの上げ底、底面に発成前の孔。 外面ナデ、内面ハケ(6条)。	黄褐色 中粒黒灰色	やや粗	良好	黒斑あり



第6調査区全景(西から)



同上遺物出土状況(南から)



第5調査区溝検出状況(東から)



第7調査区井戸検出状況(北から)



1



10



5



11



6



第5調査区溝2出土遺物



18



41



19



42



21



43



28



45



39

第5調査区溝2・第10層、第6調査区第10層出土遺物



52



93



55



94



58



108

109



95

第6調査区第10層、第7調査区落ち込み・井戸・第10層出土遺物



66



69



67



70



68



81

第7調査区井戸出土遺物



96



111



105



115



121



117

III 委託業務

(1) 八尾市立歴史民俗資料館の管理

1. 沿革概要

開館日 昭和62年11月8日

沿革 昭和59年1月 仮称歴史民俗資料館建設構想委員会設置

昭和61年7月 工事着工

昭和62年3月 工事竣工

2. 施設概要

敷地面積 1752.02㎡

延床面積 1192.50㎡

構造 鉄筋コンクリート2階建

主施設面積

室内1階	面積(㎡)	室名2階	面積(㎡)
展示室	202.500	研究室	119.918
取蔵庫	181.714	写場	34.850
作業室	93.735	図書室及資料室	78.840
くん蒸室	9.500	特別取蔵庫	40.000
管理室	37.196	ロービーその他	130.392
ホール	86.840		
その他	178.017		

3. 開館時間等

開館時間 午前9時～午後4時30分(入館は4時まで)

休館日 毎週月曜日の午後・火曜日及び祝日の翌日・年末年始

観覧料 大人200円・高大学生100円・小人50円(団体20人以上半額)

4. 公開展示

●開館記念展 テーマ『八尾の歴史と文化財』

期間 昭和62年11月8日から昭和62年12月26日まで

1. 「八尾のあけぼの」
2. 「原大和川流域の開拓」
3. 「古代豪族の活躍」
4. 「大陸文化の門戸 八尾」
5. 「戦乱の地 八尾」
6. 「寺内町の形成とキリシタン」
7. 「大和川の付け替え」
8. 「文明開化と八尾」の8つのテーマを設定し、「考古資料」「美術工芸資料」「古文書資料」「民俗資料」などを展示した以後、一部展示替えを行い常設展としている。

5. 利用状況

開館日数			11月	12月	1月	2月	3月	合計
			21	22	20	24	25	112
有料 観 覧 者 数	個 人	大人	884	236	167	214	271	1772
		学生	53	12	9	9	16	99
		小人	275	136	100	98	132	741
		計	1212	384	276	321	419	2612
	団 体	大人	628	74	0	31	224	957
		学生	0	0	0	20	0	20
		小人	79	18	0	6	0	103
		計	707	92	0	57	224	1080
	小計		1919	476	276	378	643	3692
	招待・ 減免関係	大人	150	158	76	76	147	607
学生		0	0	0	0	0	0	
小人		233	391	528	87	350	1589	
小計		383	549	604	163	497	2196	
総合計		2302	1025	880	541	1140	5888	

6. 普及活動

(刊行物) 図録「八尾の歴史と文化財」

(文化財講座) 古文書入門講座 4回 受講者32名

第1日 2月21日「異体字・俗字を読む」

第2日 2月28日「 " 」

第3日 3月6日「村方文書を読む」

第4日 3月13日「 " 」

(2) 環山楼の公開

① 週2回(水・土)の公開

延べ 106日公開

入場者 延べ 1329人(1日平均12.5人)

② 催物のための公開

イ、八尾まつりに協賛しての公開

日 時 昭和62年9月13日(日)

午前9時30分～午後4時

入場者数 266人

③ その他要請に応じた公開

イ、「障害者のための史跡めぐり」

主催者 高井田障害者センター

日 時 昭和62年7月12日(日)

ロ、「上海市友好代表団茶席接待」

主催者 八尾市

日 時 昭和62年9月13日(日)

ハ、「史跡めぐり」

主催者 柏原ふるさとと親しむ会

日 時 昭和63年3月13日(日)

(3) 建造物の調査

① 富士紡績㈱八尾工場建造物調査

近畿大学理工学部建築史研究室に委託して富士紡績㈱八尾工場の調査を行い、報告書を作成した。

IV 啓発普及事業

(1) 出版物の刊行及び頒布

- ① 跡八尾市文化財調査研究会報告13 萱振・老原・東郷遺跡発掘調査概要
- ② 跡八尾市文化財調査研究会報告14 昭和61年度事業概要報告
- ③ 跡八尾市文化財調査研究会報告15 小阪合遺跡発掘調査概要IV
- ④ 旧帝國製糸八尾工場の明治建築

(2) 文化財講座の開催

- ① 「古代からのメッセージ1ー最近の発掘調査成果からー」
日 時 昭和62年9月19日(土) 午後1時30分～3時
場 所 山本労働会館
講 師 東大阪市教育委員会 原田 修氏
- ② 「古代からのメッセージ2ー最近の発掘調査成果からー」
日 時 昭和62年9月26日(土) 午後1時30分～3時
場 所 山本労働会館
講 師 跡大阪文化財センター 赤木克視氏
- ③ 「古代からのメッセージ3ー最近の発掘調査成果からー」
日 時 昭和62年10月3日(土) 午後1時30分～3時
場 所 山本労働会館
講 師 柏原歴史資料館長 竹下 賢氏

(3) チビッコ文化財夏期学級の開催

日 時 昭和62年8月8日(土)9日(日) 午前10時～12時30分
場 所 曙川コミュニティセンター
内 容 火おこし道具作りと火おこし体験
参 加 者 13組(親子で参加)

(4) 出土遺物等の展示

テ ー マ 「八尾を語る」ー市内で発掘された文化財ー
期 間 昭和62年9月30日(水)～10月12日(月) 午前10時～午後6時
場 所 市民サービスコーナー
展示内容 昭和61年度に調査を行った市内遺跡(小阪合・矢作・八尾南・萱振遺跡)の紹介と出土品の展示及び発掘調査・内業整理作業工程についてのパネル展示

入場者数 延べ969人

(5) 八尾南遺跡現場公開

日 時 昭和62年12月18日(金)19日(土) 午前10時～午後4時

見学者 136人(市内106名・市外30名)

(6) 土器づくり講習会

市立桂小学校の依頼を受け、土器づくりの講習を行う。

日 時 昭和62年6月6日(土)・13日(土)・23日(火)

対 象 6年生 71名 教諭6名

V その他

(1) 「第5回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会」の協賛

主 催 財大阪文化財センター

日 時 昭和62年10月3日(土)4日(日)

場 所 府立労働センター

(2) 「第11回近畿旧石器交流会」に参加

主 催 近畿旧石器交流会

日 時 昭和62年11月28日(土)29日(日)

場 所 藤井寺市立市民総合会館

内 容 八尾南遺跡出土(昭和59年度調査)の石器についての概要報告と出土品の展示

(3) 「大阪府の古鏡展」に出品

主 催 大阪府教育委員会

日 時 昭和62年12月8日(火)～昭和63年3月27日(日)

場 所 府立泉北考古資料館

出 品 八尾南遺跡出土の小型仿製鏡

(4) 奈良国立文化財研究所主催の研修会に参加

「埋蔵文化財発掘技術者特別研修・報告書作成課程」

日 時 昭和62年6月24日(木)～6月26日(金)

VI 受贈図書一覧

団 体 名	書 名
北海道 上ノ国町教育委員会	史跡上之國御山館跡調査概報 新村4遺跡 大信沢A遺跡 上ノ国漁港跡調査概報
群馬 山武考古学研究所	中島遺跡 前山遺跡
千葉 山武考古学研究所	谷津坂遺跡発掘調査報告書 山武町聖人塚 山武考古学研究所年報No. 4 下尾敷遺跡発掘調査報告書 毛尻遺跡発掘調査報告書
鳴千歳県文化財センター	大井東山遺跡・大井大畑遺跡 額河川手賀沼河川浄化に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
群馬津都市文化財センター	千葉市小中右邊跡 千葉都市計画道路3・4・43号額辺茂呂橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 境遺跡 真里谷城跡 嵐谷上・野間木ノ古墳 塚原遺跡 下中郷塚 品子台遺跡 本名輪遺跡 東郷古遺跡 (川原寺廃寺) 富津火力線用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 上総藤州地内埋蔵文化財発掘調査調査報告書 中穴遺跡 三箇遺跡群Ⅱ 年報No. 3 年報No. 4 清西遺跡群発掘調査報告書
木更津市教育委員会 埼玉 早稲田大学	早稲田大学本庄校地埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ 同上2
神奈川 神奈川県教育委員会 神奈川県立埋蔵文化財センター	神奈川県埋蔵文化財調査報告書29 六久保遺跡Ⅰ 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15 日向南新田遺跡 同上16 泥牛庵跡やぐら群 一つ山遺跡 神奈川県立埋蔵文化財センター年報6

山梨

山梨文化財研究所

善門寺遺跡 湯島園場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
長崎神社内遺跡 付・昭和町の埋蔵文化財分布調査報告
山梨文化財研究所報 第1号
同上 第2号
同上 第3号

静岡

静岡県埋蔵文化財調査研究所
湖西市教育委員会

研究紀要Ⅰ
長谷元屋敷遺跡発掘調査報告書
33k富士石化管津線一部増強工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
内笠ノ子第64号宮跡遺跡発掘調査報告書

愛知

愛知県埋蔵文化財センター

年報 昭和61年度
愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第1集 石堂野遺跡
同上 第2集 土田遺跡
埋蔵文化財愛知 第9号
同上 第10号
同上 第11号
同上 第12号

愛知県教育委員会
一宮市博物館

愛知県埋蔵文化財情報2
一宮市博物館だより

石川

金沢市教育委員会

金沢市美本ジフリ遺跡・ヒガシウラ遺跡 金沢市文化財紀要66号
金沢市押野西遺跡 同上67号
金沢市千木ヤシキタ遺跡 同上68号
昭和61年度金沢市埋蔵文化財調査年報 同上69号

石川縣埋蔵文化財センター

善正寺遺跡
石川縣立埋蔵文化財センター所報 第22号
同上第23号
同上第24号
同上年報第7号
金沢市雲舞A遺跡(Ⅱ)
富山山遺跡
富東山遺跡
米北岡福寺遺跡
古竹遺跡
小松市中海遺跡
牧地及橋渡遺跡
永町ガマノマガリ遺跡
加賀市藤原遺跡

福井

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
武生市教育委員会

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅰ
愛宕山遺跡群Ⅰ 武生市文化財調査報告書
土子保室跡群 同上Ⅳ
小丸城跡 同上Ⅴ
新町遺跡 同上Ⅵ
武生市杉町遺跡の採集遺物について「福井考古学会会報第18号」抜刷
高倉遺跡発掘調査概報Ⅰ 武生市埋蔵文化財調査報告Ⅰ
高森遺跡Ⅰ 同上Ⅱ

滋 賀

滋賀県埋蔵文化財センター

八日市市教育委員会

京 都

府京都府埋蔵文化財調査研究センター

神京都市埋蔵文化財研究所
助長岡京市埋蔵文化財センター

綾部市教育委員会

長岡京市教育委員会

大山崎町教育委員会
大阪大学文学部国史研究室
精華町教育委員会
京都大学文学部博物館
立命館大学

大 阪

大阪府教育委員会

滋賀埋文ニュース第88号

同上 第90号

同上 第91号

同上 第92号

同上 第93号

同上 第94号

同上 第95号

同上 第96号

埋蔵文化財発掘調査報告書
八日市市文化財マップ

京都府埋蔵文化財情報第22号
太田遺跡 京都府遺跡調査報告書第6冊
京都府埋蔵文化財情報第23号
京都府埋蔵文化財情報集第1集
京都府遺跡調査概報第13冊
同上20冊
同上21冊
京都府遺跡調査概報22号
景初四年鏡と芝ヶ原古墳 鏡と古墳
京都府遺跡調査概報15冊

同上23冊

同上24冊

同上25冊

京都府埋蔵文化財情報第24号

第6回小さき屋敷会

京都府遺跡調査報告書第3冊

同上 第7冊

京都府埋蔵文化財情報第25号

京都府遺跡調査報告書第8冊

京都府遺跡調査概報第26冊

京都府埋蔵文化財情報第26号

昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要

長岡京市埋蔵文化財センター年報昭和60年度

同上59年度

綾部市文化財調査報告第12集

同上第13集

同上第14集

長岡京市文化財調査報告書第17冊

同上18冊

鳥居前古墳 大山崎町埋蔵文化財調査報告書第6集

鳥居前古墳

(仮称)精華ニュータウン子之地内遺跡発掘調査報告書

京都大学文学部博物館図録

立命館大学文学部宗芸以課程研究報告第1冊 鴨谷東1号墳第1次発掘調査概要

大塚西遺跡発掘調査概要

大塚西遺跡発掘調査概要 松原市南町所在一

神大阪府埋蔵文化財協会	河内西部地区墓地開発事業に伴う寛弘寺遺跡発掘調査概要目録編遺跡 昭和61年度発掘調査成果展—京州の遺跡— 阪南丘陵埋蔵文化財試掘調査報告書 第5回近畿地方埋蔵文化財研究会資料 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1986年度版 摂津豊中大塚古墳(2冊) とよなか探訪—ふりり史跡たずねて— 野畑遺跡
吹田市教育委員会	昭和61年度埋蔵文化財緊急発掘調査概要 吹田市文化財ニュースNo. 8
茨木市教育委員会	昭和61年度発掘調査概要I 同上 II
高槻市教育委員会	高槻城三ノ丸跡発掘調査概要報告書 岨上郡跡跡発掘調査概要II
枚方市文化財研究調査会	枚方市文化財年報 枚方歴史ガイドトレイルマップ
寝屋川市教育委員会 大東市北新町遺跡調査会	高宮八丁遺跡—寝屋川郡役所庁舎建設に伴う発掘調査概要報告書— 大東市北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書(府営四茶畑住宅建替にともなう埋蔵文化財発掘調査)
東大阪市教育委員会	橋手遺跡・若江遺跡の調査—昭和61年度東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要28
東大阪府文化財協会	鬼虎川の本質遺物—第7次第4冊— 協会ニュースVol. 3 No. 1 同上No. 2 協会ニュースVol. 1、2 No. 2 久宝寺遺跡 発掘20年のあゆみ 協会ニュースVol. 2 No. 3 同上No. 4 新江遺跡第25次発掘調査報告 西の口遺跡第1次発掘調査概要 鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告 八尾の石仏 八尾の石造美術シリーズ1 八尾市文化財紀要2 東郡遺跡第23次埋蔵文化財発掘調査概要 八尾市文化財調査報告13 八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書I 同上14 同上II 同上15
八尾市 大阪経済法科大学花園山遺跡学術調査会 大阪府教育委員会	八尾百景 花園山遺跡II 第2次調査終了報告— 大阪府文化財地回昭和61年度 昭和58年度大阪府内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 昭和59年度同上 昭和60年度同上 史跡 龍渡宮跡 大阪府文化財年報 別冊3 巻火7号 同上8号 同上9号
神大阪府文化財協会	

松原市教育委員会
美原町
河内長野市教育委員会

堺市博物館

泉佐野市教育委員会

阪南町教育委員会
泉南市教育委員会
大阪府公文書館
大阪府立泉北考古資料館

奈良

奈良国立文化財研究所

奈良市教育委員会

大和郡山市教育委員会

大塚市教育委員会

平群町教育委員会

兵庫

尼崎市立地域研究史料館
尼崎市立文化財収蔵庫
三田市教育委員会
宝塚市教育委員会

巻大10号
同上11号
同上12号

松原市遺跡発掘調査概要 昭和61年度
美原町史第 3巻(史料編Ⅰ)
河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
川上地区の民話
知報Ⅵ

特別展 漁具の考古学—きかをとる—
栢波藤室寺—86—4区の調査—
昭和61年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ
阪南町埋蔵文化財報告Ⅳ 阪南町埋蔵文化財発掘調査概要
海会寺—海会寺遺跡発掘調査報告書—
大泉あ かいふず第 3号
冬期特別展陽邑 泉北資料館だより26
春期特別展大泉府下昭和60年度発掘調査成果展 同上27
昭和60年5月大泉府の発掘調査 同上28
1986年度大阪府立泉北考古資料館の概要 同上29
船橋遺跡出土権品展 泉北考古資料館だより30
冬季特別展大泉府の古鏡展 泉北考古資料館だより31

昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概要

平城京左京区桑田坊一坪
埋蔵文化財ニュース58号
奈良国立文化財研究所年報1986
埋蔵文化財ニュース第55号
同上56号
同上57号

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和60年度
同上 昭和61年度
奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986
平城京東市跡推定地の調査Ⅴ
同上 V

奈良の文化財 古墳Ⅱ
若槻池発掘調査報告書
郡山城遺手向跡・多門橋発掘調査概要報告書
平城京西一坊大跡発掘調査概要報告書
長塚遺跡発掘調査概要報告書
大和郡山市遺跡地区

熊鷹遺跡(第2次)一弥生時代から鎌倉時代遺跡の調査 大塚市埋蔵文化財調査報告第 3 集
平群町甘口山(初香山)遺跡 昭和60年度発掘調査概要
生物上・土中の土壌 重要有形民俗文化財調査報告書

尼崎市史第11巻(別編Ⅱ)
尼崎市中ノ田遺跡Ⅱ 尼崎市文化財調査報告第18集
天神遺跡 三田市文化財調査報告第 3 集
小浜の町家 宝塚市文化財調査報告第21集
中山荘園古墳発掘調査報告書 同上第19集
宝塚の植物Ⅰ草花(百合花類)同上第20集

豊岡市教育委員会	宝塚の植物Ⅱ 草花(雑草花類)宝塚市文化財調査報告第22集 同上Ⅲ 草花(菓子菜類)同上第23集 宝塚の古墳 宝塚市文化財資料5 たからづかの道標 同上6 宝塚の文化財ガイドマップ 同上7 北瀬古墳群・立石塚墓群 日蓮・正福寺古墳六墓群 口徳・備後衆山古址
岡山 岡山県古代官衙文化財センター	カキ谷B古墳群1号墳 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告64 所報古墳 第3号
島根 島根大学附属図書館	山陰地域研究(伝統文化部門分冊)第3号
山口 山口大学埋蔵文化財資料館	山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ
福岡 北九州市立考古博物館	「北九州の横穴墓」展
宮崎 宮崎県野尻町教育委員会 宮崎県総合博物館	東城原第1・2・3遺跡 野尻町文化財調査報告書第2集 埋蔵文化財調査研究報告Ⅰ 陣内第2遺跡・庭ヶ池横穴墓群-遺物編-
鹿児島 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 水園学会 佐原 真 櫻井敏雄	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ 水園研究第9号 飲食史林 第7号 布忍神社本殿の建立年代と様式 松原市史研究紀要第1号 近世初期の春日造の墓本計画 佛教藝術170号抜刷(昭和62年1月) 自然神道の空間構成 大神神社大鳥居建立記念誌(抜刷) 神佛習合の建築-大神神社大直禰子神社社殿(旧大御輪寺本堂)を中心として「二輪流神道の研究-大神神社の神佛習合文化」

(財)八尾市文化財調査研究会報告16
八尾市文化財調査研究会年報
昭和62年度

発行 昭和63年12月

編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市清水町1丁目2番1号
0729-94-4700

印刷 有限会社 真 陽 社

(表紙 レザック66 (215kg))
(本文 マットアート (110kg))
(見返し 上 質 (90kg))

